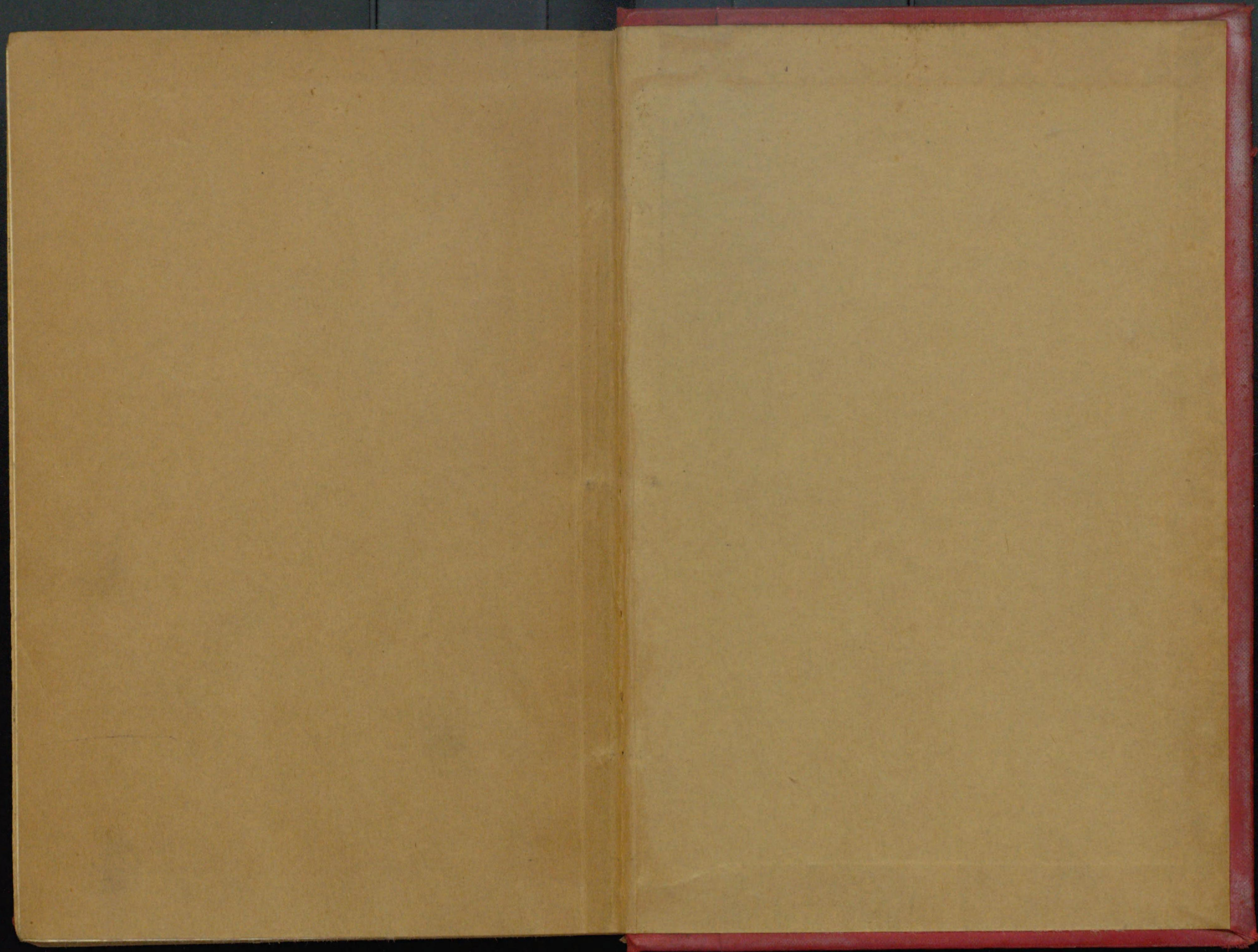


607-353

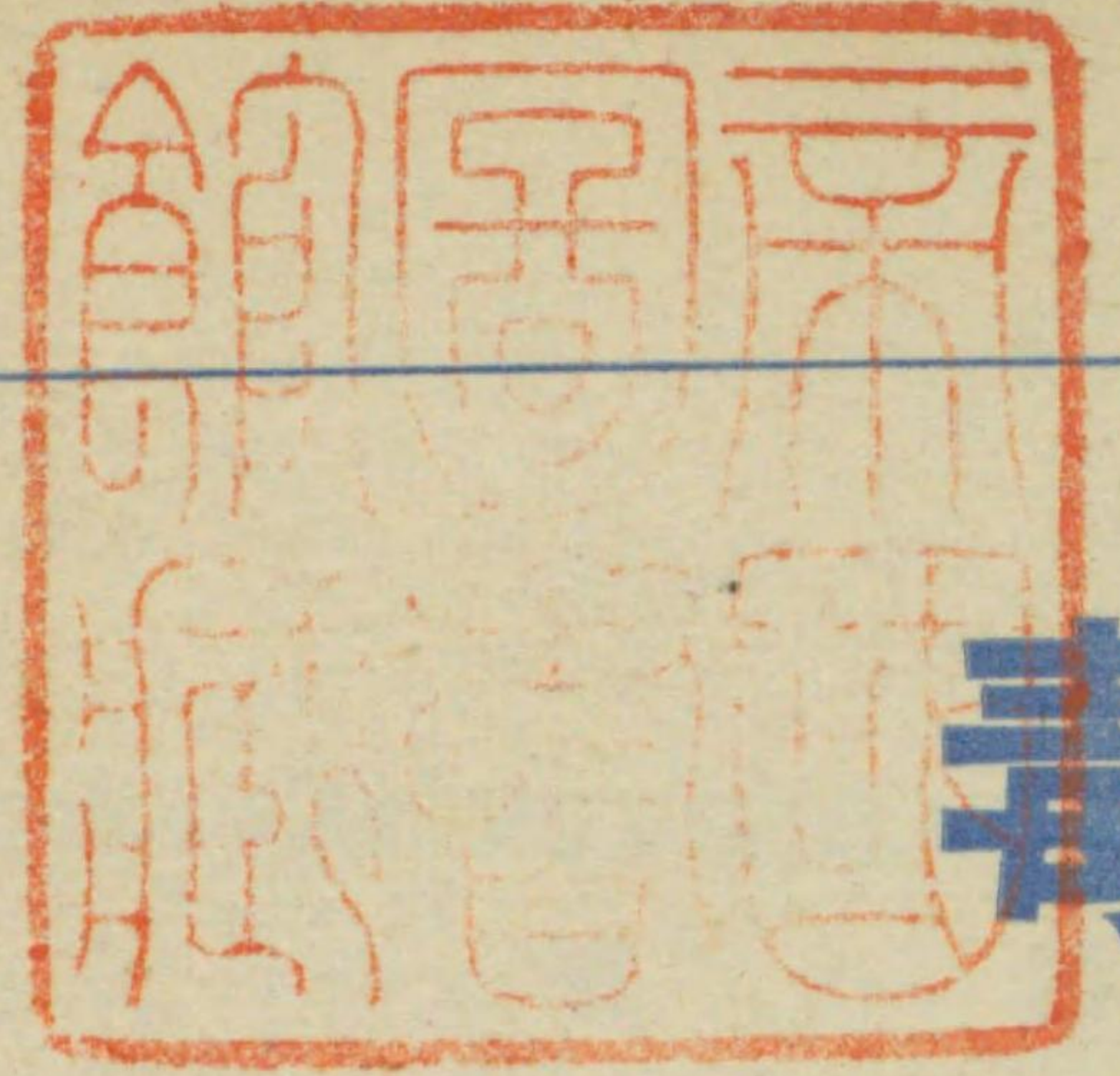


1200501532981





納本



毒唇

畑耕一

版社進先



607-353

或る反抗	妖術	山の祈り	光に立つ	奇禍	戀せぬ人	一つの道	挑戦	青い花	絶望から
.....
(二八九)	(二六〇)	(二三八)	(二二七)	(一七二)	(一一八)	(七一)	(四四)	(二五)	(三)

誓	(三一五)
最後の問題	(三四六)
メデユウサの首	(三六五)
父と子	(四二二)
物言はぬ瞳	(四五九)
滑稽な幽霊	(四八三)
疑ひ	(四九九)
闇は叫ぶ	(五四一)
この罪	(五七四)
地に繋がれて	(六一一)

絶望から

あやしく暮れてゆく空には、大地の果から吹きちぎられたかと思える重くしい雲が、まるでカラクリ仕掛けのやうに、後から後から飛んで行つた。六日につゞいた凶悪な暴風雨の名残か、雲は、ときどきすさまじいみぞれを落した。

いま灯ともつたばかりの秋田停車場には、旅に出る人々が、みんな寒さうに肩をすくめて、待合室にならんでゐた。暖爐には火が乏しかつたが、それでもぐるりをとりまいて、人々は押しあふやうに煙草をふかしたり、新聞をひろげたりしてゐた。みんな黙りこんで、それ／＼のあはたゞしい心に、落ちつかぬやうな迂散くさい顔を見かはしながら、小刻みからだをゆすぶつてゐる。みぞれがサツと吹きつけて、窓の硝子板をけたましく鳴らすと、彼等は一齊に不安げな眼をあげた。それでも彼等は、互ひにひとこと物言はうとはしない——改札口に懸つた赤い暴風雨の揭示板は、まだおどかし

足りないとのぞき出してゐる、魔物の首のやうにも思はれた。
 ズブぬれになつた自動車が一臺停車場の前に著いた。長い道を走りとほしたとみえて、四角な半身に泥を浴びてゐた。運転手が下りて扉をあけると、黒羅紗のオヴァ・コートの襟を立て、帽子を眼深

にかぶつた若い紳士が一人、手に小さな鞆をさげて、よろめくやうに現はれた。

「御苦勞だつた。」

ポケットから紙幣入れをぬき出して、十圓紙幣を一枚運轉手の掌に握らせると、彼は後をも見ないで一二等待合室に入り、椅子の隅へくづれるやうに腰をおろして腕時計を見た。

そこには五六人の旅客が、やつぱり黙り込んでゐた。どれもこの天候のために不機嫌にされて、てんでに勝手な方を向いたまゝ、新來者に眼をやらうともしなかつた。しかし、もし彼等の誰かどこの若い紳士を見たら、その幽霊のやうに蒼ざめた顔と、ジツと宙をにらんでゐる恐ろしげに血走つた眼とに、きつと薄氣味わるくなつて、席を遠ざかつたにちがひない。

「や、どうも、遠路のところお見送りがたじけない。」

「遠路のところを、わざわざ御會葬くださるか。」

「馬鹿。旅立ちに縁起でもないことをいふなよ。」

「はゝゝゝゝ！」

元氣のいゝ高笑ひ。賑やかな女下駄の音をまじへて入つて來た一群れ。——その二人ともはおなじやうにインベネスを、脂切つたからだにひきまはした大男で、七八人の見送りの藝者にとりまかれてゐる。

「ねえ。こんどはいついらつしやるの？」

「こんなところへ、二度とふたゝび來るもんか。まるで一週間といふもの、大荒れで宿にばかりひつこませてゐやがつた。」

「お蔭で事業はちつともはかどらない。手もなく秋田へ藝者遊びのお籠りに來たやうなものだ。馬鹿々々しい。」

「そのかはり御信心だけの御利益はさづけたつもりよ。」

「のうまくさんまんだあ婆あさんだあの利益じや、少々恐れるよ。」

「あら、あんな……おぼえてらつしやい。」

「はゝゝゝゝ！」

この一群のために、あたりは憑きものゝ落ちたやうに、景氣ついた。傍若無人に酔を吹いてゐる二人の男を、みんな面白さうに眺めた。

若い紳士は、靜かに立つて切符賣場に行つた。そこで上野行きの二等寢臺と急行券とを買つた。彼は再び席にもどらうとはせず、停車場の入口に立つて、空を見あげた。いつの間にか、みぞれはやんでゐたが、漆のやうに眞暗な果から果までを、風はますく／＼吼え狂つた。

石のやうに、彼は動かかなかつた。

待合室は、次第に人がふえて来た。

「ざまあ見ろ！」

「馬鹿！」

ギョツと我にかへつて、彼はその聲のはうを振り向いた。自動車の運転手と車夫とが、なにか争つてゐるのであつた。

「上野行き！ ×時×分、上野行き！」

改札口で切符をきりはじめた。

停車場とちがつて、車内は電燈もあかるく輝いてゐるし、蒸氣で暖められた空気が、さすがに人々の心を生れかほつたやうに快活にさせた。喫かした煙草の煙が、ゆるく立ちのぼつて、パツと天井ぢかくで雲母のやうに傘をひろげるのも、なんとはなしに氣輕な眺めのひとつとなつた。いま乗り込んだ旅客たちも、待合室にすくまつて押し黙つてゐたにひきかへ、急にものめづらしさうに顔をあはせて、挨拶をかはしたり會話をはじめるのであつた。

——だが一人、あの若い紳士だけは、一層帽子を眼深にひきさげ、外套の襟に顔を埋めて、寢臺車

の片隅に席をしめたまゝ、強く唇を噛んでゐた。

彼は恐ろしい宣告をまつ囚人のやうにも見えた。また、悪魔に魅入られた呪縛者のやうにも見えな。煙草一服喫むでもない、新聞一行讀むでもない。彼はいつまでも血走つた眼で、空間の一點を睨みつけてゐた。——彼のつく呼吸は、すべてが苦しい溜息なのであつた。

ほかの旅客たちの賑やかな談笑も、彼の耳には入らぬらしかつた。秋田から乗り込んだ例の二人の大男は、とうとう東京まで連れてゆくことにしたのか、藝者を二人左右に腰かけさせて、相變らず、あたりかまはぬ悪ふざけをしてゐたが、彼はその方へチラとも眼をやらなかつた。

ボーイが来て、ベッドをつくりはじめた。

彼はゆるやかな寢間著に著かへるでもなく、外套と上著をぬいただけで、すぐゴロリと横になりカーテンをひいてしまった。

轟々と闇の中を、まつしぐらにかける車輪の音——彼は眼をつぶつたが、到底眠られさうにもないらしく、いつまでも息ぐるしげに寝がへりばかりうつてゐた——

……黒い海……黒い浪……黒い雨……黒い風……

……黒いものが鳴り、叫び、とどろき、きしめく……

……「もう駄目だ！」……

……「短艇を！ 短艇を！」……

……「助けてくれ！ 助けて！」……

……「綱だ！ 浮帯だ！」……

……「もう駄目だ！ ポンプも駄目だ！」……

……黒いものが、泣き、わめき、罵り、笑ふ……

……「おれたちは誰を呪ふのだ！」……

……「おれたちは誰を恨むのだ！」……

若い紳士は、はぢかれたやうにベッドから半身を起した。つめたい汗が、額にも、胸にも、背中に
も氣味わるく滲み出してゐる。

悪夢か幻覚か——彼は暗いカーテンのなかで、セイ／＼喘いだ。すばやく上着を著ると、彼はすぐ
ベッドを飛び出して、よろ／＼と喫煙室のはうへ行つた。

旅客はもうみんな眠しづまつて、そこには誰もゐなかつた。彼は兩手で頭を抱へてグツタリと革張
りのクツションの上に身を投げ出した。

ふと、彼はそこに落ちた、客の読みさしらしい新聞に眼をやつた。なに氣なしにひろげたが、たち
まち「アツ」といつて、恐ろしいものに觸れたやうに、それを投げ出してしまつた。彼は喫煙室から

逃れて、またベッドへ歸らうとした。——が、どうすることもできない力に、襟がみをつかまれたや
うに、新聞のはうへひきもどされた。

勇氣をふるつて、彼は再び新聞をとりあげた。

——「沈みゆく船に殉じた雄康丸船長」と一號活字の見出しになつた記事が、二段ぬきの寫眞とともに
に掲せられてゐた。——秋田土崎港外で、大暴風雨の夜坐礁沈没した二千五百噸の雄康丸の船長、菅
見繁太郎氏が、舷側からほとぼしり入る怒濤を見つめながら、ボートへ避難せよとすゝめる船員の言
葉に耳もかたむけず、ブリツヂに立つたまゝ右腕に綱をまいて、従容と警笛を鳴らしつゞけた悲壯な
最期が、胸にせまるやうな筆で報告されてある。

……「誰を呪ふのだ！」……

……「誰を恨むのだ！」……

どこからともなく、凄い聲が彼の耳底にすどく響いた。

一夜中、マンジリともあはさなかつた目ぶたは、赤く脹れあがつてゐた。苦惱と興奮とに疲れはて
た彼は、列車が上野驛に到着した時、まつたく魂のぬけた人間のやうに、フラ／＼とブラツトフオ

ームへおりました。

「君塚君！」

「お、旦那様！」

彼とは同年輩か、紺色のオヴァ・コートを着た、見るから快活で剽軽らしい紳士が、ごましほ頭
の、頑丈な老僕風の男といつしよに、彼の前に駆けよつた。

「多分昨夕出發つたことと思つたが、電報ひとつつてくれないので、今朝から良助と二人で、プラ
ツトフオームに張り番さ！」

「旦那様、高柴様とほんたうにお待ち申してをりました。お家ではどんなにか御心配でございます。
でも、早くよくお歸りなさいました。」

彼は元氣よく握手する紳士に、淋しい無言の微笑をもつてこたへた。良助と呼ぶる爺は、うれし
氣に彼の左手にさげた靴をひき取つた。

三人は改札口のはうへ、雑沓にまぎれながら歩いた。

「君塚君。あつちはどうだつたね。ひどく寒かつたらう。——東京も昨日からだしぬけに寒くなつた
よ。昨夕は初霜が下りてね、僕の住んでる三階からは、街の家根が白くキラ／＼見えて美しかつた。
しかしアパートメントの窓からぢや、どうも俳句にはならんかつたね。」

「……」

彼はなにかいはうとしたが、すぐうなだれて歩を續けた。

「ほかに荷物はないのだらう？……すぐ良助に自動車を雇つてもらはう。今日はべつに僕も用事はな
いから、いつしよに君の家に行つて、午飯の御馳走になるつもりだ。」

「……是非さうしてくれたまへ……いろ／＼話がある……高柴君、君にばかりは聞いてもらひたい話
なんだ……」

彼は、やつと口をきつた。

三人は人々に押されながら、改札口を出た。

「旦那様。では、自動車を呼んでまゐりますから。」

良助は急いで構内を出て行つた。

「實際、あの男は忠實無類だね。」と、高柴は感心したやうに、良助のうしろ姿を見送りながら、「二人
で君を待つてゐる間にも、旦那様は、ほんたうに今朝の汽車でお歸りなさるでせうかと、オロ／＼し
てゐるのだ。大丈夫歸る。この高柴元雄が、昨夜から由井正雪そこのけの天文を案じて、君塚靖也君
が今朝はたしかに歸つて來ると感じたのだから、はづれつこはないといつてやると、まづ正直にそれ
をうけて、大喜びなんだ。それが君、一番列車に君の姿が見えないんだらう。大正の張孔堂、はなは

だ怪しくなつて来たところを、この二番目の汽車に君がゐてくれたから、まづ／＼僕の面目がたつた譯だよ。君がこの汽車で歸らなけりやあ、良助は夜までも頑張りとほす意氣ぐみだつたらしいよ。はは、うー！」

「……さうだつたか……」

君塚靖也は、思はず涙ぐんだ。

良助が鞆をかゝへながら走つて来た。

「旦那様、高柴様、自動車を雇ひました。」

「さうか、御苦労だつた。」

靖也は高柴といつしよに、構内を出た。

自動車は、機關を鳴らしてゐた。

「さあ、君塚君。」

高柴はうながした。

「では、わたくしは電車で……」

良助は頭をさげた。

「なに、みんないつしよに乗つて歸るんだ。この自動車なら五人は乗れるんだからな。」

「いえ、わたくしは電車でたくさんでございます。」

「構はん、いつしよに乗るんだよ。電車で歸るのは無駄だ。さあ、良助、みんなで景氣よく歸らう。」

高柴は良助の手をとつた。

その時、一臺の自動車が、勢ひよく警笛を鳴らして飛んで来た。

「靖也さん……！」

自動車の窓から、妖艶な顔のぞき出した。

靖也は不快そうに振りむいたが、それでもちよつと帽子をとつて目禮した。

自動車から下り立つた、極端に色彩と光澤とを強くする好みの女の姿は、まるで地上に噴いた虹のやうに、あかるく輝かであつた。やはらかに長くほかされた眉毛、輕さうに動く眼ぶた、整つた鼻――

魅入るやうな美しさがそこにあつた。たゞジツと見てゐると妖しくつめたいものは、その眞つ赤な唇であつた。それは紅のやうな植物性の赤さでなく、飽くまでなま／＼しい動物性の赤さであつた。そしてこの眞つ

た。血をすゝつた唇――たしかに、かうとよりほかに形容のできぬ赤さであつた。そしてこの眞つ

赤な一點が、彼女の美しさのすべてに、なにか妖しい或る影をひろげてゐるのであつた。

「靖也さん。わたしもお迎ひに来たのよ。時間表を見て、たしかに今朝のこの二番の汽車にちがひな

いと直覺したのだわ。……そしてどうでせう。ちやんとわたしの直覺はあたつてしまつた。」

得意らしく彼女は笑つた。

靖也は黙つて、それにこたへやうともしなかつた。

「どうしたの？ 靖也さんわたしはいつもの寢坊の慣例をやぶつて、かうして駈けつけてあげたのに……御苦労さまとか、御親切さま位、お禮をいつて貰ひたいわ。」

「……………」

「いや、龍子さん。しばらくでした。」と、高柴はすぐ靖也の或る心持を感じて、話の穂さきをこつちに引きとつた。「實は僕も、昨夜アパートメントの屋上庭園で雲氣を考へて、今朝の汽車だらうといふ卦を得たのですが、一番汽車から待つた譯で、そこまでの天眼通ではありませんでしたよ。はゝゝゝゝ。」

「おや、高柴さんもお迎ひにですか？」

「ええ。迎ひといふよりは探しにといつたほうがいゝかも知れません。……どうも君塚君と來たら、秋田へ出發つたのも人に知らさず、こんど歸るのにも電報ひとつうたすから、一時はどうしたのかと、みんなひどく心配しましたね。迷ひつゝ兒の保護願ひでも出さうかといふ騒ぎでしたよ。」

「……お家でも心配してゐらつしやいますから、早くお歸りになつては……。」
良助はうしろから口を出した。

「おゝ、そうだ。自動車も待つてゐるし……君塚君、さあ、歸ることにしやうか。」

「まあ、高柴さん。」と、彼女はあわてゝ遮つて、「わたし、まだひとことも靖也さんとはお話してゐないぢやないの。」

「龍子さん、君塚君はこのとほり顔色もわるく、まったく疲れきつてゐます。今日は家に歸るとすぐ寢せてしまふつもりでゐるのです。青山のやうな遠いところから、わざわざ迎ひにおいでくださったことは、君塚君に代つて、僕が感謝いたします。」

「あなたに感謝して頂いても、べつに難有くはないわ。わたしは靖也さんからなにかいつて貰ひたいのだわ。……靖也さん秋田へ行つて、船のことを調べたのでせう。父も心配してゐましたわ。なにしろあなたは責任感の強い人だから、どんなにか心を苦しめてゐらつしやるだらうつてね。しかし、相變らずあなたは臆病ね。船は新聞でも坐礁沈没と書いてゐるじやありませんか。そうすればすべての責任は船長にあることなんでせう。なにも、造船技師としてのあなたが、そんなところまで責任を感じなければならぬ必要はありません。自分の手から人に渡したものを、人が過失で毀したのになんか責任があるのでせう。そんなところまでも責任感が強いといふなら、あなたはもつとほかに、かうした責任を感じなければならぬものがある筈よ。」

龍子は、ほとんど靖也の手をとらんばかりに近寄つて、グン／＼いひたいだけのことをいつた。
靖也は飽くまで無言でゐた。

「まあ、そんなことは、こんなところで立ち話にもなりませんまい」と、高柴はまたなかに入った。

「立ち話でいけなければ、どこかこの邊のカフェーにでもゆきませう。そして……」高柴は眼で良助に合圖して、靖也を自動車に乗せてしまった。

「あら、靖也さん……」

龍子は駆け寄りとした。

「ほんとうに失禮ですが、君塚君はこのとほり疲れきつてゐますから……いづれまた……どうも難有う。」

高柴は靖也と良助のあとから、動きかけた自動車にヒラリと飛び乗った。

龍子は口惜しげにそれを見送った。

自動車が省線電車のガード下をくよりぬける時、高柴はうしろの硝子窓からのぞいて見た。

「おい、龍子さんが、まだデツとこつちを睨んでゐるぜ。……ふゝゝ、龍のあぎとを逃がれたる心地とは、まさにこれをいふのだね。」

靖也も黙つて笑つた。

「しかし君塚君、さつきも良助がいつたとほり、すゐぶん阿母さんは心配してゐられるよ。上野驛か

ら、二日ほど秋田へ行つてくる、突然無断で旅するのだが心配しないでゐてくれ、と君は速達で簡単な葉書を出したまゝ、出發してしまつたが、心配しないでゐてくれといつても、いつもの君の氣象から

どんなことをしに行つたのだらうかと、阿母さんの御心配はひととほりではなかつたよ。さつそく僕のところへ電話でお話しがあつたのだが、僕は、わざと事もなげに、なあと二日ほど旅をしてくるといふのなら、明後日は歸つてくるにちがひありません、もしその日に歸つて来なければ、僕が秋田まで追つかけてませうとなくさめて置いたのだ。……ほんたうに、君はどうも一本氣な熱情家だから困る。いや、その熱情は實は君の美點にちがひないんだが、しかし……」

高柴は、快活ななかに、戒めるやうな口調でいつた。

「ほんたうにすまなかつた。」

靖也は右手で額を押へた。

ふたりはそれ以上、話の内容をすゝめようとはしなかつた。高柴は自動車が本郷の高臺にのぼつて一高の裏手から、西片町なる靖也の家につくまで、ひとりで饒舌りつゞけた。

「唯今歸りました。」

と、高柴の元氣のいゝ聲を聞きつけると、母の康子は待ちくたびれたやうに飛んで迎へて、座敷へ導いた。そこには二つの伊萬里焼の皿に、西洋菓子と果物とを盛りわけたのが用意されてゐた。

「まあ、高柴さん、いろいろ難有うございました。」

「いや、小母さん、僕のいつたとほりでせう。ちやんと靖也君は今日歸つて来たぢやありませんか。」

高柴はドツカリと座蒲團の上に、あぐらをかきながら笑つた。

康子は、鞆を隅において、話の邪魔にならぬやう出てゆかうとする良助を呼びとめて、

「室田さんの方へすぐ電話をね……」

「阿母さん、なにもいま室田の叔父さんを呼ばないでも……」

靖也はくるしさに顔をあげた。

「いゝえ、叔父さんも大變心配していらしたのだからねえ。」と、康子は紅茶をつぎながら、「あの新聞記事を読むと、お前はまるで興奮してしまつて、一晩中眠りもしなかつた上に、あくる日は早くから家を出て、どうしたのかと思つてゐると、そのまゝ秋田へ出發したといふ報知なのだらう。どんなに心配したことか知れやしないよ。」

「君塚君、いつたい船はどうだつたのか……坐礁沈没とあつたが……」

と、高柴はバツトにマツチをすりつけながら靖也の顔を見た。

「……新聞紙の報じたとほり、坐礁沈没にはちがひなかつた。しかし……僕はそれだけの理由のもとに、僕の責任を回避しようとはしない。救助された船員の話によれば、操舵機に早く故障が起つたさ

うだし、船尾肋骨のあたりから思ひもよらぬ浸水があつたといふんだ……風浪で沈没の箇所へゆくこともできなかつたが、僕はなんだか自分に或る大きな責任を感じてゐる。そして僕は僕の技術の當然の責任の上からは、法律上の制裁をうけることも、決して辭まない。」

靖也は膝についた両手に、グツと力を入れながら、充分覺悟したやうにいつた。

「いけないな、どうも……君は、すぐそんなに例の生一本の熱情を出すから……こんな事件は、單なる興奮や熱情で、滅多な解釋をつけてはならないよ。……とにかく君は自重してくれなければ困る。」

康子も高柴の言葉をうけていつた。

「こゝだからいゝけれど、そんなことがこの際お前の口から世間に傳はると、それこそ將來お前のために、どんな誤解がひろがるかも知れやしない。ほんたうに、高柴さんのおつしやるとほり自重してくれないと……」

親友の高柴と、慈愛にみちた母の康子と、左右からこもく慰められた靖也は、眉宇の間にやゝ晴々しい色を見せた。が、それは彼の苦惱の底から反撥的に起つた、或る深い決心の輝きなのであつた。

「とにかく小母さん、僕はひどく腹が減りましたがね。」と、高柴はホツとひと息ついて「なにしろ、このむつかし屋さんを説得するのは、なか／＼大骨です。まあこれでやつと落ちついたが、こんどは僕の腹の蟲を説得してやらなけりやなりません。はゝゝゝ」

「僕も高柴の言葉をうけていつた。」

「おや、ほんたうに……もう一時を過ぎましたね。夢中で話してゐたものですから、飛んだ失禮を……ほ……ほ……唯今すぐこゝへ運びませう。」

康子も漸く安心して、足調も軽く座を立つた。

「……久しぶりで小母さんのお手料理が頂けるな。小母さんの三杯酢と來たら素敵だからな。あの腕前だけはまさに名人だよ。僕はどこの料理屋へ行つたつて、小母さんの三杯酢ほどのものを食つたことがない。あゝいふ料理鹽梅は君、決してグラムとか勺目とか、度量衡的にやつて出来るものでない經驗……といふよりは趣味性だね。いや人格だね。小母さんの三杯酢はまさに人格的調理法と稱すべきものだよ。」

高柴はどこまでも呑氣な言葉で、靖也の氣持をやわらげやうと努力するのであつた。

靖也はつくづく高柴の顔を見た。

「君はいつも屈托がなくていいなあ。」

「屈托とか思案とか執念とか妄想とかつて奴は、この高柴元雄にはまづ一生必要のないことらしいよ。僕の藝術生活はみづから「儘の藝術」と稱してゐるものなんだ。なんでも「儘」だ。自然のまゝ、ありのまゝ、考へるまゝ、學んだまゝ、その日の風の吹くまゝなんだ。悠々自適かね。シルレルの所謂「藝術は自由の胸から」といふそれなんだ。世間ではなんと批評しやうと、こつちは煙草を喫かす

て知らん顔だ。どうせ世間で奴は、褒めるもけなすも、出たとこ勝負でやつてゐるんだ。僕は氣儘に戯曲を書き、氣儘にそれを發表する。まゝの皮でやつた仕事を出たとこ勝負で批評する。これでどつちも屈托がない譯だ。……こゝだよ、君塚君。君はどうも眞つ正直に自分の思想なり感情なりで動きすぎるんだ。は……ま……あ……、そのうちだん／＼僕が薰陶して、「儘」の妙諦を會得さしてあげる。」

「すこし亂暴な理論のやうだが、いつかそのうち拜聴しよう。」

靖也ははじめて淋しげに笑つた。

康子がみづから膳部を運んで來た。

「阿母さん。いま高柴君が、あなたの三杯酢をほめて、人格的調理法だといつてゐましたよ。」

靖也は菓子皿のチョコレートを一つとつて、銀紙を剥がしながらいつた。

「おや、まあ……」と、康子は、それでもどこやら靖也に或る元氣がついて來たことをよるこびながら、「高柴さんはほんたうに三杯酢がお好きだから、今日は海鼠の三杯酢をつくつて置きましたよ。」

「海鼠の三杯酢！ おゝ神よ——これで今日といふ日の生き甲斐がございました。」

「ほ……ま……まあ、大變ですのね。」

襖を開けて、まるく肥つた、眼になんともいへぬ滋味をたへた老紳士が、案内もなくヌツと入つて來た。

「おや……」と、康子は中腰に振りかへつて、「靖也。室田の叔父さんがいらつしやつたよ。」
靖也と高柴が、なにかいふとする前に、老紳士は肩を揺るやうに、ドツカリ畳の上にあぐらをかいた。

「やあ、御馳走が出てゐるな……康子さん、わたしはビールを注文しますよ。あつはつはつは！ お、靖也君。秋田はもう雪が降りしなかつたか……まあ、そんな話はゆつくり聞か……しかし、靖也君、君の處女作は沈んだが、こんどはひとつ三四千噸のやつを設計して見るんだな。あつはつはつは。」

「叔父さん。よく来てくださいました。わたしは叔父さんになんとお話していいか……叔父さん、わたしはこれを機として、はじめから勉強をしたほししたいと思います。」

靖也は、一句々に力をいれていつた。

「勉強しなほす？……ふむ、面白い。人間は一生が勉強の時間なんだから……この室田榮藏も、今まで幾度か事業に失敗しては、勉強しなほした男だ。」と、叔父は満足さうに笑つて、「しかし靖也君、こんどのは、べつに君の失敗ではない。たゞ、君が學校を出て、はじめて一人前の仕事をした、その心血をそゝいだ作品が、奇禍にかゝつて失はれたといふまでの話だ。君があゝの雄康丸を充分自責の念をもつて設計したことは、わしもよく知つてゐる。わしは君のその強い責任観念を、しつかりし

た技能を信じたればこそ、わしの造船會社でほかで経験ある技師を押しつけても、君にあの船の仕事一切をまかしたのだ。君があゝの船をつくりあげるまでの眞剣な態度、それだけでも君の責務は果されてゐるのだ。こんどのはまつたくの奇禍だ。人間の力の及ばぬ運命だ。……それを君は、妙に神経過敏らしく責任を感じたり、自分の技能を疑つたりするのは、一方からいへば餘り信念がたらぬやうで、いつもの君塚靖也君の氣象とは思はれないね。」

榮藏は、まるで友達と快談でもしてゐるやうに、無難作に笑つてのけるのであつた。

「……しかし、操舵機にまづ故障が起つたこと、船尾肋骨のあたりの思はぬ破損のできたこと、……」

「まあ、それはまた後日の研究題目だ。それよりも、更に強い自信をもつて、第二の雄康丸をつくるべき時節の到るを待つこと——これが肝心だ。捲土重來の勇氣を養ふんだね。この意味で勉強のしなほしは大賛成だよ。なにことも唯信念だ。信念の上に生きた仕事をする事だ。これが男子の本懐なんだ。」

「難有うございます。」と、靖也は思はず聲をはずませて、頭をさげた。「わたしは叔父さんが、第二の雄康丸をつくるべき機会を與へてくださるまで、しつかり勉強します。……ハンマアを振ふ一職工から出直したいのです。」

「それだけの覺悟をきけば、わしは満足だ。……第二の雄康丸は必ずわしがつくらせる。亡なられた阿父さんの名の雄平と、阿母さんの名の康子と、それをあはせて第一製作に命名した君の心持……それだけでも、わしとしてきつと第二の雄康丸を君の手でつくらせずにはおかない。」

「難有うございます。」

靖也はむせび泣いた。

康子も顔にハンカチをあてた。

「さあ、そこで祝杯だ。」と、榮藏は喉をなでる眞似をしながら笑つた。

「お、祝杯！ 祝杯！」

高柴は愉快でたまらんといつたふりに、手をうつた。

康子は嬉しさに氣もそとろすぐ立つてビールとコップを運んで來た。

やがて榮藏と靖也と高柴の、三つのコップが、來るべき日の光榮のために、カチリとつきあはされた。

まつたく晴やかな談笑が、コップの満をひくごとに、浮きたつやうな調子を帯びて來た。或る感銘と興奮とが、お互の胸にわきあがつた。

「……勅もおもしろやこの岩船、寶をよする波のつゞみ、拍子を揃へてえいや、ひげや岩船、あまのさくめが波の腰つゞみ……」

榮藏は、突然謠曲の「岩船」をうたひ出した。

「……この船をすこやかにつくらせ給へ、あら尊の神よ！ つよくよきこの船を——すべての災禍も

襲ひかゝる波も風も、笑ひに過す、つよくよき船を！」

高柴も負けずに、ロングフェロウの「船つくりの歌」を、思ひ出すまゝに口に譯して、勝手に妙な

節をつけながら、いまにも踊り出さんばかりにうたつた。彼はおまけに、一高時代の寮歌や佐渡節や

デカンショまでひとりでうたひつづけた。

再び、三つのカップが、カチリとつきあはされた。

青い花

翌日から靖也は書齋にとちこもつたまゝ、ほとんどそとへは出なかつた。

彼は、しかし、今までのやうにたと惱める人として、陰鬱な顔をしてゐるのではなかつた。専門の造船學や、新に讀みなほしはじめた力學や材料強弱學や航海學や船用機關學などに關する諸種の洋書も、デスクの上にならうづたかく積んで、熱心にノートをつくつたり、敷寫紙で諸種の作圖をうつし取つたりする間にも、彼の眼は突然強い意圖と希望とに、燃ゆるがごとく輝くことが多かつた。

時として、彼は書齋にパンと牛乳といふやうな、簡単な食事を運ばせて、夜のしら／＼明ける頃まで、勉強をつゞけることもあつた。彼は仕事に熱中すればするほど、いかにも愉快さうで、或る進行曲を口笛に吹いたり、指と指をブン／＼鳴らしたりした。

康子は、靖也のこれまでよりも一層急激な勉強振りが、また心配の種とならないでもなかつたが、それでも時々ツツと書齋をのぞいて見て、案外彼に元氣の出で来たことを知ると、やうやく安心してからだに無理はせぬやうになど忠告することは、まあ／＼後のこと、彼の氣まかせに黙つてゐることにした。高柴も二三日は、學校の講義の歸りなどに立ち寄つて、靖也の書齋に入りこんだりしたが、今では折角の勉強にあまりさまたげになつてもいけないからと、電話で康子に其日の様子を聞くばかり——一週間はさうして過ぎた。

師走の天氣にしては、めづらしいほど雲のうら／＼かな、風の暖かい日であつた。

靖也は、すこし讀書に倦んで、疲れた頭腦を醫すべく、庭に面する硝子窓をあけて、煙草を喫かしてゐた。紫の煙がゆるく流れて、あかるい日射のなかを、スイ／＼と毛ばだちながら、そこにほころびかけた紅白の冬薔薇のひとつの上を、飄々とたゞよつてゆくのが、なんとなし心を落ちつけさせた。鉢植の萬兩が、紅玉のやうな艶やかな球をつゞつて、思ひなし戦々葉の間からチラホラ見える閑雅さも、仕事からはなれてホツとした彼の眼には、ものめづらしく感じられた。

「……あら、まあ……これはおめづらしい。」

「をばさま、だしぬけで、びつくりなすつたでせう？」

「……まあ、どうぞこれへ……」

「今日は暖かでもあるし、大森のテニス倶楽部から遊びに来てくれと、朝電話があつたのですが、なんだかゆく氣にならないので、久しぶりにをばさまを訪問することにきめて来たのですわ。」

「おや、まあ……よくいらしゃいました。」

靖也は、フト聞耳をたてた。——庭をへだてた座敷のはうで、それはたしかに龍子と母の康子の聲であつた。

彼は急に焦だたいやうな不快な氣持で、椅子から立ちあがつた。指にはさんだ煙草をすて、室内をあちこち歩きまはつたが、どうしても落ちつけぬらしく、また窓際に立つて耳をすました。

「……をばさま、わたしはこの頃、これでいつばしなテニスの選手なんですわ。」と、龍子の聲は、ますますはつちやけて来た。「相變らずのお轉婆さんなんですのよ。ほ／＼。」

「……いや、結構でございますよ。」

「時に、靖也さんはどうしていらつしやるの？ 昨日、日比野の家へまわりましたら、父も大變なんだか心配してゐるやうでしたよ。一度、ゆつくり會つて見たいなど申して居りました。」

「さうでございますか。……あれもそのうち、一度は先生のはうへお伺ひさせなくてはならぬと存じて居りますが……」

「相變らず君塚君は、神経質過ぎて困るといつて、笑つて居りましたよ。ほゝゝ。」

「ほんたうに……いつまでも先生に御心配をかけて相濟まぬことでございます。」

「今日は……？ 靖也さんは？」

「はあ、あの……この頃はすこし勉強しなければならぬといつて、書齋のはうに閉ぢこもつたまゝ、まるで一日、わたし達と顔もあはしたこともありません位で……ほゝゝゝ。」

「さう……そんならわたし、ちよつと書齋へお邪魔しようか知ら？」

靖也は眉をよせて、にが顔をした。

縁づたひに、足音が近づきさうなので、彼はすぐドアをあけて、書齋から反對のはうの廊下に出た。

「あつ……誰だ？……お加代か。」

彼は小暗い壁際に、はたきと箒をもつて、オツ／＼立つてゐる女の姿を見た。

「……はゝ。」

「そんなところで、なにをしてゐるのだ。」

「……旦那さまの、お部屋が昨日も今日もお掃除してありませんから……」

「なんだ。そんな用なら、この扉をノック……一二三つ軽く敲けばいゝぢやないか。」

「……はゝ。」

「ちやうどいゝ、今ちよつとその邊へ散歩に出かけるから、その間に掃除して置いてくれ。」

「……はゝ。」

「それから、今こゝへ誰か来るかも知れないが、僕がどこへ行つたかときいたら、どこかへ出てゆかれましたやうですと、たゞそれつきりいふのだよ。」

「……はい。そして旦那さまは、どこへおいでなさるのでございます？」

「どこへでもいゝ。誰が来てきいても、どこへゆかれたか、わたしは存じませんと、ぶつきらばうに言つてやれ。」

「……はい。」

靖也は後を見ずに、廊下のつきあたりの杉の遺戸を開けて、ソソクサと出て行つた。

お加代は書齋に入つて、デスクの上に散亂したノートや製圖道具や洋書を叮嚀に片づけ、はたきをかけはじめた。

「……いゝえ、わたしひとり、ちよつと靖也さんに會つて歸りたいのですから……」

廻り縁を軽く走つて、一方のドアを開けて入つて来たのは、今日もまた別してけばくしく粧つた

龍子であつた。

「おや……？」

彼女はそこに働いてゐるお加代と顔をあはせた。

お加代ははたきの手をやめて、頭をさげるでもなく、この美しい闖入者を——たしかに彼女は、龍子をそんな迂散臭さうな眼でもつて——見た。

龍子も、突嗟ではあるが、お加代に一種の警戒がましい威壓的な視線をくれた。やゝ日に焼けた鄙びた面だちではあるが、眉の濃い鼻筋の整つた、そして見あげた眼は、夢見るやうにあどけなくうるんでゐる。——龍子が輝かしく色彩の強い紅い花だったら、さしづめ彼女は、日蔭にしをらしく咲き出た、淋しい青い花といふべきであつた。

「お前さんは……？」

「はい……お加代と申します。」

「まあ、自分でお加代だなんて、おの字をつけてゐるよ。」と、龍子はさげすむやうにいつて、「お前さんはこの下女なのかい。」

「……はう。」

「靖也さんは、こゝにいらつしやらないの？」

「はう。いまだどこかへ出ていらつしやいました。わたくし……こゝへお掃除に参りましたので……」

「え。お前さんがお掃除に来て、靖也さんを追ひ出したのかい？」

「いゝえ。旦那様が、お掃除に参りましたと申したら、さうかといつて出ておいでなさりましたので……」

「……」

お加代は龍子の権幕に押されてデスクの彼方に小さくなつた。

「……だから、お前さんが靖也さんを、こゝから追ひ出したのぢやないか。」と龍子はいま／＼しさうに舌打した。「そして靖也さんはどこへいらつしたか知らないのかい？」

「……存じません。掃除してくれといつて出ておいでになつたばかりで……」

龍子の痾高な聲に、康子は急いで縁づたひにやつて來た。

「まあ、龍子さん。靖也がゐないのでございますか。」

「えゝ、いままでたしかにこの部屋にいらつしたらしいのよ。それをこの人がお掃除に來たので、どこかへ行つたらしいのよ。」

「まあ……それはどうも……」と康子は氣の毒さうにうなづいて、「お加代、靖也はどこへゆくともいはなかつたのかねえ。」

「えゝ旦那さまはたゞ掃除をたのむと仰つただけで……」

「をばさん……では、わたし今日はこれで失禮しますわ。」

龍子の調子は、どこか不満と怒りにみちてゐた。

康子はいよ／＼氣の毒さうに、

「お加代、靖也はすぐもどるといつて出たのかねえ。」

「たゞ、出て来るからと仰有つたゞけで……」

「この頃は、まるでこの書齋からはなれたことではないのですから、べつに遠くへ出かけたわけではありませんまい。帽子は應接間へかけてあるから、裏口から掃除の間を、そこらへほんの散歩に出かけたのでせうが……」

康子はふたゝび言ひ譯するやうに龍子の顔を見た。

「わたしがこの部屋へ来ることを知つてゐながら、掃除をはじめると……」

龍子は、まるで自分の家で持ち前の我儘をいひ張るやうな調子で、お加代を睨めつけた。

「……わたくし、旦那さまのお部屋のとて、お掃除の時を待つてゐただけで……そこへ旦那さまが廊下の扉をあけて、出ておいでなさつて……」

お加代は、立ちすくんだまゝ、やつとこれだけ應へた。

「ほんたうに意地のわるいことをするんだ。」

龍子は吐くやうにいつて、足さばりも荒々しくブイと縁のはうへ出た。

庭には良助が、樹立にかくれてならんだ鉢植の寒紅梅や水仙に手入れしてゐた。

「ほんたうに、折角いらしつてくださつたのに、失禮いたしました……この子は、ついこの頃北海道の田舎から引き取つたばかりの者で、ほんたうになんにも氣がつかせませんで失禮いたしました……しかし、靖也はすぐ歸つ来ると存じますが……」

「いゝえ、をばさま。わたしは靖也さんに嫌はれてゐるのですからね。」

「どうして、靖也があたを嫌ふなどと……靖也はあなたのお父さまのお伴をして、あなたといつしよに、二年も英國にゐたのではございませんか。靖也はあなたを、ほんたうによいお友達として信じ、また尊敬してゐるのでございますよ。」

「……さう、あたしは靖也さんから信じられもし、或は尊敬に似たらしい心を、持たれもしたことはありませんが……」と、龍子は自分を嘲けるやうな、また他を嘲けるやうな調子で、皮肉な微笑をもらしながら、しかし、をばさま。わたしがかうして隈部へ嫁ぎましからは、もう、靖也さんのわたしへの信用も尊敬もまるで地に墜ちてしまつたのですよ。男と女とは、どんなに理解しあつてゐても、夫婦関係以外にはみんな駄目ですのね。眞に友人關係をつづけてゆくことは不可能なことかも知れませぬね……では、これで失禮いたします。これから大森のテニス・コートにでも行つて倶楽部の連中と

思ひきりお轉婆でもして歸りませう。あすこにはわたしの運動服もあづけてあるんですから。」

「さうでございますか……ほんとうに今日は、飛んだ失禮をいたしました……」

康子は龍子を送りながら、應接間のはうへ行つた。

窓からソツとのぞき出して、龍子のあとを見送つたお加代の目には、恨めしげな涙がたまつてゐた。

「お加代、なにをしてゐるんだな。早く行つて……お前、お客様の履物をなほして置いたか。」

良助は、庭から聲をかけた。

お加代は子供のやうに、かぶりを振つた。

「それはいけねえ。早くおなほし申して来い。」

お加代は黙つて、またかぶりを振つた。彼女の目には、純朴らしい反抗的な色が見えた。

「困つた奴だ。」

良助は苦笑しながら、庭の木戸をあけて、急いで玄關のはうへ走つて行つた。

あとでひとり、お加代ははたきの手を動かすでもなく、ぼんやりデスクの上をながめてゐた。銀製の

一輪挿にさゝれた白薔薇の花びらがフト一片二片ホロリと散つた。彼女はなんといふことなしに、

それを指でつまみあげたが、やがて唇のあたりにちかづけて、ホツと暖かな息を吹きかけた。――

と、それを、そこに積まれた厚い洋書を開いて、ソツと投げこんでパタリと閉ぢた。

あとけない笑ひが、彼女の頬にのぼつた。

「……やれ／＼、やつとお草履をなほして来た。」

良助は、忠實に笑ひながら庭に歸つて来た。彼はちよつと伸びあがつて、書齋の窓からお加代をの

ぞいて見た。

「お加代、なにをしてゐるんだ。早くお掃除をしないか。旦那さまがお歸りになつても、それでは御勉

強ができないじゃないか。」

お加代はハツと我にかへつて、はたきを取りあげた。そして心持顔をあからめながら、

「お父つあん。もうあの奥さまお歸りになつたの？」

「お前はまだ山にゐた氣象がぬけないな。お客さまにあんな愛想のない顔でものをいつて……もつと

お上手がでкинじや困るよ。おうちの大奥さまも、困つておいでなさつたじやないか。」

良助は、再び鉢植の前にしやがみながら、軽く叱つた。

「お父つあん。お上手するつてどうすればいゝの。」

「お上手するつて……それは、つまり、その、どなたの前でもニコ／＼してゐて、どなたにも、お加

代は可愛い娘だな、好きな娘だと思はせるやうにすることなんだよ。」

「わしは、山で、みんなに可愛がられて来たよ。山の人達はみんなわしを好きだといつてゐたよ。」

「それはさうだらうとも……山の人達で、お前を可愛がらない者はない筈だ。」

「わしはべつに、誰にも可愛がつてもらはうとしたことはなかつた。」

「む。」

「だから、わし……」

お加代は不思議さうな顔をした。

「む、それはわかつてゐる。」と、良助はうなづいて、「……だがな、お加代、この東京じゃ、それは駄目なのだよ。みんなから可愛がつてもらはうと思へば、可愛がつてもらへるやうにせにやならんのだ。好きな娘だとほめてもらふには、ほめてもらへるやうにせにやならんのだよ。」

「わし、みんなに可愛がつてもらはんでもいい。」

「可愛がつてもらはにはにや、このお家にも一日とゐることはできないのだぞ。」

「わし、山へ歸りたいな。」と、お加代は美しい幻でも追ふやうに眼ばたきした。「山の雪は、キラキラしてほんとうに綺麗だからな……朝は紅い色に染まつて、夕方は紫色に染まつて、そして晝間は銀の粉をふりかけたやうに、眩しい位光つてゐて……」

「だが、お前は、昨日も、山よりはすつとこゝがいといつたじゃないか。」

「あ、こゝもいゝ……こゝもいゝな。」

「こゝがよければ、こゝに置いて頂けるやうに、どなたからも可愛がつてもらはにやいけないのだよ。」

大奥さまからも、旦那さまからも……

お加代はボツと顔をそめて、しほらしくうなづいた。

「それから、こゝのお家に來られるどなたからも……わかつたか。」

良助は、まるで子供にでも教へるやうに説きかされた。

お加代は黙つてうなづいた。

「お、話ばかりして、またお掃除がおそくなつた。早くしないと旦那さまがお歸りになるよ。」

お加代は父の言葉に、デスクから書棚へはたきをかけはじめた。

「いやあ、まだ掃除をやつてゐるな。……どうだ。僕も手傳つてやらうか。」

廊下のドアをあけて、靖也が機嫌よく笑ひながら入つて來た。

「旦那さま……ほこりがかかりますから……もう、すぐ掃いてしまひますから……」

お加代は周章で、大急ぎにはたきの手を動かさせた。

「旦那さま、わたしがいまちよつとお加代を叱つて居りましたので、こんなにお掃除がおくれました……」と、良助は庭から娘に代つて頭をさげた。「すぐお掃除をしまはせます。その間、まあこつちの縁へお出なすつてくださいまし……」

靖也は書齋から縁に出てしやがみながら、

「どうしたのだ。お加代を叱るなんて……こんなおとなしい正直な娘を、どうして叱るんだ。」

「いゝえ、あまり山育ちの無愛想者ですから、東京じゃそれではいけないと、いひきかせてゐたんでございます。」

「山育ちの無愛想——それはいゝことじゃあないか。この都會に生きてゐる女達は、誰彼なしに媚びつくろつたやうな笑顔を振りむけて、口さきばかり綺麗なうまいことばかりいつてゐる。あいつ等は薄つぺらな智識と、形式ばつた道徳とを交際の唯一の道具と心得てゐる連中なんだ。あいつ等は年中、お互ひに嘘のつきくらをしてゐるんだ。」と、靖也は不快げに唾を吐いて「お加代だけは、どうかこのまゝ——自然から切り取つたやうな、この清い美しさをもつたまま、まつすぐに育てゝやらなきやいけないよ。そして、山から抜いてもつて来たまゝの、汚されない花の姿でお嫁さんにやるんだね。」

「有難うございます。」

良助は嬉しげに頭をさげた。

靖也は、縁から書齋のなかに働いてゐるお加代を振りかへりながら、

「ねえ、お加代……お前は、どんなところへお嫁にゆきたいのだ？」

「……そんなこと……お嫁になんかゆかない……そんなこと大嫌ひ……」

お加代は、箒の手を急に忙しうに動かしながら低聲に應へた、彼女のはづかしさうな、そして眞面目に怒つたやうな顔に、靖也と良助は、また軽く笑はされるのであつた。

「さうだなあ、お加代……お前はお嫁になんかゆかねえで、わしといつしよに、いつまでもこのお家に働かして置いてもらはうよなあ。」

お加代は満足げにうなづいた。

「ほんたうに旦那さま、わたし達父子はいつまでもこのお家で働かせて頂きたいと思つてゐるのでございます。」と、良助は縁に来て腰をかけながら、「……わたしは亡なられました旦那さまには、ほんたうに御恩義をうけた者でございますからなあ。……石狩の山奥で、旦那さまが御用で御出張なされました時、いろ／＼御親切にして頂いたことは、今でも忘れることができませぬ。ちやうどこのお加代が生まれましたばかりの時、母親は産後の病氣で臥てゐる、わたしは職業からはなれ、道樂者の長男はどこかへ家出してしまふ……わたしは困つて盗伐といふ罪を犯しかけたところを旦那さまに見とがめられまして……それをお叱りどころか、お薬くださるやらお金をお恵みくださるやら、大變なお情をうけまして……」

「また、爺やお復習が出たな。そんな話ばかり繰り返すものではないよ。」

「でも、旦那さま、人間は懺悔といふものをするほど、身が淨められると申します。」

「さうだ……懺悔はたしかに身を浄める。が、まあ、今日の僕は懺悔をして聞かしてもらひたくない……どうだね。石狩の山は、今頃もうすつかり雪で、さぞ雄大な景色だらうなあ。」

「はい。今もお加代が山の雪の美しいことを思ひ出して、その話をしてゐたところでございますよ。」

「さうか……おい、お加代、お前こゝへ来て、その山の美しい雪のことを、僕にくはしく聞かしてくれないか。」

「え、山の雪……麓にある家の窓からのぞくと、まるで大きな大きな銀の牛が臥てゐるやうに見える……」

お加代は、箒の手をやめて、ウツトリ夢見るやうな眼をした。

「お加代……ついでに、お前達がよくうたふ、山の雪の唄を旦那さまにうたつてお聞かせするがい。」

「そんな唄があるのか……山の雪の唄！ 聞きたいな！ お加代、うたつて御覽。」

「そんな唄は……子供の時分うたうただけで、もう忘れてしまふたから……」

お加代は顔をあかくして、彼方をむいた。

「なに忘れてしまつた？……でも、すこしは記憶えてゐるだらう。さあ、うたつて御覽。」

「なんでもない、つまらない唄なもの……わしが幼少な時にうたつた唄なんもの……旦那様、きつと笑ふにきまつてゐるから……」

「まあ、どうでもいゝ、ひとつほんのすこしばかりうたつて聞かせておくれ。」

「お加代、旦那さまがあゝ仰有るんだから、うたつて見るがい。」

良助は笑つた。

「それ、お父つあんも、もう笑つてゐる。」

「なに、笑つてゐやしない。……さあ、うたうて見るがい。わしも久しぶりに、お前の幼少な時の唄を聞きたいのだ。なんといつたかな。お、さうだ。『ゆうべひと夜さお山の雪は』といふのだつたなあ。」

「あゝ、お父つあんは、よく記憶えてゐる……『ゆうべひと夜さお山の雪は、積んだうへにもまた積んだ』といふの。」

「お、さうだ、それから、どうだつたかなあ？」

「それから……」

お加代は、書齋のそとの樹立のはづれから見ゆる、青いガラスを張つたやうな空に、まぶしさうな眼をやりながら、低く節をつけてうたひ出した。

ゆうべひと夜さお山の雪は、

積んだうへにもまた積んだ、

お山見たかよまつ白ひかる、
びりかめのこのこの肌ほどに。
こよひひと夜さお山の雪は、
またも積んでは谷川うめる、
お山たひらに道やまつすぐに、
びりかめのは櫃でくる。

——うたひ終つて、お加代ははづかし氣に、デスクに顔を伏せでしまった。
「素敵だ。おもしろい、いゝ唄だ。」と、靖也は手を拍つて、「……しかしびりかめのはなんのこと
だね？」

「これはアイヌの唄を、つくりかへたものでございましてな。びりかといふのは、わたしといふこと
めのは女の子といふことなんです。つまりわしの女の子といふことなんでございまして。」と、良助は
説明した。

「なるほど、わしの女の子——わが親愛なる娘さんといふことなんだね。おもしろいな。びりかめのは
こ……びりかめのは……おもしろいな……びりかめのは櫃でくるか。は……は……」
「あれ、旦那さま、うたはして置いて、やつぱりわしを笑つて……」

お加代は、恨めし氣に靖也を見た。

「いや、お前の唄を笑つたのぢやない。唄がおもしろくつて、すつかり愉快になつたのだ。ことにび
りかめのは、頗る愉快になつたのだ。は……は……は……」

「ほんたうに、わしも久し振り、この唄を聞のでございましてよ。雪が山に降つて、わたしの村が眞
つ白な屏風でかこまれたやうになると、お加代は友達三四人といつしよに、暗い土間に、輪をつくつ
て、かううたひながら、グル／＼まはつてゐました。それが、今はこんなに大きくなつて……ほんた
うに、夢のやうでございまして。」

康子が縁づたいに歩いて來た。

「まあ、なんだか、たいさう賑やかさうだね。」

「阿母さん、今なか／＼おもしろかつたんですよ。お加代が素敵な唄をうたつて聞かせてくれたんで
す。阿母さん、びりかめのは、つてなんのことかわかりますか？ は……は……」

「あれ、旦那さま、そんなことを……」とお加代はデスクから顔をあげようともしなかつた。

康子は、なによりも、靖也の氣がまぎれて、元氣づいてきたことを喜んだ。——ほんたうに彼は、
今日とりわけ快活であつた。まるで一高の學生時代だつたやうに、はつちやけてゐた。
「さあ、そろ／＼勉強するかな。僕のびりかめのは、三千噸、四千噸といふ、大きな圖體をしてゐ

るやつだからな。はつはつは、ゝゝゝ！」

挑 戦

——ひと口にいつて、馬鹿々々しく飾り立てられた居間である。すべてがこゝの主人公の趣味の反映なのかも知れないが——そして主人公はどの來客にも、これは最新の表現派式裝飾を應用したものだ、大得意に説明するのであるが——壁の或る一面に、笛を吹く支那風の女と牡丹と猫とを配した漆喰細工が施してあるかと思へば、一方には木の實と瑠璃鳥を輪にならべた、コブラン織が懸けられてあり、ピアノの上には、銀製の蛇身鳥頭のウエーヴァンのやうな動物の燭臺が置いてあるかと思へば、天井から吊された四つの電燈は、ナポリの博物館あたりにでもありさうな、牧羊神のやうな人物の奇怪な四肢に支へられてゐるといつたやうに、見るから鶴式な裝飾である。

ゆつたりした廻轉椅子によつて、大きは桃花心木の卓に相對してゐるのは、龍子と彼女の夫——この居間の主人公、隈部棟吉であつた。

「……龍子、そろ／＼夕飯といふことにして貰ひたいな。」

指にはさんだ葉巻の灰を、かるく落しながら、棟吉は龍子の機嫌をうかがふやうにいつた。

「わたし、べつにお腹はすいてゐないわ。龍子はそつけもなく天井を向いて、「あゝむやみに喉がかわく……どうしたんだらう。おきよはまだ曹達水をもつて來ない。」

「おれはなにしろ腹がへつてゐるんだ。一日こんなに忙がしく活動して歸ると、夕飯がなにより楽しみだよ。すこし同情して貰ひたいね。」

「だから、わたしなにもあなたが夕飯を召しあがることに、反對なんかしてゐやしませんわ」そんなにお腹がすいてゐらつしやるなら、御遠慮なく臺所へ命令なさるが、いゝわ。」

「そりや、御遠慮なんかしやしないさ。だが、一日活動して、ヤレ／＼と家に歸つて來て、ひとりで夕飯を食ふといふのは、はなはだ哀れだよ。職工だつて、働いて家に歸れば、女房がちやんと夕飯の膳をこしらへて待つてゐる。それが無上の楽しみだつていふよ。こゝの家庭では、近頃夫婦顔をあはせて夕飯を楽しんだことがないじやないか。こんなに忙がしく活動して、そして家庭の慰安もつけられんといふのは、隈部鐵工所長、使用してゐる職工の生活にも劣るといふことになる。大いに哀れだね。みじめ過ぎるね。」

小間使のおきよが、深いカップに曹達水を、盆にのせて持つて來た。

「おきよ。旦那さまがね、すぐ夕飯を召しあがりたいのださうだから、はやく用意しておくれ。」龍子はカップを受取ると、麥藁を口につけながらいつた。

「おきよ、奥さまの夕飯も用意してくれ。いつしよに食べるのだから。」
「わたしの夕飯は、ズットあとでいゝよ。菊江さんといつしよに食べるからね。……菊江さんはいつもピアノのお稽古をしてから夕飯にするのだから。わたしもちやうどその頃がいゝのだよ。」

「はゝ。」

「おい、龍子、お前もよつほど強情だね。いつしよに食つたらいゝじやないか。」

「あなたのほうが、よつほど強情よ。人が食べたくないといふのを、無理強ひなさるのだから。」

「とにかくおきよ、食堂へおれのと、奥さまのと、いつしよに用意して置いてくれ。それから、コミヤツクを飲みたいから出して置いてくれ。」

「はい。」

おきよは頭をさげて出て行つた。

「さあ、これでまづ夕飯にありつけたと……」と、棟吉は葉巻を灰皿に投げて、グツと椅子から立ちあがりながら、體操でもするやうに、兩手をウンと左右へつき出した。「實際今日は疲れたよ。まつたくへトくだ。朝、工場へ出て事務をとつて、それから調べて貰ひたいものがあるので、商工省の統計課へ行つて、M物産會社へ廻はつて、こんど新たに關係のできたS原動機製作所をのぞいて、それから横濱のA船渠會社へ行つたのだもの……たしかに大活動だ。」

「ついでに新橋か赤坂の、島田監製造會社へでもお廻りはなすつたら、もつと大活動家としてのあなたの眞手腕を發揮することができたものでせうに。」

龍子はフ、ンと鼻さきで笑つた。

「つまらないことをいふな。」と、棟吉は、また椅子にドシンと尻を落として、「おい、龍子……どうしたのだ、今日はまた馬鹿に御機嫌がわるいやうだが。」

「べつになんにも機嫌なんかわるくはないわ。わたしは元來こんな女なんですもの、お氣の毒さま。彼女にはわざとはしたなげに、チュウ／＼音をたて、麥藁を吸つた。」

「……どうだつたね。今日のテニスは？」

「……………」

「この次の日曜が、倶楽部の納會試合なんだらう？」

「えゝ。」

「今日は、練習試合だといつたが、成績はどうだつたね？」

「みんな負けよ。誰にも彼にも、綺麗さつぱりストレート・セットでみんな負け。」

「はゝあ、それで御機嫌いさゝか斜なりか。はゝゝゝ。」

「テニスの勝負くらゐで、わたしなんにも怒る譯はないわ。負けたのはわたしが下手だからなんです。」

わ。」

「お前のテニスは下手ぢやないよ。お前をコーチした小宮がさういつてゐたよ。奥さんのテニスは非常に筋がよいつて……小宮は大學時代の選手で、一時は帝大の大將として鳴らしたもんだからなあ。あの男がお前には真面目に折紙をつけてゐるのだ。お前は下手ぢやないよ。そのうち僕に暇ができたら、練習の相手をしてあげるよ。」

「あゝ、實に喉がかわく、もう一杯曹達水が飲みたい。……あなた、電鈴を押してくださいな。」

龍子は、棟吉の言葉に應へもせず、飲みほしたコップの縁を指さきでピン／＼はぢいた。

「曹達水よりも、夕飯にしたらどうだね。」

「また夕飯……？ あなたずゐぶん執拗いのね。わたしは、あなたがお腹をすかしてゐらつしやると同じ程度に、喉がかわいてゐるのですよ。電鈴を押してください。」

「しかたのない、我儘屋さんだ。」

「えゝ、どうせわたしは、しかたのない我儘者で強情者よ。困つた駄々つ子なのよ。……そりやあ、あなた、はじめつから承知でわたしをお貰ひなすつたのぢやないの？」

棟吉は、廻轉椅子をクルリとまはして、長い半身を伸ばすやうに、壁上の電鈴を押しながら、

「どうも、さう一言々々、突つかかつて來られちゃ降参だ。……いかに、僕はお前のその性質を承

知の上で貰つたんだ。どうしたものか僕はお前の駄々つ子が好きなんだからしかたがない。はゝゝゝゝ。」

「ほんたうにあなたは特志家ね。」

「特志家だよ。……お前に思ふ分駄々をこねられて、それを嬉しがらうとするのだから。」

おきよが入つて來た。

「……御用で？」

「あゝ、奥さんが、曹達水をもう一つ御所望だ。」

「はゝ。」

「それから食堂のはうを早くだよ。」

「はい、唯いま支度をいたしてをります。」

おきよは出て行つた。

兩人は、しばらの無言でゐた。が、どうしたのか、龍子はプツと吹き出した。

「なんだ。龍子、なにがをかしいのだ。」

「え……あなたの特志家だつてことを考へて、をかしくなつてしまつたの。」

「どうしてだ？」

「あなたは、わたしの駄々つ子に困らされてゐるのが嬉しいといふから……」

「さうだ。それはまつたくだ。お前が我儘をいつてすねて、僕を困らせるほどお前の美しさが増して来る。お前にますく強い愛を感じて来る……まあ、せいぜい駄々をこねるが……」

「さう、それは有難う。だからあなたは……ほ……ほ……！」

龍子は圓い頰をつき出すやうにして、高く笑ひ出した。

「だから僕は？」

「一種の變態性慾者なのよ。」

「なに？ 變態性慾者？ ——ひどいことをいふ。どうしてなのだ？」

「女にいちめられてよろこぶから、あなたはたしかに受動色情狂よ。ほ……ほ……」

棟吉は、ちよつと毒氣をぬかれたやうに、龍子を見つめてゐたが、すぐニヤリと笑つた。

「僕が受動色情狂だつて？……なるほど、いや、さうかも知れない。お前は思ひきり僕の前で我儘をいつて強情をはつて、すねてゐる。僕は困りながらも、その、お前がなににも満足できないで焦々して、ウンと僕に食つてかゝる時、なんだかお前が可愛くてしかたがなくなるのだ。お前の美しさに形容のできないいぢらしさが加つて、力一杯ひきよせて抱きしめてやりたくなるのだ。……僕といふ男は、刺戟なしには生きてゆけない人間なんだ。家庭で刺戟を受けて僕の精力をいつもピリ……させ

て置かないと、外へ出て思ふ存分の活動ができない人間なんだ。そこでお前の駄々つ子に對して、僕も大いに強情を張る。するとお前がいよ／＼駄々つ子になる。僕がいよ／＼お前を可愛くなる。そして家庭で倍養して置いた精力をウンと仕事の活動につかふ……蓋し名案だらう。は……は……！」と

かく僕はウンとお前から困らして貰ひたいのだよ。」

「さうすると、つまりわたし達の家庭生活は、あなたがわたしに對する、またわたしがあなたに對する、挑戦と挑戦なのね。」

「さうだな。挑戦といふ言葉はちとおだやかでないが、まづその氣持にちかいところかな。」

「挑戦！ ……ふ……ふ……おもしろいわ。」

龍子の眼に、チラと閃めく光りがあつた。

兩人は、また無言のまゝ向きあつた。

おきよが曹達水を持つて來て、卓上に置いた。應接間のはうでピアノが鳴り出した。

「おきよ、食堂のはうを急いでくれ。それから菊江に、今日はいよ／＼加減なところでピアノのお稽古を切りあげて、食堂へ出て來るやうにいつてくれ。三人で夕飯を食ふのだから。菊江の分も出して置くのだぞ。いゝか。」

「は。は。」

おきよは、あいたはうのコップを取つて部屋を去つた。

龍子は曹達水を飲むでもなく、椅子の手すりに右の手をやつて、菊江の調子にあはせながら指をうごかしてゐた。

棟吉は、青銅の葉巻函からまた一本つまみあげて、ナイフで口を切つた。

「いつまでたつても菊江のピアノは駄目だね。すこしも上達しないじゃないか。」

「いゝえ。この頃はよほどうまくなりましたよ。」

「だつて、學校を出て、もう三年もやつてあれじゃ、さつぱり駄目だよ。」

「なに、それはあなたに、音楽を鑑賞する耳がないからなのよ。實際菊江さんは、この頃めつきりうまくなつたわ。」

「……そろ／＼次の挑戦かね。」

「ふん／＼。」

龍子はまた頤をつき出すやうに、鼻さきで笑つた。

「哀れむべし、隈部棟吉——汝は變態性慾者にして音樂的鑑賞不能者なり——か。は／＼／＼。」

棟吉は、葉巻に火をつけながら、また椅子から立ちあがつて體操の真似をした。龍子はそんなことは見たくもないといふ風に、曹達水の麥薬に口をやつたが、ひと息吸ふと、まづさうな顔をして、ハ

ンカチで例の眞赤な唇を拭つた。

——突然、彼女はアツといつて、両手を前につき出した。いつの間にか棟吉が自分のそばに近寄つて、左手に頸を抱き寄せようとするのだつた。

「あつ！ なにをなさるんです……！」

「僕は變態性慾者だからね……は／＼／＼！」

棟吉は左手の力をゆるめようとしなかつた。

「あつ！ なにを……なににするんですつてば！」

ガチャんと、卓上の曹達水のカップが落ちて、床の絨氈の上で割れた。

龍子は無茶苦茶に男の手をもぎのけた。

「なんて不作法な……！」

「これは僕のはうの挑戦だよ。は／＼。」

扉がギツと開いた。

そこに脊の高い瘦せた中年の西洋婦人が、紅い服をつけた斷髪の、人形のやうに目のパツチリと圓い女の子を連れて立つてゐた。

「おや、阿母さん。」と、龍子はいつた。

「こんにちは……」

西洋婦人は、かなり馴れた日本語で、軽く笑ひながら挨拶した。額のひろい、頬のモンリと削げた三十七八歳とも見ゆる婦人である。品のいゝ羅馬型の鼻、細く長い頸、ものいふ時、ちよつと軽く喉ををうごかすのが相手に最初の好感を與へる特徴である。黒天鵝絨の服をつけて、脊のストと高いのが、駝鳥のやうな歩きつきで入つて來た。

「や、阿母さんですか。よくおいでになりました。」

と、棟吉はちよつとテレかくしのやうに、両手で頭の髪をかきあげつゝ、目禮した。

「だしぬけだつたから、わたしはびつくりしましたわ。」

龍子は椅子をすゝめた。

「だしぬけ……だしぬけ……」婦人は首をひねつて「だしぬけとは、どんな意味？」

「阿母さん。だしぬけとは、俚語ですよ。Suddenlyとか unexpectedly とかの意味ですよ。急にとか思ひがけなくとかの意味ですよ。」

棟吉は自分の椅子にもどりながら笑つた。

「さう、わすれておました。だしぬけ……だしぬけ……もう、なん度も聞いたことばでした。だしぬけ、Suddenly……unexpectedly……ほゝゝゝゝ。」

この西洋婦人は、アンナ・ヒビノ夫人といつて、龍子には義母にあたる女であつた。龍子の母の節子が死んで父の日比野舜輔が英國に三度目の研究視察に行つた時、結婚した夫人なのであつた。

「姉さま。これ、お人形。これ、お人形。」

女の子は、トン／＼と床の上を跳ねながら、龍子の胸のところへ、小さな西洋人形をつきつけた。

「おゝ、お人形……まあ、このお人形さんは、テルコちゃんによく似てるのね。」

「だつて、このお人形、テルコのだもの。」

「さう、テルコちゃんのお人形さんだから、テルコちゃんに似てゐるの？」

「あゝ。」

「しばらくでしたわね、阿母さん。よくいらつしやいました。」

と、棟吉は葉巻に火をつけた。

「テルコが、このお人形をお姉さんに見せてくるのだといつて、きかないのです。」と、アンナ夫人は軽く笑ひながら、「それで、牛にひかれて、ぜんこじまわり……」

「牛にひかれて善光寺まわり……？ 阿母さんは、えらい言葉を知つてゐますね。」

「これは、出かける時、女中から習つたばかりのことばです。自動車のなかでよく反誦してきましたほゝゝゝ。」

「阿父さんはいかゞです。」

「ありがたう。まいにち元氣です。」

「それは結構です。今日、御一緒にいらつしやればよかつたに。」

「ありがたう。この頃すこしいそがしいものですから。……よろしくまをしました。」

「阿母さん。阿父さんの喘息はどう？」

と、龍子はきいた。

「あゝ、ぜんそく……この二三日はたいへんよろしい。今日も君塚さんへ電話をかけてみました。」

「君塚つて……靖也さんの家へ？」

「さうです。」

「どんな電話をかけていらつしたの？」

「わたしはよく聞きません。しかし、君塚さんにいちど来るやうにと、いつてゐたやうです。……君塚さんは、ものごとをいろ／＼にふかくかんがへると笑つてゐました。」

「さう……」

棟吉は横あひから、すぐ口を出した。

「君塚靖也……あの男もなか／＼熱心な勉強家ださうだが、今度の失敗で、秀才すつかりかたなしに

ひどく悄氣こんでゐるといふぢやないか。日比野の阿父さんも、あの男を英國漫遊の時、連れて行つ

ておやりなかつたほど、前途を囑望なすつただけに、こんどの失敗ぢやすゐぶん御心配だらう。どう

も秀才といふだけぢや事業はできない。事業は第一が度胸、第二が精力だ。……さう／＼、龍子、あ

の男は、お前の英國留學中に、間違つてお前の寢室に入つて、お前から怒鳴りつけられると、びつ

りしてどう周章たのか、ベッドの前にお前の靴を揃へながら、逃げ出したといふぢやあないか。はつ

は、ムムムム！」

「黙つてゐらつしやい。」と、龍子は棟吉を睨みつけるやうにして、「わたし阿母さんとお話してゐるん

ですから。」

「いや、ちよつと面白い話だからな。……あの秀才が、お前の靴をベッドの前になほして、アタフタ

逃げ出した恰好は、ちよつと笑ひ話になるからな。」

「あなたのさつきの醜態よりは、まだズツと靖也さんのはうが純で人間らしいわ。」

この、まともな一撃で、棟吉はウツと黙らされてしまつたが、彼はすぐまた話の方向を變へた。

「おゝ、ちようどいゝところだ。阿母さんにもはいつて頂いて、久しぶりにみんなで賑やかな夕飯と

しようぢやないか。かうしてまだお茶をさしあげないのだから、すぐ食堂のはうへ行つて頂いて……」

「また夕飯？」と、龍子はうるさいといはぬばかりに、「阿母さんとは、いまお話してるところじゃあ

りませんか。」

「や、また、挑戦か……」

アンナ夫人は、龍子と棟吉の會話に、すこし呆氣にとられてゐたが、

「ちようせん？　なんです——ちようせん？」

「挑戦とは……さあ、困つたな。なんといつたらいゝかな。つまり、その……まあ、戦闘なんですかな。」

「戦闘！……？」

アンナ夫人は、驚いて椅子から立ちあがらうとした。

「なあに、阿母さん。挑戦といふのは、お互ひに我儘をいつて強情を張りあふといふだけのことよ。」

——お互に憎惡的態度で暮さうといふのよ。」

「憎惡的態度……？」アンナ夫人は、いよゝ眼をまるくして、「それはいけません。家庭生活に、そんなことはいけません。」

ドアを開けて、菊江が入つて來た。

「おや、アンナのをばさま……今日は！」

「おう、菊江さん、こんにちは！」

「どうしたの？　お兄さんの聲はずむぶん騒々しいのね。ピアノを練習してゐても、應接間まで聞えるわ。」

「さう、菊江さん。じゃあ、さつきお兄さんがあなたの悪口いつていらしたのも聞えたでせう？」

龍子はからかふやうに笑つた。

「あら、お兄さんは、わたしの悪口を仰つたの？」

「え、菊江さんのピアノは、いつまでたつても駄目だつて。」

「まあ！　いゝわ、いゝわ！」菊江は鼻をクフンと鳴らして、「え、どうせわたしは、いつまでたつてもピアノは上手になれないのよ。上手になれなくても、お兄さまに聞かせるつもりで勉強してゐるのじゃないから……お氣の毒さま！」

「また挑戦者が一人殖えたな。こりややりきれない。四面楚歌の聲だ。」

おきよが來た。

「御用意ができました。」

「やれ、やつと夕飯！　さあ、みんなで食堂にゆかう。……さあ、阿母さん、どうぞ……テルコちゃんも一緒にゆきませう。」と、棟吉は、救はれたやうに椅子から立つておきよに「お客さまの一人分、すぐにだせ。」

「はう。」

「さあ、みんなで食堂へ……」

棟吉はこの場合、一番味方にしていゝテルコの手をとつて、眞つさきに部屋を出た。

「お姉さま。いゝことがあるわ。」

「え、なあに？」

「ちよつと……」

菊江は龍子の耳になにかさゝやいた。

「……さうね。それもいゝわね。」

「だから早く夕飯をきりあげてそれから……ね。」

「さう……じゃ、それにきめて食堂へゆきませう。さあ、阿母さん、どうぞ夕飯がすんだら、いゝ相談がありますのよ。菊江さんの考へたことで……そりやあいゝ考へなのですよ。」

龍子は立ちあがりながら笑つた。

食堂は、もうあかるく灯がついてゐた。

白布に蔽はれた長方角の食卓。一方に棟吉、テルコ、アンナ夫人が腰をかけ、それと向きあつて、

菊江と龍子が椅子についた。

すぐ、スープの皿が運ばれた。

棟吉が、ゆつくりパンをちぎつてゐるのに、菊江は龍子をうながして、いそがしげに匙を取りあげた。

つぎの皿からつぎの皿へ、菊江はいかにも健啖家らしい小肥りな上半身を、食卓へ乗り出すやうにして、大急ぎで食つて行つた。龍子は、ちよつと口をつけると、サツサと皿を變へた。

「……おい。そんなに急いで食はずともいゝぢやあないか。こゝでみんなゆつくり話をしようと思ふのだから。」

棟吉は、かはるゝ龍子と菊江の顔を見た。

「いゝのよ。これが勝手なのよ。」

菊江はナイフとフォークの手をやめなかつた。

「勝手だといつて、女がそんなにバクつくのは見つともないぜ。第一、食卓の作法にかなはない位知つてる筈だらう。そんなにいそがしさうにやると、こつちが落ちつけなくて困るよ。ピアノなら平調といふところでやつて貰ひたいな。」

「わたしはいつまでたつても、ピアノの上手になれない女なのよ。」

「つまらんとこで敵討するものぢやない。……龍子、お前もまるで口をつけないで皿を變へるぢやな

いか。どうしたのだ？」

「わたしは、お腹がすいてゐないと、さつきからいつてるぢやありませんか。」

「では食はずともいゝから、もつとゆつくりして、會話をはずませるやうにしてくれ。」

「でも、お前は、阿母さんとなにかお話があるつて、いつてたぢやないか。」

「阿母さんにはあるわ。」

「ぢや、それをこゝで續けるがいい。」

アンナ夫人は、こゝの光景にもすこし困つて、たゞ軽く笑つてゐるばかりであつたが、さすがに棟吉のヤキモキするのが氣の毒になつたと見えて、

「龍子さん。わたしにはなし……どんなおはなし？」

すると、菊江は龍子よりもさきに、アンナ夫人に口を出した。

「アンナのをばさま。お姉さまは今晚これから、帝劇の伊太利歌劇を見にゆかうと、をばさまにお勧めするつもりなのよ。」

「かけき……？」

「歌劇……オペラよ。」

「おゝ、オペラ？」

「をばさまお好きでせう——オペラは！……今晚は「アイーダ」がありますのよ。」

「ホウ、「アイーダ」！わたしあのオペラは好きです。第二幕のアイーダの進行曲が好きです。それから、第四幕の悲劇にはいつでも涙こぼします。」

「ぢや、をばさま、これからみんなで帝劇へ行かうぢやありませんか。」

「おい、菊江！急にそんなことをいひ出して……もう七時ぢやあないか。」

棟吉は驚いて手をあげた。

「開場は七時半からよ。そして「アイーダ」のはじまるのは八時四十分からよ。さつき電話でぢやんと聞いて置いたから大丈夫。こゝから自動車で帝劇まで三十分とかゝらないわ。大丈夫よ。」

「大丈夫だつて、まだみんな食事は済んでゐないのだけ。」

「もう、わたしとお姉さまは十分よ。アンナをばさまも、もう召しあがりたくはないやうなお顔よ。」

「はゝあ、それでパク、大急ぎでやつたのだな……とにかく僕が食事が終るまで待つて貰ひたい。」

「お兄さまは、あとでゆつくり召しあがるといゝわ。わたし昨日からお姉さまと、帝劇へゆく約束がしてあるのよ。」

「そりやお前達の勝手な約束だ。無理に今夜いなくなつてもよからう。」

「アンナをばさまのお好きな「アイダ」は今夜きりなのよ。……わたしちよつとをばさまのお家へ電話かけてくるわ。みんなで帝劇にゆくことになりましたから、お歸りがすこしおそくなるつて……」
菊江は飛ぶやうに部屋を出て行つた。棟吉はフォークをつかんだまゝ、啞然として怒れもしなかつた。

玄關まで、みんなのあとからついて来た棟吉は、なんだかしてやられたやうな顔をして、「今日は、すつかりひどい目にあはされたよ。」と、仰山らしく歎息した。といつて、べつに帝劇までついてゆかうともいはなかつた。はじめは面白半分であつても、かう自分で自分の機嫌に、妙なひづみをつくと、龍子は飽くまでくだらぬ「挑戦」をつつけてゆく女であることをこれまでの経験で彼はよく知つてゐた。で、アンナ夫人が氣の毒さうに彼を誘つても、彼は「まあ、今日は哀な棟吉といふことにして置ませうよ。」と、笑つたゞけであつた。

化粧室から、着物を着かへ化粧をなほして出て来た龍子は、眼がさめるほど妖艶であつた。棟吉は輝くこの肉體が、すべて自分のものであると思ふと、もう充分満足して、葉巻の煙をプツとふきながら、今更のやうに自分の幸福に酔つてゐるやうに見えた。彼はうつとり妻の姿に見とれてゐるのであつた。

しかし龍子は、黙つて、ろく／＼棟吉のはうに眼もやらず、ひとり調子に乗つて騒ぎたてゝゐる菊

江にうながされながら、自動車に乗つた。

「もう七時廿分よ。齋藤、全速力だよ。」

菊江は自分で車の扉をしめながら、運転手に命じた。

「では、棟吉さん、さようなら。」

「をぢさま、さよなら！」

アンナ夫人とテルコは、手を振つて窓から挨拶をした。

「や、左様なら！ ゆつくり見物してゐらつしやい。」

棟吉は胸をそらすやうに、笑つて目禮した。

……彼等の自動車が帝劇についた時には、演技がはじまつてゐた。

「急の思ひつきだから、今夜はここで切符を買はなきやならない。特等席ならあいてゐるでせう。」

菊江は身輕るに切符賣場へ走つた。

「や、龍子さん。」

ちやうど龍子がテルコの手をひいて、アンナ夫人と話しながら、階段の下で待つてゐるわきを、ひとりの紳士が急いでのぼらうとしたが、ふと振りかへつて聲をかけた。

「おや、小宮さん。」

「偶然ですな。しかしよいところでお目にかかりました。……お、これは奥さん。御一緒に御見物でございますか。いや、ほんたうに重ねくの偶然だ。」と、彼は帽子をとつて、「先生はいかゞです。仕事がいそがしいので、しばらくお訪ねしませんで、失禮いたしました。」

「おいそがしいの、けつこうです。」

アンナ夫人は愛想よくうなづいた。

菊江が走つて来た。

「切符買ってよ。いゝ席でもないのだが、でも、特別席があいてゐたわ。」

彼女は、そこに立つてゐる紳士に、ちよつと眼をやつた。

「菊江さん。この方は小宮さんといつて、造船のはうをやつてゐらつしやる方なの。……小宮さん、これは隈部の妹で、菊江さんといひますの。」

「あ、隈部さんの御令妹でゐらつしやいますか。わたくしは小宮徹郎と申す者で……隈部さんとは近來御懇意を願つてゐる者でございます。以後どうぞよろしく。」

「わたくし、隈部菊江で……どうぞよろしく。」

ふたりは、叮嚀に挨拶した。

「いや、幕が開いてゐるやうです。どうぞ……」

「では、また後ほど。」

小宮は案内女にみちびかれて二階の一等席のはうへ、龍子等は一階の特等席のはうへ、軽く會釋して別れた。

舞臺では、花やかな喜歌劇がはじまつてゐた。

「おや、お姉さま。小宮さんが二階のあすこにゐらつしやるわ。こつちを見て、笑つてゐてよ。ほら……ね。」

菊江は、自分の前の、龍子の椅子を手で敲いた。龍子は、「あゝ」といつたが、舞臺に眼をやつたまゝ、べつに二階を見るでもなかつた。菊江は、龍子に代つて小宮に笑顔で應じた。

——呼び物の「アイーダ」が開くまで、幕時間が二十分あつた。

——と、割合に人通りの少くない北側の廊下の或る隅で、低聲で立ち話をしてゐるのは小宮と龍子であつた。小宮の顔には、さつきとはちがつた、陰険らしい影がうかんでゐた。

「龍子さん……とにかく一度、どこかでちよつと會つてくださる譯にはいきませんか……」

「駄目よ。……あんなこと……」

「いや、もう、あんなことを申しあげるのではありません。僕として、一應あなたの……」

「いまさらあなたの言ひ譯をきいても、はじまらないわ。」

「いや、言ひ譯じやありません。小宮はそんな卑怯な真似はいたしません。」

「卑怯だかどうだか知らないが、とにかく見つともいゝ真似じやないわ。手紙にあんなことを書いてソツと渡すなんて、もう舊式だわ。すくなくとも、あなたの年齢でする仕事じやないわ。第一、あなたは文章がまづいから、貰つたはうで讀んでをかしくなるばかりで、ちつとも感動なんかしないわ。」

龍子は、ピシ／＼いつた。

「どうも手ひどくやられますね。」小宮は苦笑して、「まるでかたなしですな。」

「どうして男つてものは、そんなに甘いのでせうね。顔を見ると、みんな鹿爪らしくつて、賢さうでするぶん立派な方が多いのだが、すこしお交際して見ると、きつと甘いところがバレて来て、だんだん敬意を失つてしまふのよ。……小宮さんなんぞはすこし謀叛人型で、グツと腹のすわつてるところが、わたし好きだつたんだけど、あんなに他愛なく甘いところを見せられちゃ、失望してしまふばかりだわ。」

「こりやあ驚いた。謀叛人型はひどい。」

「でも、わたし謀叛人型は好きなのよ。わたし自身がすでに謀叛人なんですもの。」

「あなたが謀叛人！」

「えゝ、さう。」と、龍子は事もなげに微笑して、「わたしは、男つていふ男へ、挑戦してやりたいの。」

「挑戦？」小宮は、チロリと龍子の顔を見たが、「……相變らず龍子さんは悪人がりたい人ですね。しかし、男つていふ男へ挑戦してやりたいなどいふ言ひ草は、一種の感傷主義ですよ。あなたのお道樂ですよ。考へやうによつちや、それがあなたの甘さかも知れませんよ。」

「おや、小宮さんにしちや、ちよつと面白いことをいふのね。わたしの挑戦がわたしの甘いところ……ふゝゝ、さうかも知れない。」

「とにかく、どこかで一度お會ひくださる譯にはゆきますまいか。」

「すこし人が感心すると、ちやんとその機會をのがさないで、追撃して來るのね。なか／＼油斷がならない。」

「こんどの大森のテニスの、納會試合にはいらつしやるでせう。その歸りにちよつと新橋驛あたりで下車していたら……」

「だが、この間の手紙に書いてあるやうな話なら、キツパリこゝでお斷りよ。」

「いや、もうあんなことは……」

小宮はまた苦笑して、頭を掻いた。

「あら、お姉さまこゝにゐらしつたのーわたしテルコちゃんとするぶんはう／＼探したわ。」
テルコの手をひいて、菊江が小走りにやつて來た。

「どうです。みんなでお茶でも飲みにゆかうでやありませんか。」と、小宮は菊江に挨拶しながら、龍子を振りむいた。

「もう、そろ／＼幕があきますよ。」

「いゝわ、お姉さま。「アイレダ」は第三幕と第四幕がいゝのだわ。みんなで一緒にゆきませうよ。」

「だが、わたし達は、家の食堂からすぐこゝへ乗りつけて来たのじゃないの。」

「あら、でも、もうあれから時間がたつてゐるわ。わたし、お茶とお菓子と果物くらゐならつきあへるわ。」

「お茶とお菓子と果物……菊江さんは健啖家ねえ。」

「あら、健啖家だなんて……そりやひどいわ、お姉さま。」

菊江は、氣にするやうに小宮を見た。

「健啖家——結構じやありませんか。」小宮は眞面目顔で菊江に聲援した。「お嬢さん。僕も大の健啖家です。」

「菊江さん。小宮さんは大學時代からテニスで鳴らした一流の運動家なのよ。その時代にわたしの家へ来て、お汁粉を十杯ちかく食つてみんなを驚かせたことのある人よ。」

「さう／＼、あの時は日比野先生も随分驚いてゐらつしやいましたな。はゝゝゝゝ。」

「小宮さんも、そんな健啖家なの？」

菊江は安心したやうに、また頼もしいとでもいひたいやうに、小宮の顔をデロ／＼見た。

一つの道

今日も靖也は朝から書齋に入り込んでゐた。すこし曇つて風の寒い日だったので、彼のデスクの傍には、石油暖爐が置かれてあつた。暖爐の上のアルミニウムの湯沸しは、シュン／＼機嫌よくたぎつてゐた。

その暖爐から三尺ばかりはなれで、椅子に足を重ねながら、快活に話しかけてゐるのは、あれからしばらくぶりの高柴であつた。

「震災以來この暖爐には方々でお目にかゝるが、石油を焚くのですからすこしは油煙が立つだらう。衛生にわるくはないか。」

「さうでもないね。石油はチエスタアといふ、無煙のを使ふのだから。」

靖也は暖爐をのぞいて、すこし焰を細めながらいつた。

「この點、僕のあるアパートメントは完全だな。部屋々々は蒸氣が通つてゐるのだから。」

「さうか蒸氣といへば、むかし一高にゐた頃は、冬になるとよく蒸氣鐵管の上に目白押しにならんで寮歌をうたつたり、校風を論じたり、面白かつたものだな。」

「學生時代——ことに一高の寮生活は、今でも忘れられん。なにしろよく読みよく食ひよく遊んだよ。暖まつた鐵管の上に宙乗りしながら、宗教を論じ美術を論じ、運動競技を談じ、戀愛事件をスツパぬきさ。……さうく、戀愛事件といへば、君、あの赤門前のちつほけな果物屋の娘で美人がゐたね。すこし年齢は食つてゐたが、たしかに美人だつた。あれが君にすつかり參つて、君が買ふと林檎か柿か、きつと二つ三つはまけてくれた……」

「馬鹿なことをいつちやいけない。」

「馬鹿なことじゃない。あれはたしかに君に思召しがあつたんだぜ。當時はこつちが吞氣だからあまり氣にもとめなかつたのだが、君が買ひにゆくと、とにかく量が多いのだ。そこで阿彌陀籤で果物を買ふとなると、いつも君も總代に派遣したものだね。」元雄は愉快げにドンと重ねた足を床に投げ出して、「あの美人はどうしただらうな。いつか本郷通りをあるいた時、氣をつけて見たら、もうあの果物屋はなくなつてゐたよ。佳人薄命……どうしただらうな。」

「薄命どころか、いゝところへお嫁に行つて、立派に暮してゐるだらう。」

「いや、店をたゝんだところを見ると、どうしてもこれは悲劇に扱ふべき筋だよ。どこか小暗い裏店

に住居をして、當時白面の美少年君塚君の面影をしのびながら、病床に臥してゐることにする。……

「や、しかし、これではすこし平凡かな。新派悲劇じゃあ、君も納まるまい。はゝゝゝ。」

「君は近頃なにか書いたか。」

「うむ。いま雑誌にたのまれて、社會劇を書いてゐるがね。」

「長いものか。」

「さうだな。二幕にはなるだらう。」

「どこかで上演するのかね。」

「僕の戯曲は、いつも上演意識をもつて書くとか、野心と巧智が見えすいて不快だとか、月評子からやつ、けられてゐるから、こんどはひとつ日本でも西洋でも到底上演不可能だつていふやうなものを書いて、どうだ態あ見ろと見得をきつてやるつもりだ。」

「戯曲のことは、僕にはよくわからないが、上演意識を以て書くことは、戯曲家として當然のことじやないのかね。」

「勿論僕の主張からいへば、上演意識をもつて書かれない戯曲はゼロなんだが……いや、世の批評家つて奴くらゐ出鱈目で無責任で、碌々研究もしてゐないくせに、なんでも知つた顔をする不愉快な人間はないよ。西洋でも「批評家のことを駈つこを教へる足なし男」だとか「間諜眼鏡を持つた怠け者

だとか罵つてゐる文學者がある。」

「さうかね……面白い言葉だね。」

「實際世間には嫌な奴が多くて困るよ。もつとも、彼方でもこつちを、嫌な奴だといつてはゐるだらうがね。……やつぱり一高時代は呑氣でよかつたな。あの時代には、嫌な奴だと思つた人間はひとりもゐなかつたからな。みんな無邪氣で善良で快活な友達ばかりだつたからな。」

「さうだつたね。」

「いや、待つたさうでもなかつた、あの時代にも嫌な奴はあつたよ。」

「……それは誰だ？」

「小宮だよ。」

「小宮つて、小宮徹郎君か。」

「さうだ。あいつは嫌だつた。變に傲慢で陰險らしくつて、僕はあの男の顔を見るだけでも嫌だつた。」

靖也はちよつて苦笑して、

「君は小宮君とは、あの時代からどうも氣があはなかつたやうだね。」

「あの時代からこの時代からも、あんな男と氣があふ譯があるものか。眞實といふことを知つてゐ

る人間なら、一日とあんな男につきあつてはゐられない筈だ。」

「しかし造船に對する小宮君の技術は、たしかに立派なものだよ。設計などに老大家をしのご手腕を見せたものがあるよ。その點には僕、眞の敬意を拂つてゐる。」

「駄目だよ。」と、高柴は首を振つて、「いくら技術が優れてゐるのなんのといつても、要するに人格だよ。なかしから名工名匠と呼ばれてゐる人物は、みんな立派な人格をもつてゐたのだ。人格あつての技術だよ。彼等の制作は、技術の結果といふよりも、彼等の人格の反映に他らないのだ。眞宗のうつた刀が、仁と愛との活人劍で、村正のうつた刀が、惡氣にみちた殺人劍だといふのも、つまり二人の人格の相違からなのだ。あの小宮がどんなに技術に長じてゐるのか知らんが、あんな男に造られた船は、末は海賊船か密獵船か、兎角あの陰險な人格相應の船になつてしまふ運命をもつものだよ。」

「高柴君一流の獨斷説がはじまつたな。」

靖也は笑つた。

「獨斷説ぢやないよ。人格と藝術とは古來から併行するものだと言かれてゐる。……とにかくあの男には油斷がならない。君はあの男と同じ専門に進む人であり、またあの男と同じく日比野博士から薫陶を受けてゆく人であるから、僕は君に、あの男にはめつたに心を許してはならないと忠告して置きたいのだよ。」

「ありがたう。しかし、正義の前にはどんな邪智も力も失ふわけだから、僕さへ清く正しく自分の道を守つてゆけばすべて大丈夫だ。」

「時に、日比野博士で思ひ出したが、君あれから先生のお宅を訪問したかね？」

「……いや、まだ……」靖也は苦しげに額を押へた。「一度、先生のはうかから電話はかゝつて來たが……」

「どんな電話だつた。」

「心から慰めてくださつたのだ。」

「それで君は、まだ先生にはお會ひしないのかね？」

「……あゝ。一度お伺ひしなければならぬのだが、電話で先生の同情のあるお言葉を聞いてゐると難有くつて涙がこぼれると同時に、どうも先生に會はせる顔がないといふ苦しさを感ずるので……」

「……」

「いや、會はせる顔がないとか、君自らが重んじてゐる責任観だとか、もうそんな理窟の問題ぢやない。君が先生を訪問しないのは、道義上の問題だよ。君は先生を最も尊敬すべき師として信じ、先生も亦、君を第一の弟子として愛していらつしやる。……この前歐洲へ漫遊なすつた時も、先生は兄弟

子にあたるべき小宮を措いて、君を連れてゆかれたほどではないか。その先生に御心配をかけながら單に顔をあはせるのが苦しいといふくらゐの勝手氣儘な理由で、なんの挨拶にもゆかないといふのはどうも君らしくないやりかただね。それでは先生の信頼にそむくのだ。恩義にもとるのだ。……さうぢやあるまいか。」

「わるかつた。まつたく、僕がわるかつた！」

「とにかく、明日にでも、是非先生を訪問したまへ。」

「いや、明日ぢやない。今日……これからゆかう。」

「今日、これから……それはなほいゝことだ。」

「では、失敬して、支度するよ。」

「いゝとも。先生のお宅は赤坂榎町だつたね。さうすれば、僕も水道橋まで電車でおつきあひできる。」

「では、待つてゐてくれたまへ。」

靖也は、急いで書齋を出て行つた。

高柴はポケットからチェリーをつまみ出したが、口にくはへるでもなく、しやちこばるやうに椅子から手足を伸ばしながら、満足げに口笛を吹いた。

「……なんといつても善良な男だ？ 愛すべき友だ！ 嬉しい兄弟だ！」

そして彼はひとりで軽く笑つた。

この頃すこし持病の喘息になやまされてゐる日比野博士は、毎日大學から歸ると、ひどく疲れたやうに、客間の大きな安樂椅子に腰をおろして、口に手巾をあてながら、ゼイ／＼息をきらしてゐるのであつたが、それでも元氣で勤勉な博士は、講義を休まうとはしなかつた。

それに、一ついけないことは、博士の喫煙癖であつた。讀書以外には、ちよつと盆栽をいぢくる位が博士の道樂といはゞいふべきものであるが、なによりの博士の慰めといふのは喫煙であつた。博士に會つた人で、誰でも深く印象づけられるのは、博士の口から、ほとんど葉巻がはなされる時を見られないといふことである。半白の髭と、葉巻をはさむ右の人差指と中指とは、脂に焦げ、煙にいぶされて、眞つ黄色に染つてゐる。喘息になやまされながらも、博士は葉巻だけはやめようとはしない。醫師がいかに注意しても、アンナ夫人がどんなに忠告しても、博士はこれだけは許してくれと、笑つて哀願するやうにいふのである。博士はよく、トマス・フッドや、チャールレス・ラムなどの英詩人がうたつた、煙草の歌を微吟する。その詩には、煙草はわが生命の希望であるとか、紫煙を通してのみ世界の眞理は見えるとか、うたつてある。煙草の話になると、博士の顔は、いつも子供のやうに嬉しがつて来る。重力の原理を考へたニュートンも、獨逸の鐵血宰相ビスマークも、大詩人ミルトンも大戯曲家シェークスピアも、みんな嚙むやうに煙草が好きだつた。もしも彼等が煙草を喫なかつたら

あの偉大な物理學上の發見も、普佛戰爭の勝利も、また、すばらしい「失樂園」も、「ハムレット」や「オセロ」も、或は成功するを得なかつたにちがひない——とは、博士の煙草禮讚からの所説なのである。

今日も博士は、大學から歸ると、客間の安樂椅子によつて、しめきつた縁の硝子戸を、陽に酔つた土蜂が、とまどひしたやうにコツ／＼うつのをウツトリと聞きながら、葉巻の煙を吐いてゐた。

牛乳茶碗を盆にのせて、アンナ夫人が入つて來た。

「あなた、牛乳です。」

「あゝ、さうか。難有う。」

「あなた、今日は何の御病氣いかが？」

「あゝ、だいたい、やうだ。」

「ほんたうにあなたがその喫煙をおやめなされると、もつと、すつとはやくよくなるのですがねえ。」

「むゝ……だが、それは駄目だ。これをやめると、喘息はなほつても、ほかのもつと恐ろしい病氣になるよ。」

博士は笑つた。

「恐ろしい病氣？」

「憂鬱病か、精神錯亂かだ。はゝゝゝ。」

「困つた人ですねえ。」

「困る。たしかにわたしも自分で困つてゐる。しかしこればかりはどうすることもできない。もしわたしが葉巻をやめたら、きつと一日不機嫌な顔をして、お前や家の者を、譯もなしに叱りつけたり罵つたりするかも知れない。そんなことがあつては家の平和をみだすからね。……つまり葉巻の煙は、わたしの原動力を増す石炭の煙であり、また家庭に天國の楽しみをひろげる、美しい五色の雲なのだからな。」

「しかたがありませんですねえ。」

アンナ夫人も釣りこまれて笑つた。

「家庭の楽しみといへば……この頃、龍子と棟吉さんとは仲よくいつてゐるかね。お前は昨夜龍子といつしよに帝劇へ行つたさうだが。」

「どうも……あの家庭にもこまります。」

「さうか。やつぱり夫婦喧嘩をやつてゐるのかな。」

「えゝ……昨日ゆきました時にも……」

「やつてゐたのか？——困つた夫婦だな。」

「龍子さんのわがまゝが、すこしひどすぎるやうです。」

アンナ夫人は、簡単に昨日の龍子の我儘振りを話してきかせた。

「さうか、どうもしかたのない女だ。」と、博士はうなづいて「うちにゐてお前に教育されてゐた頃はあゝまでは我儘ぢやなかつたのだがな。棟吉さんも、もつと良夫としての威信を示さなくつちやいかんのだ。すこし愛に溺れてゐるやうだ。だから龍子はます／＼我儘になるのだ……」

「龍子さんは學生生活のころは、とくべつ我儘でもなかつたですにねえ。」

「しかし、あの頃から、なか／＼矜持は強いやうだつたからな。」

「さう、矜持はつよくございました。」

「矜持といふものは、よい意味からは、決して排斥すべきものではない。愛國心とか、向上心とか、研究心とかいふものは、その國に對する、或はその地位に對する、或はその學問知識に對する矜持から起るものだからな。しかし、誤れる矜持はいけない。妬みや恨みや復讐や、高慢や虚榮や我儘やみんなこゝから起るのだからな。」と、博士は自分の言葉に自分でうなづいた。「龍子のイギリスにゐる頃の矜持は、それでもまだいゝはうの矜持だつたが、日本へ歸つて來てから、ことに隈部の家に嫁入つてから、それが誤れる矜持になつてしまつたやうだ。どうもあれは困つた性質だ。いまのうちに、なんとか言つてやらなければなるまいが、もう戒めたり諭したりされる年齢でもないのだから、お前

もなにか話のついでに、ときどき注意してやつてください。」

「さうですねえ。……しかし、龍子さんはかしこいから、そのうちには自分で気がつく時がくるでせう。」

アンナ夫人は、静かに博士の顔を見た。

「……あの君塚君なんでも、イギリスでは随分龍子にいぢめられたものだつたねえ。」

「ええ、そのはなし、棟吉さんも知つておりました。」夫人は笑つて、「あなた、牛乳がつかなくなりました。」

「あゝ、さうだ。」と、博士は茶碗を取りあげて、「……ほんとうにあの時の君塚君は氣の毒だつたよ。」

食堂へゆけば、食事の作法を知らない、匙ひとつ持つのにもツケ／＼いふし、宴會へ出れば、挨拶の禮儀がまちがつてゐると、多勢の前もかまはず皮肉をあびせかけるし、會話の發音が變だと、大學を出てゐるくせに英語がしやべれないと嘲るし、あの頃の君塚君は、龍子の前では立つ瀬のないやうな顔をしてゐた。わしが、お前はもう二年もさきから來てゐる人間、君塚君はまだ僅かの月日しか

こゝにゐないのだから、それは無理といふものだととりなすと、大體君塚さんは鈍感だ、自分はこゝへ來て、まだこんなことで、一度も他人から笑はれたことはないつて威張るのだから、全くやりきれなかつたよ。はつはつは？……日本に歸つてからも、ときどきはやられてゐたやうだつたねえ。」

「しかし、龍子さんは、この頃ずぶん君塚さんに、同情をもつてきたやうです。」

「ふうむ、さうかね？」

「ゆうべ帝劇に行つたときも、自動車のなかで、たいへん君塚さんをほめておりました。」

「ほめてゐた？……すこしは龍子にも、君塚君の人物がわかつて來たのだらう。」

「わたしは、あんな人をじゆうぶん助けて、立派な仕事をさせてあげたいといつておりました。」

「ふうむ、さうかね。」博士は笑つて、「そんな時に、前には随分いぢめぬいたじやないかと、いつてやればよかつたよ。」

書生が入つて來た。

「ふうむ、さうかね？」

「ゆうべ帝劇に行つたときも、自動車のなかで、たいへん君塚さんをほめておりました。」

「ほめてゐた？……すこしは龍子にも、君塚君の人物がわかつて來たのだらう。」

「わたしは、あんな人をじゆうぶん助けて、立派な仕事をさせてあげたいといつておりました。」

「ふうむ、さうかね。」博士は笑つて、「そんな時に、前には随分いぢめぬいたじやないかと、いつてやればよかつたよ。」

書生が入つて來た。

「唯いま、君塚さんがおいでになりました。」

「なに、君塚君が來た？——噂をすれば影だね。すぐ、こつちへ通してくれ。」

「はう。」

アンナ夫人は、牛乳茶碗を片づけながら、

「君塚さん……ほんとうに、しばらく會ひません。」

「さうだねえ。もう二三ヶ月も來なかつたかな。久しぶりだ、なにか御馳走してやつてください。」

「いま、アップル・パイをつくりかけておます。」

「それはちやうどいゝ。あの男は甘いもの好きだから喜ぶだらう。」

書生が、靖也を案内して来た。

「お、君塚君か……つい今まで、家内と君の噂をしてゐたところだよ。」

「君塚さん、おひさしぶり、よくいらつしやいました。」

博士と夫人は、椅子から立つて靖也を迎へた。

「先生……まことに御無沙汰いたしました。なんとも申譯がございません。」

靖也はもう聲を震はせてゐた。

「どうしたのだ、君塚君、わしも家内も心配してゐたよ。」

「なんとも、申譯がございません。」

「なに、申譯のなんのといふことではないさ。……まあ、とにかく掛けたまへ。」と、博士は椅子を勧めながら、「いろ／＼聞きたい話があつたのだが、なにしろ君の顔を見なければ——君だつて僕の顔を見なければ——お互に實際の心持はわかるものでないからな。手紙に書いたり、電話で聞いたりではそれがどんなに詳細に説明を加へられようと、人間の眞の「交 通」といふものは得られない。誰だつたか、西洋のえらい哲學者がいつたね。人間は顔と顔をつき合はしてゐれば、黙つてゐても、そこに眞の「交 通」ができる。會話といふものに言葉は單に合圖とか符號のやうなもので、最も必要なものは、そこに閃光する心持と心持の交換である——と。とうだね、君塚君。」

「……はあ。」

靖也は頭をさげた。

「だから僕は君の訪問を、どれほどか心待ちに待つてゐたのだよ。」

「は……まことに申譯がございません。」

「どうしたのだ。君は今日、妙に堅つくるしいね。まるでなんだか初對面の人のやうぢやないか。しばらく會はなかつたといつても、そんなに遠慮がましい顔をしてはいけない。いつものやうにくつろいで談笑したいものだな。」

「はあ。」

「この間、御母堂からも聞いたが、君は近頃随分無理な勉強をしてゐるさうだな。元來勉強家の君がまた一倍勉強しはじめたといふから、僕はたしかに身體に無理なことをしてゐるのだと思つたよ。勉強は結構だが、その勉強の原動力たる健康を考へねばいけない。」

「難有うございます。」

「しかし、もうそろ／＼、英國留學時代の研究を、まとめてもいいな。どうだね、ひとつ、奮發して學位論文を書く氣はないかね？」

「そのやうなことは……まだ、到底わたくしの力では……そして、先生の前ですが、學位といふもの

は、わたくしには不必要で……」

「いや、學位論文といつて、なにも學位得たさに書くのではないことは、君も知つてゐる筈だ。たゞ、君が研究をまとめて發表することは、君自身のためといふよりも、學界のため、廣い意味で社會文明のためだよ。學問といふものは、個人がこれを習得し研究し發明するのだとしても、實は決してその個人が、自分の頭腦の中や書齋の中に、秘藏して出さないといふ譯にはいかない。社會は有機的に完全な發育を遂げようとする上から、その學問を私有することを許さない。社會は公益の名のもとに、その個人に向つて、知識技能の出資をせまる権利をもつてゐる。……學位といふものは貰つたところで仕方がないと、受取らなかつた學者もあるやうだが、學位は學問といふ名譽のためのもので、個人の名譽——名刺に刷り込むだけの名譽——のためのものではない。それは個人のものではなく、公人のものなのだ。社會のものなのだ。しかしまあそんな第二義的のことはどうでもいゝ。君はひとつ、君自身のためにでなく、社會のために、あの研究をまとめてなければならぬ義務があるのだよ。」

「はゞ。」

「どうも、いかなな、君は……なんだか嫌に今日は堅つくるしくて……さあ、もつと、くつろいでくれたまへ。それでなくちや僕の言葉までが妙に理に陥ちて來さうだ。アンナ、いまいつた、パイを早く出して下さい。それから珈琲を濃くして……君塚君は煙草をのまいから、話に相の手がはひらな

「はゞ。」

「君塚さん、こんどはそろ／＼お得意の煙草哲學のお講義がはじまりますよ。」

アンナ夫人は、愛想よく笑ひながら出て行つた。

博士はまた葉巻をくはへた。ゆつたりと椅子によつて、軽く紫煙を吐く時、博士の顔はすべてを忘れてしまつたやうに、いかにも樂しげであつた。

ふと、なにか羽ばたきするものがあつた。

「……われ、かれらに、ひとつの、こゝろと、ひとつの、みちを、あたへて……」

靖也は、突然の、この妙な聲に、ちよつと驚いて顔をあげた。

「九官鳥だよ。家内が近頃飼つて、なにか聖書の文句を教へたのだよ。」

博士は笑つた。

「あ、九官鳥ですか……」靖也ははじめて靜かに笑つた。「よく記憶をましたね。」

「來て見たまへ。家内は大得意なのだ。毎日、暇さへあれば聖書の文句を教へてゐるのだ。今に讚美歌をうたはしたり、いろんな小唄をうたはせて見せると、えらい熱心なのだ。」

博士は椅子から立つて縁に出た。靖也もついて出た。そこに置かれた金網の籠に、九官鳥が縋子のやうな艶やかな青い羽をそろへて、とまり木の上にケロリとつかまつてゐた。

「今日は！ いかゞですか？」

博士は籠をのぞきながら笑つた。

九官鳥は黙つて迂散臭さうな眼を、キヨロリとあげた。

「今日は！ いかゞですか？……こいつ、御主人が挨拶してゐるのに、知らん顔をしてゐるな。……今日日は！ いかゞですか？」

「こん、にちは、いかゞ、です。」

九官鳥は羽ばたきました。

「可愛いものですな。」

靖也ものぞき込んだ。

「こん、にちはいかゞ、です。」

「は、君にも挨拶してゐるよ。」

「さうですか。……難有う。大變元氣です。」

「ありが、とう、たい……」

九官鳥は、しきりに首をうごかした。それが思案でもしてゐるやうなので、博士と靖也は、また笑つた。

「大變元氣です……」

「たい……へん……」

「大變元氣です。」

「たい、へん……」

「元氣です。」

「げんき……」

九官鳥は面倒臭いといはぬばかり、彼方向いて黙り込んだ。そして、デレたやうに嘴で金網をついた。

「いや、面白いものだよ。こんな鳥一羽でもかうして家に置くと、やつぱり家族の一員になつてしまふのだね。今じゃこいつの生活が、立派に僕たちの生活に入り込んで來てゐる。こいつが機嫌よくおしゃべりしてゐると、家の者もお互に快活に話し合つてゐるが、こいつがいかに不機嫌らしく黙り込んでしまふと家のみんなも、妙に不機嫌になつてしまふから、をかしたものだよ。」

博士は靖也と椅子にもどつた。

アンナ夫人がみづから茶道具を運んで來た。

「手製です。うまくないこと大丈夫のアップル・パイです。ほ、ほ。」

「奥さん、九官鳥と今おはなしをいたしましたよ。愉快なものですね。」

「まあ、さう……あの鳥はよくものをおぼえてくれます。なにか言ひましたか？」

「一つの心と一つの道を興へて……聖書の言葉ださうでございますね。」

「え、あれはわたしの好きな聖書のことばです。耶利米亞記にあります。——I will give them

one heart, and one way——エホバのことばです。」夫人はそこに立つたまゝ敬虔な態度で暗誦す

るやうに、「——われ彼らに、ひとつのこゝろと、ひとつの道をあたへて、つねにわれをおそれしめ

んことは、彼らとその子孫とに、さいはひをえせしめんためなり」——わたしは、このことばがすき

です。「ひとつのこゝろと、ひとつの道」といふことばがすきです。」

「一つの心と、一つの道——」

靖也はジツと考へながらうなづいた。

「さあ、君塚さん。お茶をおあがりなさい。」

「は、難有う。」

「一つの心と、一つの道——僕も好きな言葉だよ。人間は一つの心に動き、一つの道をゆくばかりな

のだ。」

「一つの心——一つの道——」靖也は強い感激にうたれたやうに博士の顔を見た。その眼は燃ゆるや

うに光つてゐた。「先生、今日は、なによりの言葉を聞きました。さうです。わたくし達には一つの心

と一つの道があるばかりです。先生、わたくしはまだ——仕事に對する熱が足りません。信仰が足り

ません。船渠で働く職工のはうが、わたくし達より、ずつと強い熱、強い信仰を持つてゐます。彼等

の振ふ鐵槌の音には、立派に一つの心が響き、一つの道がひらけてゐます……」

「さう……いや、しかし、君にも熱意はあるよ。僕はいつも君の仕事に對する眞剣な態度には敬服し

てゐる。君塚君、實際僕が君に期待してゐるものは大きいのだよ。それだけに僕は、いつも君の健康

を氣遣つてゐる。勉強するのはいい。だが、決して無理してはいけない。君の仕事はまだ——これか

らだ。いや、人間がほんたうの仕事をなし得るのは、四十歳以後なのだ。それまではなんといつても

準備の時代だ。精氣を養つて置く時代だ、自重してくれなければ困るよ。……僕だつてこれから更に

ひと勉強しようと思つてゐる。なにか一つだけは、自信のある仕事をやつて置きたいと思つてゐるの

だ。」

「先生ですらそのお心持なんですもの、わたくし達は、まだこの上どんなに勉強しても勉強し足りま

せん。……わたくしはどうも今度の雄康丸の破損の箇所が氣になつてならないのです。坐礁したとし

ても、船員の報告では前方の石炭庫の側面だといはれてゐるのに、わたくしの調べたところでは、

船尾肋骨のあたりにひどい破損を起してゐるのです。それで……」

「君塚君、その話は僕は聞きたくない。また僕に限らず、そんな話は軽々しく誰にもいふべき性質のものではない。君はあの仕事を立派な眞實をもつて終始した。僕は充分それを認めてゐる。それでいゝではないか。一つの心と一つの道——正しい信念信仰のもとに人間が仕事をしたとすれば、神はそれ以上の責任とか反省とかを人間に強ひるものではない。そんなことを繰り返へしていふのは、君が君自身の眞實を疑ふことになるのだ。いや神の眞實をも疑ふことになるのだ。さうではないか。」

「君の仕事はこれからなのだ。君はたゞいつまでも君のもつ眞實に生きて、一つの心に一つの道に、正しく強い信念信仰をもつて進んで貰ひたい。いゝか。君の仕事はこれからなのだよ。」

「は……」

靖也はうつむいたまゝ、五體を鞭うたれてゐるやうに震はした。博士が諄々と説く言葉を、彼は人間の汚穢と苦惱を拭つてくれる尊い聖僧の淨語とも聞いたのであつた。

アンナ夫人も、いつしか椅子に腰をおろして、祈るやうな眼で、靜かにふたりの姿に見入つてゐた。

「……さあ、これでなにかも分つてしまつた。あとは快談だ。君塚君はパイをやりたまへ。僕はちよつとこゝらで一服だ。」と、博士はすぐ葉巻をつまみあげて目を細くしながら、「こいつは僕の忠僕であり、親友であり、また或る場合には愛する妻でもあるのだからな。」

「まあ！」

アンナ夫人は、睨めるやうにいつた。

「いや、アンナの前で、愛する妻といつたのは失言かな。……しかし、クロウリイといふ煙草好きの詩人の詩に、A cigar is like a wife と云ふ言葉がある。ゆるして貰ふんだな。はゝゝゝ。」

それでみんな笑つた。

博士を中心に、氣輕な雑談がしばらく續いた。

——靖也は、まつたく晴やかな心持で恩師の家を辭したのであつた。ほんたうに今日こそ迷ひや惱みの雲が、吹き拂はれたやうである。眼の前に大きな光が、憂然として落ちて來たやうである。その光は彼の躍動をうながすやうに、揺れみなぎつてゐるとも感じられる。母、室田の叔父、高柴、そしていつに變らぬ日比野先生の好意、みんな心から自分を戒め勵ましてくれる。なんとといふ難有さ、なんとといふ幸福さだ！ たしかに自分は、仕事に對する信念信仰が足りなかつた。日比野先生のいはれた通り、飽くまで自重しなければいけない。それから勇氣だ。努力だ。精進だ……

「——一つの心！ 一つの道！」

彼は大地を見つめて踏み出す一歩々々に懸聲でもしてゐるやうにかう低く叫んだ。

……スツと紅く閃くものが、彼の眼の前を過ぎた。

驚いて彼は顔をあげた。

「なにを夢中で考へながらあるいてゐるの？——靖也さん。」

彼は再び驚いた。燦然と光る大きな紅玉の指環をはめた白い手が、いきなり彼の右手を掴んだのであつた。

「あ、龍子さんでしたか。」

「なにもそんなにびつくりした顔をしなくつてもいいわ。」

「……」

「こゝで出會すとは面白いのね。どこへおらしたの？」

「……」

「靖也さんがこの邊をあるいてゐるとは……あ、わかつた。父の家へ行つたのでせう？ わたしも今日はずいこの六本木のお友達の家で用があつて来たのよ。で、ついでに日比野へ廻らうと思つてあるいてゐると、靖也さんに出會したのだけわ。……ほんたうに、いいところで會つたのねえ。」

「なにをそんなに黙り込んでゐるの？ 靖也さんはこの頃わたしに會ふと、いつもそんなに、眉の間に皺をよせるのねえ。お友達に會つてそんな顔をするもんじゃないわ。」

「……」

「わたし、靖也さんには随分抗議したことがあるのよ。折角上野驛まで迎ひに出てあげたのに、あなたは碌に挨拶もしないで自動車に飛び乗つたり、この間も、わたしが訪問した時に、書齋から逃げ出したり、ほんたうに不愉快なことをするのね。わたしあなたから、あんな侮辱をうけるわけはないわ。靖也さんに會つたら、この頃のわたしはどうしてあんな嫌な真似をされるんだか、それを第一に訊いて見ようと思つてゐたの。」

龍子は詰め寄るやうに、靖也の顔をデロリと見た。

彼女の孔雀のやうな誇りをもつた美しさは、往來の人々の眼をそばだたしめるに充分であつた。みんな兩人の姿を珍らしげに振りかへりながら通り過ぎた。そこが電車の停留場に近かつたので、立つてゐた四五人の女學生は、批評がましい視線をしきりにこつちへそゝいでは、なにかヒソ／＼いひ合つてゐた。

「頭あ——右つ？」

××大學の帽子をかぶつた、不良らしい一團が、頓狂な號令をかけて、彼等のそばを駆けぬけて行つた。女學生達は笑つた。

龍子は平然と、そんなことには眼もくれないで、

「靖也さん。とにかくこんなところでは立ち話もできないから、どこかお茶でも喫みにゆきませう。そしてそこで……」

「龍子さん。僕は今日急いでゐるから、また……」

「なにを急いでゐるの？ わたしの前から逃げ出すことを急いでゐるの？」

「いや、そんな……」

「駄目よ。今日はわたしの心持を、ちゃんと靖也さんにわからせるまでは逃さないから。」

「なにも今更、あなたの心持をわからせて頂く必要はありません。」

「いゝえ、あります。靖也さんはわたしを誤解してゐる。」

「僕が龍子さんの、なにを誤解してゐるんです。どこに誤解するやうな理由があるんです。——そんな考へこそ、あなたの誤解だ。」

靖也はやゝ憤然とした。

「まあ、こゝではなんにもいへない。とにかくちよつと一緒にお茶でも喫みませう。」

「難有う、ですが、今日はこれで失禮したいのです。」

「……靖也さん。あなたは相變らず臆病者ねえ。」

「臆病者？」

「もつと怒らせてあげるわ。——靖也さんは卑怯者よ。」

「卑怯者……？」

「あなたが臆病者で卑怯者だといふことを、ちゃんと説明してあげるから、わたしについていらつしやい。この儘別れれば、靖也さんは、わたしからますます臆病者扱ひ、卑怯者扱ひをされる許りよ。」

龍子は、溜池のはうへ歩き出した。

靖也はいよ／＼不機嫌な顔をしたが、龍子から一問ばかりもはなれて、歩くともなしに歩いた。

彼等は無言のまゝで、暮れそめた坂なりの街を下りて行つた。とき／＼龍子は、監視するやうに振りかへつた。そして靖也がむつかしげに口を結んでついて来るのを見ては、満足でもあり面白くもあらうといふ風に微笑した。

……十五六分の後、兩人は溜池にちかい、或る小綺麗な珈琲店の二階で、草花を飾つた食卓に向きあつてゐた。

龍子の赤い唇には、緑晶色のペパーミントの杯が軽くあてられてゐた。

青く塗つたドアで、この一室が小さく仕切られてゐるのが、龍子にとつてはなによりも好都合であるらしかつた。彼女はグツと杯を乾て、むせるやうに手巾を唇にあてた。

靖也はこゝでも黙りきつゐた。彼は自分の杯に手をつけようともしなかつた。彼が強ひて或る不快

な心持を押へて、ギゴチなく氣むつかしげに眉を動かしてゐるのを、龍子は急所をねらふやうな鋭い眼で、手巾の蔭からチロリと見やつたのであつた。

「靖也さん。」

「……………」

「靖也さん」

「……………」

「靖也さん」

「……………」

「ほゝゝ、ほゝゝ、ほゝゝゝゝゝ！」

龍子は椅子から反りかへるやうに、爆發的に笑ひ出した。

靖也は、初めてまともに龍子を見た。

「ほゝゝ……ほゝほ……ゝゝゝゝゝ！」

靖也はなにか言はうとした。——が、また黙りこんだ。それを龍子は見逃さなかつた。

「靖也さん。」

「……………」

「なにか、今言ひたさうな口つきだつたのね。……そら、そら、また下唇ががすこし動いた。その唇の動きやうは「えゝ」とか「なんです」とか言ひさうじやないのね。でも、「煩いつ」とか「黙れつ」とかいふ勇氣もなさうね。そら、そら、また唇がが震へる。眉毛がビク／＼する。あなたはキツカケがはづれたので、喉まで来た言葉が出せないものでせう？ ほゝゝゝ。ひとつその杯でも床に投げつけるか、食卓をグワンと拳固で撲つてごらんさい。なにか言へるわ。きつと喉のところで詰つた言葉が出て来るわ。ほゝゝゝ、ほゝゝゝゝ。」

「……………相變らず……………」

靖也は言はうとして、また唾を呑み込んだ。そしてたゞ苦笑した。

「相變らず……………なんなの？ 相變らず龍子さんは馬鹿ですね？ 相變らず龍子さんは不愉快な女ですね？ 相變らず龍子さんは詭計の多い、嫌味たつぷりな人間ですね？ ……どのぶんの相變らずなの？ え？」

「……………」

「いや、相變らずあなたは……………」靖也はまづいものを口から吐き出すやうに、「困つた人だといひたいのですよ。」

「困つた人？ わたしが困つた人？ ——難有う。それはほんたうなの。わたしはたしかに困つた人

なのよ。ほんたうにこの頃はわたし、ひとりで困つてゐる人なのよ。困りぬいてゐる人なのよ。どう

しようかと思つて、困りぬいてゐる人なのよ。だから、今日は、その困つたところを、靖也さんに聞かせようといふのよ。」

「僕は、そんなことを、聞きたくありません。」

「まあ、同情のない人ね。嘘でもいゝから何を困つてゐるんですと、氣の毒相な顔ぐらゐするものよ。」

龍子はコツ／＼食卓を敲いた。女給が來た。

「これをもう一つね。」

龍子は杯を指さした。

女給がペーパーミントを注いで去ると、龍子はすぐ口をあてゝ、グツと半分呷るやうに飲んだが、

「靖也さん。わたしはあなたが知つてゐるとほりの、我儘で氣短屋だから、くだらぬ謎かけや、愚圖々々廻りくどい話はしない。ほんたうにわたしが困つた人だといふことを一言でいひますよ。それはね、靖也さん……」

「……？」

靖也は思はず龍子の顔を見たのであつた——ほんの一瞬ではあつたが、彼女の眞赤な、血をすゝつたやうな唇が、自嘲的に異形にゆがんだからであつた。

「それはね、靖也さん……」

「……？」

「わたしこの頃、まつたく今の生活の無意味だといふことを知つて來たといふことなの。——つまり棟吉の性格のつまらなさが、たまらなく嫌になつて來たの。良人を愛することができなくなつてしまつたのよ……。困りぬいてゐる人なのよ。どうしようかと思つて、困りぬいてゐる人なのよ。だから、今日は、その困つたところを、靖也さんに聞かせようといふのよ。」

「僕は、そんなこと、聞きたくありません。」

「えつ……？」

さすがに靖也は驚いた。

「それはほんたうのことなのよ。」と、龍子は、眼をつぶるやうにして杯を口にあてたが、「妻として良人を愛することができない——良人の人格を尊敬して、これに服従することができない——としたらこのくらゐ困つたことはないでせう？」

「だが」

「まあお待ちなさい。こんな問題は「それ故に」とか「何となれば」とかで、言ひなほすことも、訊きなほすこともできないものなのよ。理論を理論どほり、道徳を道徳どほりにやつてゆけるなら、わたしはなにも困つた人になりはしないわ。世間なみに善い悪いの判断を下すのなら、これは悪いにき

まつた話だわ。間違つてゐるにきまつた話だわ。……わたしはいま正直に、靖也の言葉の困つた人だといふことを、自分で認めてゐるでせう？ それを困らなくしろ、困らない人になる方法があるぢやないかといふのなら、それはほかの、なにか都合のいゝ感情を探して来て、それからもちのよささうな理性を借て来て、困つたところをどうにかうまく裏打して、これで大丈夫だとひとりで安心するよりほかはないわ。だが、この感情も理性も、實は一時しのぎの糊付細工よ。……ごまかしものよ。……これも困るでせう？」

「龍子さん一流の論法だ……」

靖也は苦笑した。

「論法？ 論法ぢやないわ。……はじめつから、悪い、間違つてゐる、困つた人だと、ちゃんと自分で決定を與へてゐることで、批評の餘地のない話なのだわ。」

「しかし、隈部さんがあなたを愛していらつしやることは事實でせう？」

「え、それは事實よ。」

他人ごとのやうに、龍子は無造作にうなづいた。

「その愛に、なぜあなたは愛をもつて酬いることができないのです。」

「……いけないのね、靖也さんは！ わたし、この問題に「それ故に」とか「何となれば」とかでは

答へられないと、斷つてゐるぢやないの？ 良人——愛さねばならぬ人——世間ではかういひます。道徳もかう教へます。しかし愛といふものは「ねばならぬ」ではないわ。Loversではないわ。愛する人といふものはあるが、愛さねばならぬといふものはないわ。愛は人間の希望なんぞでせう？ 希望はその人に當然のもの絶對のもので、悪くつても間違つてゐても、その人の希望はその人の當然であり絶對であるわけで、他からどうすることもできない。その希望は悪い、その希望は間違つてゐるといつても——そんな悪い間違つた希望といふものはあり得ないといつても——それは希望に都合をつけた上の批判で、ほんたうの希望といふものではないわ。實現することが可能か不可能か、道理か、不道理か、そんなことは別問題で、希望は飽くまで希望なのよ。人間は一番嫌で恐ろしい死をさへ希望することがあります。目的とか手段とかいふものには、善悪の區別がつけられるが、希望はどうにもすることのできないものなのよ。それで……」

龍子は雄辯になつた。彼女の唇は、いよく妖しく美しい艶を加へた——ほんたうにそれは眞紅であつた。緑晶色のペパーアミンも、その唇に觸れては、たちまち眞赤な血の色に變へてすゝらるべくも見えるのであつた。

靖也が耳傾けてゐようがゐまいが、そんなことには頓着なく彼女は續けた。
「それでわたしは、愛人といふものと良人といふものは、まったく別物だといふ結論に達したわけよ。」

わたし近頃、エミール・ルカの戀愛論を讀んだら、こんなことが書いてあつたの。——「結婚した夫婦の情と、愛人同志が結びつけられる眞の戀愛とは、その根本の上からも、また習慣の上からも、まったく相異つた感情である。互ひに似ても似つかぬ關係もないこの兩者を比較するといふことからして愚かなことである」と。——これは自發的な眞純の愛といふものを高調したツロヴァドア詩人が出た頃の、戀の法廷での或る判決なのですが、ルカはこれに對して、こういつてゐるの。かやうな考へを輕薄な戲言とするわけにはゆかない。否むしろそれは肉と靈とを混淆することのできない、二元的戀愛主義から生じた、當然の結論であると——」

「もう、およしなさい。あなたのいふことは、すべて不快だ。いや、不快といふよりも、僕が聞いてなんのたしにもならない話です。」

靖也は苦りきつて、窓から往來を眺めた。

いつの間にか龍子の前の杯は倒れて、白布を青く染めてゐた。

「だから靖也さんは、臆病者で卑怯者だといふのよ！」

「なにが臆病です、なにが卑怯です？」

「靖也さんは、もつと自分の感情に正直にならねばならないわ。」

「僕が感情に正直……？」

「靖也さん。あなたは自分の心にハッキリわかつてゐることを、言ふことも敢行することもできない人ね。」と、龍子は魔術でもかけるやうな眼で靖也を見たが、「駄目。靖也さんは英吉利にゐた時代はうが、今よりずつと勇氣もあり正直さもあつた。この頃はあなたに見得に近いものができて來た。そのためあなたは臆病にもなり卑怯にもなつた。まだいゝことは、あなたに情熱は失はれてないことなんだけれど、しかもその情熱をあなたは妙に荷厄介にして、それを自分の研究とか仕事とかに振り向けやうとしてゐる。そして研究と仕事以外には強ひて冷靜に構へ込まうとしてゐる。それはまつたく嫌味よ、不正直よ。だからわたしが、自分の偽らない心持をいふと、あなたは不快だとか聞きたくないとかいふのよ。」

「難有う。龍子さん……しかし、僕はこの頃一つの信念、一つの信仰に生きやうとしてゐます。そこに僕だけの勇氣もあり正直さもあるのです。今日も日比野先生を訪問して、一つの心と一つの道を、まつすぐに突き詰めてゆくことが、どれだけ尊いことかを教へられて來たばかりなのです。一つの心と一つの道、龍子さんには到底わからない言葉だ。はゝゝゝ。」

「さう？ 一つの心と一つの道といふ言葉に、わたしにはわからないやうな、そんなむつかしい、そんなえらい意味があるの？ では、そのお講義を聞かして頂きたいのね。それはさぞわたしのたしになることでせうから。」

龍子は、さつきの靖也の言葉を真似するやうに、兩腕を食卓に張つて圓い顔をつき出した。

「いや、それはよしませう。僕はこんな場所で、この尊い言葉を——先生と奥様が聖書からとつて戒めてくださった尊い言葉を——話すのは恥だと思つてゐる。」

「聖書の言葉なの？ 神様のお言葉なの？ さう？」と、龍子は肩をゆすつて、「靖也さん。神様といふものは、こんな珈琲店の二階には微笑してゐらつしやらないの？ わたしは、神様の榮光といふものは大きな遍在なのだばかり思つてゐた。」

「……」

靖也は黙らなければならなかつた。

「……しかし、もうこんな話はよしませう。なんだか二人の言葉と言葉が、うるさくこんがらがるばかりなのだから……いつまでも抽象的な話を進めてゐるのではつまらない。わたしははじめつから謎かけや廻りくどい言葉はないといつてゐたのねえ。で……」と、龍子は急に居住ひをなほして、「わたしは一つ、ハッキリ靖也さんに訊きたいことがあるのよ。靖也さんもハッキリそれに答へてくださるでせうね？」

「答へていゝことなら……」

「答へていゝことなら？」

「僕が當然お答へしなければならぬことなら……」

「さう。」龍子は改めてうなづいで、「では、わたしちゃんといふわ。わたしは臆病者でも卑怯者でもないのだから。」

「一々お断りには及びません。」

「まあ、皮肉ね。……でも、その位の皮肉がいへるやうになつたら、靖也さんもなか／＼話せるわけだ。そこで言ひますよ。」

「どうぞ。」

「……靖也さん。」

「……」

「靖也さんあなたはあの、英吉利にゐた時分の心持を、今でももつてゐらつしやる？」

「え？」

「あなたは、あの頃、わたしにもつてゐてくださった心持を、まだ忘れてはゐらつしやらないでせうね？ え？ 靖也さん。」

「……」

「わたし、ハッキリいひます。靖也さんはあの頃、どんなにか強い愛を、わたしにもつてゐらつした

のねえ……」

「……」

「……靖也さん。わたし、あの頃あなたの心持が、どうにもわからなかつたのよ。わたし、あの頃はまるでやんちゃなお跳さんで、たゞ眠の前に咲いた綺麗な花園を飛びまはる蜜蜂みたいに、自分の面白い世界だけを面白がつてゐたのよ。あの頃のわたしは、靖也さんの眞實がわかるまで、戀愛といふものについては無關心だつたのよ。たゞ無邪氣に本を讀んだり遊びまはつたりするのが嬉しかつたのよ。……どこまでもやんちゃなお跳さんだつたのよ。……そして日本へ歸つて來ると、すぐ隈部の家へ嫁つたのでせう？ まつたく夫婦關係がどんなものか、家庭生活がどんなものか、そんなことに深い理解も持ち得ないうちに、棟吉の妻となつてしまつたのでせう？ ほんたうに無我夢中で結婚したのだから、良人の性格や趣味がどんなだか知りもしないで結婚したのだから——いや、愛といふ大事なものも考へもしないで結婚したのだから、今ではこんなに、まつたく困つた人になつてしまつたのよ。これは父や義母が悪いのでもない、また棟吉が悪いのでもない、女といふものはかうした生活が約束通りに來るものだと思つて、ただなんの期待も希望もなしに、ほんやり結婚してしまつたわたし一人が悪いにはちがひないのだけれど、それでもかうして次第に自分といふものに眼ざめて來ると、どんなに今の生活が無意義だか、どんなに今の自分が悲惨だかがハッキリわかつて來ましたの。そし

て靖也さんには、どんなに濟まないことをしたか……」

「濟まない？ ——濟まないことはありません。なにが僕に濟まないのです？」

「濟まないじやありませんか。わたしがあなたの愛を受け入れることができなかったといふことは……」
「もうそんな話なら結構です。おやめなさい。よしてください。僕はそれ以上を聞きたくない。これを知りたくないのが臆病者で卑怯者だといふのなら、僕はよろこんで臆病者になり卑怯者になりませう。……もう時が経過しました。お互ひの立場もちがひ、守るべき意志も感情も變つて來なければならぬ今日なのです。あの頃のことは、まさか掃き溜にも棄てられないから、どこか遠いお伽噺の國へでもやつてしまひませう。そのほうがあなたも僕も、可愛らしくつていゝといふものですよ。はゝゝゝ。」
靖也は笑つた——乾びたやうな笑ひを笑つた。

「えゝ、それはさう……確に時が経過たのです。然しわたしは、何も靖也さんに濟まないといつてゐるのではない。あの頃の靖也さんの愛に感謝して、自分を悔いもし哀れにも思つてゐるのですわ。」

「それは、難有う。」

「難有う？ ……では、靖也さんはわたしの今の心持を、よろこんでくださるのね？」

「……」

「わたし嬉しいわ。」

「……」

「嬉しいわ！」

「……」

「わたし、ほんたうに……ほんたうに……嬉しい……のよ！」

靖也は驚いた。——龍子はガバと食卓にうつぶして、顔に手巾をあてながら、發作的にはげしく泣き出したのであつた。

「……どうしたのです？ 龍子さん。」

「え……なに、なんでもないので。」と、龍子はまだ食卓から顔をあげようともせず、「ごめんなさい。わたしこの頃、すぐこんなに興奮してしまふの……え、何でもないので……笑はないでください……」二三分の間、或る形のつかない沈黙がそこにあつた。閉めきつた硝子窓に、パラ／＼とあたる音がした。靖也は立ちあがつてそれを見た。もうすつかり暮れてしまつた冬の宵闇に、街の灯が南京玉をつぶつたかのごとく、赤く青く黄色にうるんで見えた。——小雨が降り出したのであつた。

靖也はまた椅子に腰をおろした。

龍子は食卓から顔をあげようともしなかつた。美しく波うたせた髪を越して、白鳥のやうな細い頂頸が、微かに震へてゐた。

突然、靖也は、弾かれたやうに身を退けた。彼の靴の上に、龍子のやはらかなフェルトの草履が、ソツと忍び寄つてのりかゝらうとしてゐたのであつた。

「雨が降り出したやうです。もうそろ／＼お別れしやうじやありませんか。あなたもお家へ早くおりなさらないと……」

と、靖也は、なに氣ない口調でいつた。

龍子はまだ食卓にうつぶしてゐた。

どこか遠くからハーモニカが聞えこゐる。

「ほんとうに遅くならないうちに、今日はこれでお別れしやうじやありませんか。」

「……どうぞ……もうすこしこうしてゐてください。わたし、頭が痛んでならないから……」

「ペパーミントのやうな、強い酒を飲んだからでせう。あんなものをグイ／＼飲んぢや毒ですよ。」

「え、難有う……だが今日は飲みたかつたから。」

「いつも飲むんですか。僕は龍子さんがお酒を飲むとは知らなかつた。」

「飲めないんですけど、この頃は時々ムシヤクムシヤクするから、無理に飲んでやるの。悪い？」

「飲めないのを無理に飲むのは、よくないにきまつてゐます。」

「そうね。靖也さんの忠告なら、わたしこれからこんな眞似はやめます。」

「僕の忠告がなくなつても、おやめなさるがいゝでせう。」

「いゝえ、わたしは靖也さんを、一番親しい、一番大事なお友達にしてゐるのだから……そして、いつまでもわたしの、よい忠告者、よい相談相手になつて貰ふにきめてゐるんだから、靖也さんの言葉なら、どんなことでもよろこんで服従します。いゝでせう？ わたしの忠告者になつてくれるでせう？ わたしの相談相手になつてくれるでせう？」

「龍子さん。ほんとうにおそくならないうちに、お別れしようじやありませんか。雨も降つて來たやうだから……」

龍子は黙つて、まだ食卓から顔をあげようともせず、指先で額のあたりを揉んでゐた。

「……どうです。頭が痛むなら、自動車を呼んですぐこれから……」

龍子はスツと身體を起した。眼がひどく充血して、幾分か蒼味をもつた顔には、人魚のやうな妖しい美しさがあつた。

「……靖也さん。」

「……？」

「御心配には及びません。そんなにお別れをお急ぎなさりたいなら、御勝手にお一人でどうぞ……」
龍子は恨めしげに、ことさらに叮嚀にうなづいた。

「そうですか、では。」

靖也は知らぬ風に立ちあがらうとした。

「靖也さん。」

「え、なんです。」

「わたしはさつきあなたに、ハッキリ答へてくださいといひましたねえ。」

「……えゝ」

「わたしはまだそのお答へを貰つてゐませんのよ。」

「……？」

「そのお答へをなすつてからお歸りなさい。」

「答へ？——まだあなたは、僕にハッキリと答へさすやうなことを、言はないじやありませんか。」

「だから、そのわたしの言葉だけを聞いてからお歸りなさいといふのよ。」

「それはなんです。」

靖也は立つたまゝでいつた。

「……あの時代の靖也さんは、眞實の愛をもつてわたしを愛してゐらしたのねえ？」

「……」

「そうですねえ？」

「……」

「どうぞ、ハツキリ答へてください。」

「……愛してました。」

「で、今では？」

「それはもう問題ではありません。そんなことを今更僕の口から……」

「いゝえ、それもハツキリ答へて貰ひたいの。」

「じゃ、ハツキリお答へします。——僕はあなたを愛してはいません。もう愛することができなくなつてゐます。」

「それはわたしが人妻だからですか。」

「人妻……」靖也はげしい侮辱を感じて憤然と「そんな言葉をこゝで聞かされる必要もない。愛してゐないから愛してゐないといふだけです。ハツキリお答へします。」

「そう。龍子はキツと靖也を見あげた。「では、わたしもハツキリいひいます。わたしはあなたを愛してゐます。今でも……いや、これからさき、わたしの一生涯、あなたがどんな心持でゐようと、わたしはあなたを愛してゐます。」

——化石したやうに、靖也は立つた。

彼の手は恥ぢと怒りにワナ／＼震へた。

「龍子さん。僕はあなたといふ女に、いま、敢へて、汚女といふ罵りの言葉を投げつけてあげる。なんといふ恐ろしい、なんといふ醜い女だ！」

「その醜い女の唇を、あなたは一度無理無體にどうしましたか？」

「えつ……」

「わたしの鏡よりほかには知らないこの唇に、最初に觸れた人は誰でしたか？」

「……」

「わたしが汚女なら、靖也さんはどこまでも卑怯者です。……靖也さん。あなたは一度無理にこの唇に觸れました。さうして置いて、今、わたしを愛してゐない、愛することはできないといひました。」龍子の妖しい眼光は、烙きつくやうに靖也を射た。「あなたはわたしを罵りわたしを憎んでも、この唇に觸れたといふ事實を否定することはできません。あの英吉利にゐた時代……裏庭でわたしが冬薔薇を剪つてゐたのを、あなたは亭のうしろから聲をかけてわたしを呼んで……あなたはあの二月の夕暮のことを忘れてはゐますまい。」

「……」

「靖也さん。あなたはわたしを愛することができなくつても、わたしのこの唇から逃れることはできませんよ。」

「わたしがあなたを臆病者、卑怯者といふ名で呼ぼうとしてゐるのは、このことなんです。わたしを汚女と罵つてゐるあなたのその唇は幾ら拭いても拭きとれぬ、汚女の息の臭味が滲つてゐる筈です。そして……そしてわたしの唇には、いつまでも嬉しいあなたの愛が燃え残つてゐるのです。」

龍子は痙攣的に微笑した。

後頭部へはげしい一撃を加へられたやうに、靖也はよろめいた。彼は椅子に身をさへながら、セイク喘いだ。

「さあ、この邊で今日はお別れしませう。」

龍子は落つて呼鈴を押した。女給がドアを開けた。

「お會計をね。それから自動車を二臺呼んでください。」

「はう。」

龍子は静かに立つて、窓のそばへ來た。

「そとは寒いらしいのね。今夜は雪になるかも知れない。靖也さん、風邪をひかないやうに歸つてくださいね。」

「……」

「さあ……外套よ。」

靖也のうしろから、龍子は彼の外套を着せかけた。

「いや、僕が……」

「まあ、わたしが着せてあげるからヂツとおとなしくしてゐるのよ。……ほゝゝゝ。」

そして龍子は、壁にかけてある、自分のアーミン皮の頸巻と暖手套をとつた。

「お車がまわりました。」

女給がドアから聲をかけた。

「さう、難有う。」龍子は會計をすまして、紙幣を一枚女給につかませながら、「靖也さん、さあ、出かけませう。」

靖也は機械的にうなづいた。

階下において、女給に送られながらそとに出ると、風がサツと吹きつけた。

「おゝ、寒う。」

龍子は肩をすくめた。

二臺の自動車が、機關の音をたてゝゐた。

「運轉手さん。そちらは本郷の西片町よ、わたしのはうは青山高樹町……龍子は一方の運轉手に、また手ばやく紙幣を渡しながら、「いゝのね……氣をつけてね……」

「は。」

「……靖也さん。さあ、お乗んなさい。」

靖也は黙つて頭をさげた。

「では、左様なら。ちかいうち、お伺ひしてよ。阿母あさまによろしくね。」

龍子の聲は、誇りかに、晴々してゐた。

「左様なら！」

「……左様なら……」

二つの自動車は、別々の方向に、煌々たるヘッド・ライトをグルリとむきかへた。

雨脚が、やゝ強くなつた。

戀せぬ人

……靖也はボンヤリ天井の一角を見つめてゐた。頭は鉛を流しこまれたやうに、重く凝結つて、本

をのぞいても、製圖をひろげても、たゞ活字や直線や曲線が、無意味に押し合ひ、つながり合つてゐるだけだつた。さつきから彼は鉛筆をにぎつて、船の浸水面積を求むべく、横斷曲面の計算をしてゐるのであつたが、簡単に解決さるべき積分の計數が、二度やりなほしても三度やりなほしても、うまく出て來なかつた。

「これぢや、高等學校からやりなほしだ！」

彼は苦笑して鉛筆を投げ出したのであつた。

——椅子に深くもたれて、グツと眼をつぶる——

網膜の裡に、唐草模様のやうな青や赤やの斑點が、眩めくやうに渦をなして舞ひ立ち舞ひ狂ふ。それが次第に渦の中心へ吸ひ込まれるやうに、重なり合つてしまふと、忽然として一つの妙な花瓣に似た形となる——花瓣ははじめのうちは、青と赤とに染められた不調和な色に震へてゐたが、やがて青い部分が次第に褪せて、赤が鮮かに濃くなりはじめると、いよゝ形がさだまつて、斜めにゆがみかけるやうに蠢めくもの……血をすゝつたやうに眞赤な唇……！

靖也はギョツとしたやうに眼を開いた。

——眞赤な唇——

靖也は眼を開いても、まだそこに蠢めいてゐる悪夢のやうな幻影を、たまたまなくなつて兩手を振つ

て拂ひのけようとした。

「……この唇に最初に觸れた人は誰でせう？」

彼の耳もとで、咽喉を鳴らすやうな皮肉な笑ひ聲がした。

苦い毒を、あやまつて嘗た人間のやうに、彼は夢中に窓のところへ飛び出して、庭へ唾を吐いた。

「……ほゝ、駄目、駄目……そんなことしても、この唇から逃れることはできないわ……」

耳の奥へ、澱りつくやうな聲――

「えゝ……っ！」

彼は自棄的にまた、空唾をペツ／＼と吐いた。

「まあ、旦那さま、どうなされました？」

驚いたやうな別の聲に、靖也は我にかへつた。窓のそとに怪訝な顔をして、お加代が立つてゐるの

であつた。

「あ、お加代か。」

「どうなされましたのでございますね？」

「なに、その……急に胸がムカ／＼して來たので……」

「お胸が……？ それでは、召しあがつたものでも、お悪かつたのではございませうかね？ わた

くし、旦那さまのおあがりなさるものは、一生懸命に氣をつけてございませうが……」

お加代は、もう心配さうにオロ／＼していつた。

「いや、お前が悪いのぢやない。僕は昨夜からすこし頭が重くて氣分がよくないのだ。それに近頃運

動不足のせひもあるし、そんなことで胃の消化力も缺乏してゐるやうだからな。……はゝゝ、なん

もないのだよ。」

「ほんたうに旦那さまは、毎日氣い詰めて勉強なさるから、あれではやうないと、お父つあんも、え

らく心配してをりますよ。わたくし、なんかお仕事の手傳ひができるなら、どんなことでもいたした

うございませうがね。……字一つ讀めんのだから……こんな馬鹿だから……」

お加代は顔を赤くしてうつむいた。

「はゝゝゝ。お加代、字は讀めなくつても、そんなことは恥ぢやないよ。世の中には字のよく讀め

る奴にかぎつて、恐ろしい恥つさらしの人間が澤山ある。お前は、ほんたうに淨い無垢な女だ。それ

が字でも讀めるやうになつて御覽、いろんな碌でもない智慧がついたり、物を理窟で見たがつたりし

て來て、それこそほんたうの恥をかかねばならんことができて來るものだ。……世間で恥をかいたこ

とのないやうな顔をしてゐる奴は、大抵は恥を恥だと思つてゐないから、恥をかいても知らん顔です

ましてゐられるのだ。」

「……それでも、わたくし、あんまりなんにも知らんから……」

「なんにも知らんはうがいよ。人間が生きてゆく上に、ほんたうに知つていゝことは食ふことゝ眠ることだけかも知れない。そのほかに知つていゝことは、まづあまりないな。」

靖也は微笑した。

「でも、旦那さまは、學問でもなんでも、澤山知つておいでなさる……」

「僕は知つてゐるだけのことを、みんな忘れたいと思ふよ。さうすればどんなに樂でいゝだらう。ついで今も知つてゐることを忘れたいと思つて……」

——眞赤な唇——

靖也はまたベツと空唾を吐いた。

お加代はなにも氣がつかなくかつた——

「旦那さま。食ふことゝ寝ることだけ知つてゐたら、人間は牛になるがな……」
そしていかにもをかしげに笑ふのであつた。

「つまらんことを知つてゐるために、つまらんことを考へて、それでつまらんことを苦しがつて生きてゐる人間よりは、一番大事な食ふと寝るだけ知つてゐる牛のほうがましらしいぜ。西洋で、或る男が牛になりたい——と思つたが、どうしても牛にはなれないので、せめて牛の心を自分のものにしよ

うと考へて、一生涯牛ばかり描いて暮した畫家があつたさうだよ。僕もなんとかして牛になりたいよ。牛になれたら、さぞ暢氣でいいことだらう。お加代はどうだね。牛になりたいかかね？」

「牛？……嫌、あんなものにはなりたくない……」

その生眞面目な顔が、靖也にはまたいかに面白かつた。いつの間にか、不快な感情や記憶が、拭はれたやうに消えてしまつた。庭木の間に揺れる、午過ぎばかりの透明な日光も、八つ手の葉が、小さな簇りの白い花を、蔽うたり現はしたり、さわやかにそよぐのも、彼の心をすが／＼させた。

「いゝな……お加代は！ お加代と話をしていると、僕は胸の中に吸ひ込む毎日の汚い埃を、すつかり吐き出してしまふやうな氣持になるよ。お前は僕の書齋といつしよに、僕の心持まで掃除をしてくれる、有難う。お禮をいふよ……これだからお加代は好きだ。」

「まあ旦那さま、そんなこといつてからかつて……」

「なにがお加代をからかふものか。ほんたうに僕はお加代が好きなのだ。」

「また……あゝいつてからかつて……」

「お加代は耳まで眞赤にした。」

「好きだといふことが、からかふことなのかね？ 妙だな。」

「好きでもないものを好きだといふから……」

「正直なお前に、そんな口先ばかりの不正直なことがいへるものか。お前もこの頃すこしは人の言葉を疑ふやうになつて来たね。べつに出あるきするのでもないに、都會の不純な空気を吸ふと、お前のやうな無垢な女でも、そんな言葉をつかふやうになるんだね。」

「ごめんなさい。わし、悪うございました。」

お加代はもう涙ぐんだ。

「いや、なにもお前を叱つたのぢやないよ。たゞ、かうして淨い姿をもつたお前が、この家にゐただけで、もういつの間にか卒直な質撲な天真を、すこしでも傷けられてゐることを恐ろしく思ふのだよ。」

「わし、決して旦那さまのお言葉を疑うたのぢやないんで……」

「わかつた。もうそれでいいのだよ。」

「……はい。」

「どうだね。あの、びりかめのこの唄をうたつて聞かせないか。」

「まあ……まだよくおぼえて……あんな唄……」

「あの唄は、なか／＼いゝ唄だよ。雪國のひろい空や、大きな山が、あの唄を聞くと、まだ見たこともない僕の眼にも神々しく浮かんで来る。……どうだ。お山へ歸りたくはないかね？」

お加代は子供のやうにかぶりを振つて眩しさうに晴也を見た。

「わし、いつまでもお父つあんところに入れてもらふて、旦那さまのお部屋をお掃除します。」

「さうかね、そして時々は、ついでにこゝのお掃除もたのむよ。」晴也は胸を撫でる真似をして「どうも昨夜から、よつほどこゝに汚い埃がたまつてゐたらしいが、あゝ、これでやつとせい／＼した。はゝゝゝゝ」

「……お加代、お加代！」

裏の納屋のはうで、良助の呼ぶ聲がした軽くものを碎く音――

「なんだね？」

「お風呂のコークスを割つてゐるのでございます。」

「さうか。」

「……お加代や！」

また良助の聲。

「あゝい！」

お加代は頭をさげて、小走りに庭の木戸から去つた。

晴也はいつまでも書齋の窓にもたれてゐた。

X

X

大きな硝子函入りの京人形と、一尺もあろうといふ寒椿をさした象嵌高彫の銀製の花瓶が、いちじ
るしく眼に立つ、和洋折衷の私室。そのあかるい窓際に、龍子は今日も、ひどくデレたやうに椅子に
よつて、ちやうど右手に届くところに置いてある廻轉書架を、グンと強く押した。

「……で、奥様が多趣味でゐらつしやることは、よく承知してゐるのでございますが、そのうちで
も、なにが一番のお得手でゐらつしやいませんか？」

彼女と向きあつて腰をかけた、洋服の雑誌記者らしい男は、猪首を妙にひねりながら、勝手にうな
づいて、合圖のやうに、そばの寫真班らしい男の顔を見た。

「趣味なんか、わたしには一つもありませんよ。」

龍子はツツケもなくまた書架をグンと廻した。

「はつはつは！ これは飛んだ御謙遜で……」

「謙遜どころか、わたしはなんでも出しや張り者で有名なんですから、お得意でもあれば、あなたが
お訊きになるのを待たないで、大自慢でこんな感心なえらい趣味があるんですよと吹聴するんです
がねえ。」

「奥様は、音楽、演劇、美術など、藝術趣味が非常に豊富でゐらつしやると評判でございますが。」

「そんなものは、わたしの不得意中の不得意ですよ。ほゝゝゝゝ。」

「おゝ、さうだ。奥様は英國にゐらつしやる頃から、スポーツではなか／＼鳴らしておゐでだつたと
聞きました。……ことに乗馬とテニスは……」

「乗馬？ ……さう、一度興行物で、メリイ・ゴウ・ラウンドの木馬には乗つたことがありますよ。廿
歳前のお轉婆さんだつた頃にねえ。……テニスもよくいふ、ラケット踊らるゝのところならやれる
でせう。ほゝゝゝ。」

「なか／＼皮肉でゐらつしやいますね？ 英國で御勉強なすつたゞけに、ドグラス・ジエロルド流、

バナアド・シヨウ流でございますな。はゝゝゝゝ。」

「そんなことをいふ、あなたのはうが皮肉よ。」

「……いや、飛んだ邪魔をいたしました。それではお寫真を一枚撮らせて頂きますせう。三月號は名
流婦人の趣味と理想といふのでございます。この巻頭へひとつ奥様のお姿を掲げたいので。」

「わたしなんかの寫真を入れると、雑誌が賣れなくなつてしまひますよ。」

「どういたしましたして、奥様は目下の流行界社交界には重きをなしてゐらつしやるので、誰も美しい
お姿にあこがれてゐるのでございます。」

「うまいことをいふのね。……しかし寫真なら、こゝの主人の妹を撮つてやつてくださいいな。菊江

さんといつて、快活な現代娘なんです。今の雑誌にはお誂へ向きですよ。それにお嫁入り前だから、是非宣傳の必要があるのです。」

「はあ……いや、しかし、それはまたその次の號へでも頂戴いたすことにしまして、今日は是非奥様のお寫眞をひとつ……」

「困つたな。このとほり不斷着で、着物を着かへるといつても、實はすこし風邪をひいたのか、かうしてゐてもゾク／＼する位なのですから。」

「いえ、そのお姿で結構でございます。御趣味のゆたかな、御家庭生活を出しますはうが、讀者にも歓迎されるのでございまして……どこかのお縁先に佇んで、庭を眺めてゐらつしやるといふやうなところが面白うございます。」

「なか／＼ゆるして頂けませんのねえ……ちや、菊江さんといつしよに撮つてください。いま呼びますから。」

龍子は委細かまはず柱の呼鈴を押した。

「お姉さま。なあに？」

女中の代りに、當の問題の菊江が入つて來た。

「おや、菊江さん。おきよを呼ばうとしたのに。」

「おきよは、ちよつとわたしの用事をしてゐるのよ。だからわたしが代りに來てあげたの。なんの御用？」

「ちやうどいゝところよ。いまあなたを呼びにあげようとしてゐたのよ。」龍子は記者に向つて「これが菊江さん。どうぞよろしく。……この方ね、婦人雑誌の方なの。あなたの現代味たつぷりなスタイルを撮りたいと仰有やるの。わたしがワキ役でいつしよにうつるといふわけなのよ。」

「まあ、さう。」

菊江は満足げに記者のはうを見た。

——煙にまかれたやうな顔をして、記者は寫眞を二三枚撮ると、挨拶もソコ／＼歸つて行つた。

「お姉さま、何月號の雑誌に出るの？」

「三月號だつて。」

「あら、三月號？……すねぶん早いこと準備するのねえ。十二月から三月號を騒ぐなんて。」

「でも、もう新年號はどの雑誌でも、とつくに出てゐるし、二月號は一月十日頃には出るのだから、今がちやうど三月の編輯にかゝつてゐる時なのよ。」

「さういへばさうね。……するとあの寫眞の掲る雑誌は、二月半ばまでには出るわけだから……」
菊江はちよつと考へた。

「なんなの？ 菊江さん。誰かにその雑誌送つてあげるつもりなの？」

「え、二人ばかり、仲のよかつた級友に……」

「級友に送つたつてつまらないぢやないの？ それよりも菊江さんに、いゝ良人を世話してくれるやうな人に……いや、菊江さんが良人にしてもいゝと思つてゐる人に送つてあげたはうが、有效といふわけぢやないの？」

龍子は笑つた。

「あら、お姉さま。わたし、まだ良人にしていゝ人なんて、思つたことありはしないわ。」

「それはいけない。もう菊江さん位になりや、自分の理想の人——自分の一生をたしかに信頼していゝ人位、ちやんと心掛けて、見當をつけて置くものよ。その用意をして置かないで、たゞ他の人からの縁談を待つて、この人ならいゝ位のところで結婚すると、きつと悔いても及ばぬ失敗をするものよ。」

「だつて、いまのところ、そんな見當の人はないんだもの……」

菊江はちよつと悄氣たやうに、組んだ足先をブラ／＼させた。

「心細いのね。龍子はまた笑つて」では、菊江さんは戀愛なしに結婚するつもり？」

「……だつて、戀愛は探し物ぢやないんですもの。」

「そりやあ、探し物ではないわ。しかし拾ひ物といふ場合はあるから、これから大に注意するのねえ。神様が折角菊江さんに、特別上等の良縁を投げてくださったすつても、菊江さんがウツカリしてゐては、まるで氣がつかないで、その大事な尊い思召しを、靴で踏みつけて通つてしまふことになるわ。もつたないわ。注意が肝要よ。」

「……さう……ね。」

「さう／＼、明日の晩はクリスマス・イヴニングで、日比野の阿父さまのこへゆくことになつてゐるでせう？ ……きつと四五人は、阿父さまに親しく教へをうけてゐる人たちが来るにちがひない。みんな學士か大學生にきまつてゐるから、そこでもたゞウカ／＼と會話しないで、誰か神様の思召しにあたる人がゐはしまいか、大いに注意しなければいけないわ。御自分のお祭だけに、神様は、明日の晩は特別念入りに人間の幸福のことを考へてくださるでせうから。」

「……だつて……」

菊江はいつもに似ず、しほらしく含羞んだ。龍子は面白さうに、そゝりたてるやうな眼をして、

「なにが、だつてなの？」

「……だつて、をかしいわ。變だわ。」

「菊江さんは氣の毒ね。その若い年齢をして、夢想家にさへなれないのだもの。」

「ちや、お姉さまは、わたしの時代にはどうだつたの？」

「わたし？ ……わたしは……さあ、どういつたらいゝだらう。困つたわねえ。」

龍子は天井の隅のはうに眼をやつて、苦笑した。

「それ御覽なさい。お姉さまだつて、駄目な人だつたのでせう？」

「さう……駄目……駄目な人だつたのね……たしかに……ほゝ、ほゝ、ほゝ、ほゝ！」

こんどは菊江のはうが、威張り出した。

「ぢや、お姉さまは、わたしを攻撃する資格はないわ。」

「たしかに、資格はなささうね。」

「ブラヴォー！ わたしが勝つた！」

「はい、負けました。」

龍子はあつさり片づけた。

「……お姉さま。」

「はゞ。」

「怒つたの？」

「いゝえ。」

「……だつて、怒つてゐるやうだわ。」

「さう？ 怒つてゐるか知ら？」

龍子は空つとほけたやうに、また廻轉書をクルクル廻した。

「あら、わたしのいつたことが氣に觸つたらごめんなさい。」

「さうね。どこが氣に觸つたか、考へて見ませう。それから無茶苦茶に怒り出すことにしませう。」

「あら、そんなにまでして怒つて貰はなくつてもいゝわ。ぢや、怒つてはゐないのね。安心したわ。」

……ほんのちよつとだつたが、お姉さまの眼が、なんだか怖いやうに光つたのよ。驚いたわ。」

「さう？ そんなに怖い眼をして？ わたしがそんな眼をするか知ら？」

「えゝ、そりやあ妙に光る眼よ。菊江はやつと椅子に腰をおろして、「お姉さまは、時々そんな眼をす

るのねえ。この頃はすゑぶんよく見るわ。ほんのちよつと、チラと光るだけなんだけど、妙に怖い感

じを受けるわ。」

「さう？ 變ね。」

「變よ。お姉さま、どこか身體の工合がよくないんぢないか知ら？」

「さうね……さうかも知れないのね。この頃は、よくひとりで癩癩が起きるから。」

「癩癩？ そりやいけないのねえ。醫者に診て貰つたらどう？ ヒステリイなんかになつちや大變

よ。」

應接間の中央に飾られたクリスマス・ツリーの、枝から枝へ懸をろされた金や銀や赤や青やの色糸と硝子細工の星球とは、四方にともされた天井の燈火をいつばいに反映して、電気仕掛の噴水のやうに美しく揺れ輝いてゐた。

「ほんたうに綺麗なものですね、この樹が一つ飾られてあると、晴れやかな神々しい氣持がいたします。」

アンナ夫人とならんで長椅子に腰を下した小宮は、巾手でしきりに額の脂をふきながらいつた。

「日本のかどまつも敬虔です。」

アンナ夫人はちよつと立つて、クリスマス・ツリーの枝ぶりを直した。

「アンナ、クリスマス・ツリーは、門松にあたるものではなくて、むしろ七夕笹にあたるものだと思います。」

と、日比野博士は少し隔つた椅子に凭つて、いつものとほりに葉巻を喫しながら、上々氣嫌に笑つた。

「お、たなばたさまの竹の飾り……あれは、わたし大好きです。あの五つの色のねがひの糸や、色紙をいろ／＼にきつて、歌を書いてつるす習慣も、たいへんやさしくきれいです。」

「……いつたい、クリスマス・ツリーといふものは埃及から起つたもので、耶蘇紀元以前からおこなはれたのだ。だから元來クリスマスのためのものぢやあない。棕櫚樹は年中葉が茂り、十二の嫩枝をだすといふので、昔の埃及では一年を完了したしるしに、冬至の日に飾つて祝つたのだ。」

「は、あ、さうでございますかね。それはすこしも知りませんでした。この飾り樹はよほど近代的なものだと思つてゐました。」

「いや、こんなに金や銀の糸をかけたりますのは、中世以後のことだらう……しかし七夕笹の情味のあるのにひきかへて、クリスマス・ツリーは、どこやら智的に見えるものだね。」

「先生、僕はいつもこんな祭りの晩に考へることは、天真爛漫の子供心に返へることのできない淋しさです。實際今この樹を見ながらも、やあ綺麗だ／＼といつて周囲を飛びめぐる自分でありたい、と思ふのでございますよ。」

「そりやあ君、心の持ちかたひとつだ。僕などは今夜はすつかり子供になつたつもりである。今日もこのマリスマス・ツリーをアンナとテルコと僕の三人で飾つたのだが、その間、三人で讚美歌やら童謡やらたてつゞけの合唱さ。僕もアンナも、テルコとまつたく同じ心持ちで楽しくうれしがつて働いた。」

「それはをかしいのですよ。」と、アンナ夫人が笑つて「讚美歌も童謡もはじめの一章だけは、どうに

かおぼえてゐるのですが、それからさきになると、たゞラ、と節だけあはせてゐるのです。その節もまるでちがつてゐるのを平氣で……」

「おい／＼僕の歌を、そんなに攻撃すると、今夜は合唱してやらないぞ。僕の低音がないと日比野合唱團は、まるで聞き手なしだぜ。は／＼／＼／＼」

三人は聲をあはせて笑つた。

テルコが飛び込んで来た。

「龍子姉さまと菊江姉さまよ！」

「さう」

と、アンナ夫人が立ちあがらうとすると、今宵を晴れと着飾つた和服の龍子と洋装の菊江が肩を並べて華やかに入つて来た。

「Merry Christmas——」

龍子は駆けよるやうにナンナ夫人の手をとつた。

「Merry Christmas——」

アンナ夫人は挨拶した。

「阿父様、今晚はありがとうございました。……おや小宮さんも。」と、龍子はチラと菊江を見て、「……」

「小宮さんがまつさきに出席なさることはこのクリスマス・イヴニングの吉例なのですが、やつぱり今年もさうでしたのねえ。昨日も菊江さんにその話をしてゐたのですよ。」

「いや、僕の先頭の吉例は、これから毎年ずつと続けるつもりですよ。」と、小宮は心安げにうなづいて、「これも三度五度と續けてゐるうちには、飛んだいゝ縁起を祝ふことになるかも知れませんかね。」

……先生。妙なものでございますな。おなじ工科といつても造船とか、採鑛とかをやるものは、やつぱり工夫と同じ迷信家になつて縁起をかつぎたがるやうになります。僕などもこの頃はよほど御幣かつぎになつてしまひました。」

「ですから小宮さんにも、きつといゝ縁起が来るのかも知れないわねえ、菊江さん。」

龍子はひとりで、わかつたやうな顔をして笑つた。

「え、……」

菊江は面喰つて、あとが出せなかつた。

博士は始終氣嫌よく葉巻の煙をたてゝゐたが、

「もう六時半だね、七時の開會にしては、ひどく集りがおそいやうだが、龍子、棟吉さんとは一緒ぢやなかつたのか？」

「棟吉は、わたしがでかけようとする時、浴室でバチャ／＼やつてゐたやうですが、もう、間もな

く、こゝへ来るでせう。あの人はお化粧屋だもんだから、お風呂は人一倍ながいのですよ。それに浴槽の中で、まるで職工かなんぞのやうに、碌でもない唄をうたふといふ、暢氣さ加減ですもの。待つてゐると馬鹿々々しくもなり、腹も立つのです。だからわたしと菊江さんとで、サツサとでかけて来たのでございます。」

「それにお兄さまつたら、おしまひには浴室もわれるやうな大聲をあげて、體操の眞似なんかはじめるんですもの。湯は飛ぶし、まるで大變だわ。裏庭をこしてお隣家のお座敷の方へまるで筒抜けなんだもの。みつともないわ。」

菊江も口を尖らせた。

「どうもえらい攻撃ですな。これちや隈部さんはお湯からあがると、お風邪をおひきなさるかも知れない。」

小宮はジロリと狡い眼を龍子にくれた。

龍子は知らぬ顔で、

「小宮さんもお氣をおつけなさいよ。菊江さんは人のゐないところではなか／＼の論難家だから。」

「あら、お姉さま。わたしそんな人悪ぢやあないわ。攻撃したのはお姉さまがはじめなのよ。わたしはお姉さまが眞買だから、たゞ聲援してあげたゞけのことなのよ。」

菊江はあわてゝ、恨めしげにいつた。「聲援」がをかしかったのでみんな笑つた。それで部屋の空氣はすつかり騒々しく面白くなつた。

氣輕るに背廣服を着た若い學士らしいのや、眞面目にモーニングの胸の張つて隆と氣取つた少壯事業家らしいのや、Tと襟章をつけた制服姿の大學生やらが、七八人も押しかけて来た頃は、この應接間の燈火はいよ／＼あかるく輝き、談笑の聲はいよ／＼華やかに弾んで来た。

龍子は菊江を傍からはなさなかつた。小宮がなにか隙をうかがつて、ちよつて龍子に言葉をかけようとする、彼女はすぐ菊江を楯に、軽く身をかはしてほかのはうへ顔を向けた。で、小宮は、龍子と話をしようと焦せれば焦るほど、心にもなく菊江と話をしなければならなかつた。菊江は小宮と話すことを喜んでゐるらしかつた。彼女はもう小宮に、いつぱし馴れ／＼しい言葉使ひをして、しまひには人眼もかまはず、小宮の手の甲を軽く打つたり、ネクタイをなほしてやつたりした。龍子の技巧や、小宮の魂膽を知らない彼女は、かうして小宮との會話の機會を與へようとしてくれる龍子を親切とも難有いとも感謝したのであつた。

「朝倉様がお見えになりました。」

書生の木内が、博士の前でちよつと頭をさげた。

「おゝ、さうか。お待ちして居つた。どうぞ、すぐこちらへ御案内申してくれ。」

「はゞ。」

「まあ、朝倉の叔父さまもおいでになりますの？　では、叔母さま、美知子さまも御一緒でせうね？」
龍子は父にいつた。

「朝倉の叔父さまといふのは、あの朝倉子爵さまなの？」
菊江はソツと訊いた。「あのお兄さまとお姉さまの結婚式の時、親戚を代表して御挨拶なすつた方でせう？」

「え、さうなのよ。だが、菊江さんには美知子さんはじめてでせう？　御覧なさい。そりやあ素敵な美人だから。」

——玄關から通するドアが開いた。

「お、朝倉さん。よくお出でくださつた。」

博士は、待ちもつけたやうに椅子から立つた。

「あ、日比野さん。お招きにあづかつたので、今夜はみんなで押しかけて來ましたよ。」

半白ながら立派に跳ねた髭と、日黴んだ額から頬、脊はさまで高くはないが、肩つきのいかめしい貴族の品格と、軍人の剛直さをハッキリ見せた五十をすこし出たばかりの人物である。

そのうしろに靜かに従つたのは、壽子夫人と令嬢の美知子と令息の重樹。——壽子夫人は、日比野博士の令妹にあたる女性で、溫情と智性にみちた眼がまづ誰にも敬意を拂はせるに充分。美知子は輪

廓から眼鼻立が、むしろあまりに整ひすぎでゐるので、その美しさに或る靜肅さを與へて、魅力とか嬌羞とか形容すべきものを、堅く藏してゐる。が、龍子や菊江の輝くばかりのもの、動くばかりのものとはちがつて、そこには端正な意志の相がほのめいてゐた。

博士はすぐみんなに、朝倉子爵を紹介した。——朝倉重憲といつては、しかし、子爵としてよりも休職海軍少將としてよりも、近頃貴族院の××會に明敏豪快な態度をもつた政治家として、民族主義を根本に置いて、太平洋問題を解決せんとし、無意味に理論化されてゐるデモクラシーや自由主義の夢を、狂愚の人のごとく追うてゐる人々が多い間は、この問題は遂に戦争によらずしては如何ともすべからざることを喝破して、新聞記事を賑はしたことによつて、みんなから知られてゐるのであつた。
龍子は菊江を美知子に紹介した。そこへアンナ夫人と壽子夫人とが加はつて、女は女同士に椅子が近づけられ、博士と子爵は、しばらく振りの快談が續き、テルコと重樹とは子供らしい喜びで、クリスマス・ツリイを廻つて追つ駆け競がはじまり、一方には小宮を中心とした學士や學生連の談笑——一堂はすつかり賑やかになつてしまつた。

やゝ、おかれて棟吉がやつて來た。彼は女の仲間へ加はらうとしたが、忽ち龍子に追んのけられてしまつた。博士と子爵の間に割り込むことは、どうやら苦手らしく、彼はしかたなく小宮の傍らに椅子を占め、例の事業家振り活動家振りを發揮して、やうやく氣焔があがつて來た。

三人の女中によつて、カクテールの杯がが來賓の手にくばられた。琥珀色の漣に沈んだ紅玉のやうな櫻んぼの實が、人々の唇に軽く吸ひ寄せられた。暖爐にあたゝめられた空氣の中を舞ひ立つ煙草の煙は、紗の暈をつくつて、燈火のまはりを罩めてゐた。

「幸福なるクリスマス！」

「プロオジツト！」

棟吉が音頭をとつて、學士學生の一團は、みんな杯を高くカチリと觸れあはせた。

「どうだい。ひとつみんなで讚美歌をうたはうぢやないか！」

「賛成！」

「なにをうたはうかね？」

「むつかしいのはいけない。みんなが知つてゐるのがいい。」

棟吉は、ひとりではしやぎ出した。

「——諸人こそりて、迎へまつれ——つてのがいい。あれなら誰も知つてゐる筈だ。ひとつ菊江さんピアノを弾てくれないか。」

「嫌だわ。わたし。」

菊江は龍子に眼をあはして、知らぬ顔をした。

「菊江さん、やつておくれ。」

棟吉は、椅子から半身乗り出すやうに振りかへつた。

「嫌だわ。わたし。ピアノなんか駄目なんですもの。」

「駄目？ お前はピアノは自慢なんぢやないか？」

「わたし、いつピアノを自慢して？」

「どうも困るね。すぐあゝむくれて來るんだ。ひとつお願いひだ。このグループで、お座つきにやらうつていふのだよ。」

「お座つき？」

「いや。その、祝意を表するためさ……」棟吉は、ウツカリ口を滑らせてしまったので、大いに周章て「ねえ、菊江さん。頼むよ。ねえ。諸君が一緒にうたひたいといつてゐるんだ……」

「嫌！」

「まあ、そんなに怒らないで……」

アンナ夫人が、場馴れたやうに立つた。

「では、菊江さんにはのちほど、なにかよい曲をひいてもらつて、それはわたしがひきませう。」
學生連は拍手した。

その時、ドアが開いた。そこに静かな靖也の顔が見えた。

「や、君塚君！」小宮は手をあげた。「みんな連中はこゝにゐるよ。さあ、こつちへ來たまへ。」

——と、龍子は椅子から立つて、すぐ駆け寄つた。

「靖也さん、随分待つてゐたわ。でも、割合に早くいらしたのねえ。」

しかし、靖也は龍子に目禮しただけで、第一に恩師のはうへ近寄つて、挨拶の言葉を述べた。

「おゝ、君塚君、よく來てくれたね。今夜はゆつくり遊んで行つてくれたまへ。」と、博士はよろこん

で靖也を迎へた。「おゝ、ちやうどいゝ。君塚君、君に紹介して置きたい人がある……朝倉さん、君塚

靖也君を御紹介します。いつかお話ししたことがあると思ふが……」

「あ、さうですか。」

謹嚴な子爵は椅子から起つた。

「君塚君、朝倉子爵だ。この機会によく顔を知つて頂くがいゝ。」

「は。お名前は先生からお伺ひいたしてをります。わたくしは君塚靖也と申します者で——先生の御

指導を受けてをります者で。」

靖也は頭をさげた。

博士は靖也のために椅子を探さうとすると、龍子は、いちやく合圖のやうな眼を投げて、

「靖也さん、こゝに席があいてゐるわ。こつちへいらつしやい。あなたは美知子さんも菊江んもはじ

めてなのでせう。わたしが御紹介するわ。」

棟吉は、すべてに構はず聲をかけた。

「——さあ諸君、とにかく一回讚美歌をやらう。折角、アンナ夫人がピアノを弾いてくださらうとい

ふのだから。さあ、諸君、よろしいかね。」

學生連は元氣よく立つた。

「さあ、阿母さん、どうぞ……小宮君も立ちたまへ。」

棟吉は杯を手にしたまゝ、ひとりで號令した。

ピアノが弾かれた。

もろびとこぞりて

むかへまつれ

ひさしくまちにし

主は來ませり……

眞面目なやうな、頓狂のやうな、歌の一節がうたはれた。

「駄目だね。御婦人連がちつとも合唱してくれないから。龍子、お前がそつちをまとめてくれないぢ

や困るよ。」

「靖也さん、こつちよ、この椅子にいらつしやい。」

龍子は、棟吉には見むきもしないで、靖也の手を取らんばかり、自分のはうへ連れて行つた。そこで美知子と菊江とに彼を紹介した。

人々は椅子から椅子へ立つたり腰ををろしたり談笑をつづけた。

そこに一堂の人々にはわからないことだつたが、三すくみのやうな、妙な、或る氣持の追つ駈けがはじまつてゐた。——靖也に話かけようとする龍子、龍子に話かけようとする小宮、小宮に話かけようとする菊江——

つゝましく静かなのは、美知子であつた。

みじめに騒々しいのは、棟吉であつた。

アンナ夫人の氣輕な社交振りと、壽子夫人の神妙な落ついた態度も、いゝ對照であつた。

やがてサンドキツチや、菓子や、果物や、紅茶が運ばれた。

靖也は、いつの間にか龍子の傍をはなれて、壁際の長椅子の隅に、チツと上半身をよせて黙りきつてゐた。

龍子は美知子や菊江と言葉をかはしながらも、絶えずその眼を靖也のはうへ閃かして、或る監視を

怠らぬものゝやうであつた。

「や、君塚君……しばらく會はなかつたねえ。」

小宮が、仔細ありげに、長椅子の一方へドツカと腰をおろした。

——龍子が、靖也に視線を投げようとする、きつと小宮の眼が、意地悪げに光つて彼女の眼を迎へた。

また、誰にもわからぬ、妙な、或る氣持のせり合ひがはじまつた。

ほんの通りいつべんの、久瀾を舒するだけの會話に過ぎないのであつたが、小宮の語調には、どこ

か、探り鍼のやうな、チクリと刺すものがあつた。しかし、靖也は多くを黙つてうなづいた。小宮は

靖也に話しかけながらも、龍子の氣はひをうかよつてゐた。彼はむしる靖也の前に立ちふさがつて龍

子の視線を横取しようとする風だといふはうがよかつた。

「君塚君、君はこの頃、工場へは顔を出さないで、もつぱら書齋にとごもつてゐるさうだが、なにか大きな研究をはじめてゐるのだらうと、仲間では非常な評判なのだよ。」小宮は龍子のはうへ眼をや

つたまゝ、皮肉に棄てぜりふのやうに「雄康丸の名譽恢復といふわけかね？」

名譽恢復といふ言葉は、いかにもことさらしく不快に靖也の耳に響いたが、彼は靜かに自制した。

「いや、研究といふわけぢやない。たゞ、勉強のしなほしをしてゐるといふだけのことなのだ。工場へ

も近々通ふつもりでゐるのだが、すこし身體が充分でないのね。……名譽恢復よりも健康恢復さ。」
「しかし、君はなにしろいゝ身分だよ。室田さんを叔父さんにもつてゐるのだからね。」と、小宮はなほ意地わるげな眼を、はなれた龍子とそばの靖也とに半々にやつて、「僕などは、ちよつと仕事の上で失敗しても、もう地位や信用を根こそぎ失つてしまふのだからたまらない。なにしろ造船會社の専務取締を叔父さんにもつてゐる君などは、どんなにでも働ける機會を興へて貰ふことができるのだからなあ。なんといつても君は恵まれてゐるよ。それに君は誰からも尊敬されてゐる勉強家だし、所謂鬼に金棒といふわけだ。この點、僕なんぞ無力の者はいくら羨んでもうらやみたりない位だよ。」
「いや、僕はすべてを勉強しなほすつもりで、これからは一職工となつて、船渠へ通ふつもりでゐるのだ。」

「そりやあ一職工といつても、要するに室田さんが背後にあつて、大學を優秀な成績で卒業して、そして日比野先生の秘藏弟子といふことであれば、眞の職工生活とは全然かけはなれたものだ。よし君が茶ツ葉服を着て、顔や手足を油や埃に眞つ黒にして働いてゐるといつても、そこにやつぱり君自身の恵まれた運命、選ばれた境地といふものはある筈なのだ。ちやうど富豪の令夫人なんか、貧民窟を視察するやうなもので、同情とか人類愛とかいつてはゐながらも、自分にはちやんと安んずと快樂が保證されてゐるといふ心がある——俗にいふ「いゝ氣持」つてやつだね。一職工として働くなどといつ

たところで、君の心のどこかには、失敬な言葉のやうだが、どうもこの「いゝ氣持」がありはしないかを疑ふよ。それよりも君は、僕などに羨ましがられるその背景を利用して、グン／＼自分の地歩を築いてゆくといふはうが、すつと君の眞實であるやうな氣がするのだがね。」
靖也はそれに應へようとはしなかつた。彼は「一つの心、一つの道」といふ信念によつて、かうした惑はしの擲擧を、今は苦もなく敲きのけることができるのであつた。

「小宮さん、ちよつと御相談があるのよ。」

菊江がそこへ飛び込んで來た。

「え、相談？」

「重大問題なのよ。」

「重大問題……？ はゝゝ、なんですか。」

「あのね、あとで男と女がみんなそれ／＼グループをつくつて餘興をしようつてのよ。それでね。わたし、あなたとテルコちゃんと三人で、對話をやらうと思ふの。いま、龍子姉さまに御相談したら、それがよからうつて仰有るの。あなた引受けてくださいな。」

「なに對話？」小宮はちよつとくすくすつたい顔をして「對話つて、どんなことをするんです。なんだから僕には出來さうにもありませんね。」

「なあに、なんでもないのでよ。みじかい戯曲を朗讀すればいいのよ、戯曲といつても、べつになんでもないの。子供の雑誌に出てゐる童話劇を朗讀するだけなのよ。」黄金の櫛「つていふの。わたしの役が乞食娘で、テルコちゃんやんが王女、それからあなたが狐なの。ちゃんと役割が出来てゐるのよ。」

「僕が狐……？こりやあ驚いた。」

「狐なら小宮さんの柄にあるぢやないの？」

「いつの間にか、龍子が彼等のそばに立つて笑つてゐた。」

「狐が僕の柄にあるとは、ひどいことをいひますね。この役割は龍子さんが振つたのですか？」

「え、さうよ。」

龍子はすましてゐた。

「いゝぢやないの小宮さん。わたしの役だつて乞食娘なのよ。」菊江は熱心だつた。「狐だつて、そりやあいゝ役なのよ。狐が乞食娘のもつてゐる大事な一片のパンをだまして奪つてしまふの。で、乞食娘が泣いてゐると、小な王女さまが来て、さしてゐる黄金の櫛を乞食娘にやつて、幸福にしてやらうとするよ。乞食娘は黄金の櫛よりも、パンのはうが幸福だといつて泣くお話なの。ほんの四五頁のものなのよ。すぐおしまひになつてしまふのだから、是非ひきうけてくださいな。ほんたうに狐は儲け役なのよ。たゞ狡るさうに、コン／＼鳴いてゐれば拍手喝采なのよ。」

「コン／＼鳴くつて、僕にそんな器用なことはできやしませんよ。これは願ひ下げとして頂きたいな。誰か學生連の中から探して来てあげませう。そんなことなら進んでやりたがつてゐる男があるから。」

「駄目よ。小宮さん。お姉さまが、是非あなたにこの役をやつて頂くやうにつて、ちやんときめてしまつたんですもの。わたしも小宮さんと組んでならやつてもいゝと、いつたのですもの。」

「困つたな。僕は朗讀なんてことに、まるで経験もないし、人の前でなにか藝を出すなんてことは、まつたく不得手なんですからねえ。僕がまぢると、折角菊江さんがうまくやつても、滅茶々にブチこはしてしまふことになつて、お氣の毒だ。」

「まあ、小宮さん。あんなに菊江さんが一生懸命になつてゐるのだから、何でもいゝおやんなさいよ。」

龍子は笑つた。

「龍子さんは、どうも悪戯をしていけない。できないつてことはわかつてゐながら、引つ張り出して僕を困らせようとするんだから。そして、狐なんていふ役を振りつけるんだから。」

「いゝぢやないの。」と、龍子は最前から黙りこんでゐる靖也のそばに腰をおろして、「ねえ、靖也さん狐の役なら小宮さんにもつて来てせう。地でゆけるんだから。ほゝゝ。」

「どうだね、君塚君、龍子さんは、あんなひどいことをいふのだが、君の第三者としての意見がききたいね。僕が狐の役に適してゐるかどうか……」

小宮は苦笑しながらいつた。
靖也も苦笑した。

「さあ、こんな餘興くらゐのことで、いろんな苦情をつけたり勿體つけたりするのはくだらない。
菊江さん、すぐ小宮さんを引つ張つて行くがいゝわ。」

「え、でも、お姉さまにもちよつて来て聽いて頂きたいわ。」

「僕を引つ張つて行くつて……まだ餘興には早いぢやありませんか。」

「いゝえ、その前にちよつと一回、練習をして置くのよ。」

「練習……？そんな大仰なことをしないで、たゞその童話劇の文句を讀めばいゝのでせう。まあ、
觀念して狐の役でも狸の役でもやりますから、練習なんかには及びませんよ。」

「だつて、讀みあはせをして置かないと、臺辭の受け渡しがうまくいかないわ。きつと途中で間誤つ
くものよ。さあ、ちよつとあつちの部屋へゆきませう。お姉さまも来てくださいなね。」

「わたしは行かなくつていゝわ。三人でいゝやうに讀み合はせてお置きなさい。」

「だつてお姉さまが舞臺監督だわ。」

「大丈夫……菊江さんと小宮さんが相談してやればきつと立派にできるわ。」

「だつて、お姉さまに聽いて頂かなければ練習にならないわ。」

「さうだ。龍子さんに來て貰はないぢや、練習にならない。」

小宮は笑つてはゐたが、その眼はヂツと龍子の眼を追つて光つた。

「しかたがないのね。」

龍子は靖也をチラと見て立つた。

——三人が去つた長椅子に、靖也はホツとしたやうに足を伸ばした。

「君塚さん。お一人だな。」

その時、おだやかに微笑しながら彼のそばへ來たのは、朝倉子爵だつた。

靖也は椅子から立つた。

「は……どうぞ、これへ。」

「まあ、そのまゝで。わたしもそこへ掛けさせて貰はう。」子爵は氣輕に龍子のあとへ腰をおろした。

「いゝクリスマスですな。かうして愉快にうちとけて話したり笑つたりしてゐるのを見ると、わたし
のやうな者でも、若い感激と興奮をうける。ほんたうにみんなと聲をあはせて、歌でもうたひたくな
りますな。はゝゝゝ。」

「はい。わたくしも先刻から、先生の輝いたお顔を見てゐますと、なんだか胸の底から嬉しさがこみ
あげて來て、なんだか自然に足踏みしたいやうな氣持になります。」

「さう。まったくこれは日比野さんの人格の發露ともいつていゝな。今夜呼ばれた大部分は日比野さんの愛弟子なんだが、かうして見てみると、師弟といふよりも、まるで慈父と子供といふ感じがする。一堂の者が、日比野さんを中心として集つた一族であるやうな氣持がする。實に美しい、實に楽しい團樂だ。……無禮講といふものは、とかく粗暴とか亂雑とか、間違つた東洋流の英雄主義があらはれ勝ちのものだが、今夜の無禮講は、そこに尊敬も保たれ、威儀も行はれて、みんなの心がシツクリ合つてゐる。日比野さんは眞摯な學者といふ以上に偉大なものをもつてゐると、今更敬服してゐるのですよ。」

「まったくでございます。みんな先生の御恩徳には心服してゐるのでございます。」

「かうした前途有望な人達に圍まれてゐる日比野さんは、どんなに楽しみなことだらうかね。いや、羨ましいことだ。」

子爵はしきりに首をひねつて、あたりを見廻した。

「あなた。アンナさんが、えらい難題をもつて來られましたよ。」

壽子夫人がそこへ顔を出した。

「ほう難題？ そりやどんなことだね。」

「みんな、組々をこしらへて、餘興をなにかやるのださうでございますよ。わたし達にも是非なにか

やつて貰ひたいといふので……」

「やつたらいゝではないか。みんなで愉快に遊ぶのだ。是非やるがいゝ。」

「だつて、わたし達が……ほゝゝゝ。」

「なに、大いにやるがいゝ。わしにも出来ることなら、なんでも出演するよ。こんな晩に遠慮や惡氣取はいけない。みんながそれく一藝づゝ出すのは面白い。わしもなにかやるよ。お前も美知子も、なにかやるがいゝ。みんなで遊ぶのだ。仲間はずれはいけない。」

「しかし、わたし達はその藝がないので困りますわ。」

「藝で人を感じさせようなんて思つてはいけない。たゞみんなで楽しく遊ぶんだ。」

「君塚君もなにかやりたまへ。どうだ。わしとお前と美知子と君塚君とこの四人でなにかやつて、みんなをアツと驚かせるのだな。」

「みんなをアツと驚かせるなんて、それは人を感じさせることぢやありませんか。」

「いゝや、みんなを呆れかへらせることなのだ。」子爵は笑つて、「つまり、どうすればこんな下手な藝が出せるもんかと思はせてやることなのだ。はゝゝゝ。」

「まあ。壽子夫人も笑つた。」

「こゝへ美知子を呼ぶがいゝ。四人で相談しよう。」

「さうですか。それぢやとにかく美知子を呼んでまわりませう。」

壽子夫人は、すなほに彼方へ行つて、美知子を連れて来た。

「君塚君、これはわたしの娘で美知子……どうぞよろしく。」

子爵は紹介した。

「さきほど、龍子さんから御紹介を頂きました。」

靖也は改めて目禮した。

「さあ、四人寄つた。——文珠の智慧が出るわけだね。」

「そして、みんなを呆れ返らせるのでございますか。ほゝゝゝ。」

「まあ、お前も美知子もそこへお掛け、計略は密なるをもつてよしとすだよ。はゝゝゝ。」

謹嚴な子爵にも、かうしたユーモアがあるかと思はれるほど、すつかり調子に乗つて、壽子夫人と

美知子と靖也を、かはるがはる見廻しながら、餘興の相談がはじまつたのであつた。黙り勝ちな靖也

も、つゝまじやかな美知子も、子爵の機嫌につり込まれて、いまでは互ひに笑ひながら、自分達の趣

向を考へるやうになつた。

「君塚君は一體、どんな隠し藝があるんですね？」

「は……」靖也はちよつと額を押へたが「隠し藝と申しましてはどうも……」

「美知子、なにかいゝ考へはあるかね？」

「さうでございませぬ。」

美知子は美しく瞬きをした。

「やる／＼つて仰有る、あなたはどうなのでございます？」

壽子夫人は笑つた。

「わしか……わしはワキ役で、なんでもお手傳ひするよ。」

「さう仰有ると、あなたはどんな藝でもおできなさるやうでございませぬえ。」

「お前達が行れる位の藝なら、なんでもできようぢやないか。」

子爵も笑つた。靖也も美知子も笑つた。

「あなたがた、よきよう、おかんがへできました？」

アンナ夫人が快活な歩調で近づいた。

「アンナさま、いま四人でいろ／＼智慧をしぼつてゐるのでございますよ。」

「わたしはなんでもやるといつてゐるのに、壽子も美知子も、君塚君も、まるで藝なしで困つてゐるのです。」

「まあ、御覽なさい。さつきからあんなにひとりで威張つてゐるのでございますよ。ほゝゝゝ。」

「けつこうです。朝倉さんがなにかおやりなさるといつたら、それはみんな大よろこびするにきまつてゐます。今夜は朝倉さんと先生が、どんな藝をだされるだらうかといつて、學生の人たちが、まじかまへて噂してをります。」

「ほう。それぢや、わしと日比野さんとが人氣役者だといふわけですか。」

「日比野も、なにかみんなを、びつくりさせてやりたいといつてをります。」

「そりやあ面白い。……ではわたしと日比野さんとで何かやるかな。それにあなたと壽子とで、老人組夫婦それから、君塚君と美知子と重樹とで、なにか一つ出すのだね。」

「それがよろしいです。日比野もあなたと御相談したいといつてをります。」

「それぢや、ひとつ日比野君のはうへ押しかけよう。」子爵は元氣よく立ちあがつた。「では君塚君、君は美知子に重樹と組んでなにかやりたまへ、若い者は若い同士がいい。」

「は……しかし……」

靖也がなにかいはうとするのに、子爵は椅子を離れて、アンナ夫人といつしよに博士のはうへ出かけて行つた。

「まあ、阿父さまは、まるでいつもとちがつていらつしやるよ。……では、美知子、お前は君塚さんとなにか御相談して、重樹を入れておやりなさい。」

壽子夫人も笑ひながら、子爵のあとを追つた。

——残された靖也と美知子は、顔を見あはせて、思はず微笑した。

「……どういたしませう？」

「さうですな。困りましたな。しかしなにかやらねばなりませんまい。……實は北海道の雪の唄で、僕ちよつとうる覺えに覺えてゐるのがあるのですが。」

僕の家の下女から教はつたのですが。」

「まあ、それはめづらしくつて、面白うございませう。」

「それを、なんでもピアノをかまはず僕がうたひませう。あなたにひいて頂いて、重樹さんに手拍子でもうつて、思ひつきのまゝ踊らせるんですね。」

「でも、ピアノと申しましたも……」

美知子は困つたやうに眉を寄せた。

「いゝえ、いゝ加減に、なにか雪が降り積もつたやうな静かな心持のものを弾いて頂けばいゝのです。さうすれば、僕は僕で勝手にうたひます。それを重樹さんは重樹さんで、勝手に踊る……なんでもいゝ、雪つていふ心持さへ出れば——いや出なくつても——いゝのですからな。」

「まあ。……でも、わたくし、そのやうな即興的な曲は、とても駄目でございませうわ。」

「いゝえ。どうでも構ひませんよ。どうせ僕の唄からして調子も何もあつたものぢやないのですから。」
兩人はまた顔見あはせて微笑した。

「クリスマス・ツリーの蔭をすかして、それをヂツとうかゞつてゐたのは、いつの間には別室か
らもどつた龍子であつた。」
ツカ／＼と彼女は、兩人の前に現はれた。

「おや、なにか御相談……?」

龍子は妖しく笑みつくろつていつた。

「まあ、龍子姉さまどうぞ。」美知子は立つて席をゆづつた。

「御免遊ばせ。」龍子は遠慮せず、ズツと兩人の間に割り込んで、「大層、お話がはずんでゐるやうでござ
いますのね。お邪魔ぢやありませんか。」

「いゝえ。なんでもないのです。なんでも餘興を、君塚さんとわたしとでするがいゝつていふ、父
の命令なんで困つてゐるのでございますよ。」
美知子は事もなく笑つた。

「まあ、さう……靖也さんと美知子さんとお組みなら、きつと大人氣でござりますよ。ちやうど
つてつれの、お似合ひですしねえ。」

「龍子姉さまは、どんな組でゐらつしやいますの?」

「なに、わたし見たいなお婆さんぢや、もうおしまひですよ。わたしと組みたいなんていふ特志家は
ないのですからねえ。……でも、みんな何かやらなければならないのだつて申しますから、わたしは
こゝの書生かなんかと組みませうかねえ。ほゝゝゝ。」

「あら、龍子姉さまは、御主人とお組になつて、是非なにかおやり遊ばすと、ようござりますわ。」

「飛んだことで……!」と、龍子は自から嘲るやうに、「隈部になにができるもんでござりますか。あの
人は、こんな席では、せいぜい音頭取か世話役かで、ひとりでワイ／＼騒ぎ立てゝゐる位が關の山な
のですよ。ほんたうに見つともなくて、わたし、肩身のせまい思ひをしてゐるのでございます。ほゝ
ほゝゝゝ。」

靖也は、龍子の言葉に、また不快らしい顔をそむけてしまつた。

龍子がかまはず續けて、

「まあ、なんにしても、靖也さんと美知子さんの組の餘興は、謹んで拜見したいものでござりますわ
ねえ……どんな御相談ができましたの?」

「いや、なんといふ智慧も出ないので困つてゐるのです。」と、靖也は美知子がなにか應へようとする
のを遮つて、「龍子さん、なにか僕たちにできるやうな、簡単な容易なものはありませんか。」

「さうね……そうく、お兩人でなら、ロミオとジュリエットか、トリスタンとイソルデか、そんな素晴らしい戀の場面の朗讀でもなすつちや……小宮さんや菊江さんたちは、テルコちゃんを入れて、なんでも童話劇の對話をやることになつてゐます。その向ふを張つてひとつ……」

「まあ、ロミオとジュリエット！」美知子は眼をみはつて「ほゝゝゝゝゝゝ。」

「どう？ 靖也さん。」

「……」

靖也はますます苦い顔をして、黙つてしまつた。

「小宮さんは狐の役を引き受けたのですよ。狐はあの人の柄相應でせう？——しかし、柄といへば靖也さんにはロミオの柄よりもハムレットねえ。で、美知子さんがオフェリア！——いや、これも柄だけで靖也さんには無理かも知れない。」龍子はなぜともつかず、美知子にチラと鋭い眼をくれて、「美知子さん。この靖也さんは、二生戀つてものをしないといつてゐる人なんです。戀のできない人なんです。それにロミオやハムレットやトリスタンは駄目ねえ。ほゝゝゝゝゝ！」

「まあ。」と美知子はどう返事していか顔を赤らめたが、「龍子姉さま。その様なむづかしいものは、何しても駄目でございますよ。それにこの組にも重樹といふ子役が入れてあるのでございますから。」
「だつて、靖也さんに、戀をするやうな情熱があれば、ロミオでもハムレットでもトリスタンでもや

らせて、あなたがその相手役で、重樹さんには、戀の使ひのキューピットでもさせるのですねえ。なにか短い戀の祝福つていふやう一な言をつくつて、おしまひに無邪氣に叫ばせると、そりや大喝采でせうがねえ。なにしろ惜しいことに靖也さんは、戀せぬ人、戀知らぬ人だから、柄はあつても地がないので駄目ねえ。ほゝゝゝゝゝ。」

龍子は傍若無人の態度で、胸をそらせるやうに高笑ひした。

美知子は、なんだか靖也を氣の毒さうに見た。

——しかし、とにかく餘興ははじまつた。

やつぱり棟吉がひとりで騒いで、番組の報告者にもなり進行係にもなつた。彼は勿論龍子と組んでなにかやりたい風だつたが、てんで龍子が彼の傍に寄らうともしないので、しかたなく學士連にまじつて、アンナ夫人のピアノにあはせながら、面白くもなさうに、英國々歌をうたつた。それから菊江小宮の組の童話劇朗讀。龍子は學生連をひきうけて、ピアノの前に腰かけ、彼等の出鱈目な合唱に一曲を弾いた。

なんといつても大喝采だつたのは、温容な日比野博士と謹嚴な朝倉子爵が、アンナ、壽子兩夫人と並んでうたつた大眞面目の「鳩ボツボ」と「桃太郎」であつた。それから最後に靖也と美知子と重樹の組がやつた「雪の歌」は、案外ピアノと歌と踊がシツクリ合つて、當夜第一の傑作だと、みんなの

拍手を買った。

「や、君塚さん、あなたはなか／＼えらい隠し藝をもつてゐるぢやないか。」

「學生連は、これはきつと豫てから、内々準備してゐたにちがひないといつてゐるよ。いや、そんなことはない。君塚君と美知子さんは、今夜はじめて會つたのだといつたら、驚いてゐるよ。」

子爵と博士は、笑ひながら靖也と美知子に握手した。

こゝで博士のために、また子爵のために、學士學生連は萬歳を三唱した。

アンナ夫人は棟吉にせかれて、三度びピアノに向つた。

浮き立つやうなウオルツが弾き出された。

クリスマス・ツリイをめぐつて、一同の舞踊がはじまつた。床の上に、影と影とがからみあひ、音と音が入り亂れて、綾でも織るやうに、組と組とは右と左に摺れちがつた。學生の中に、舞踊も知らない同士が寄り合つて、無茶苦茶に跳ねてゐるのも大愛嬌であつた。

菊江は無理にも小宮とパアトになつた。龍子はまたも近づかうとする棟吉を眼で叱つて、わざとのやうに、アメリカ歸りらしい、氣障つほい學士連の一人を選んで踊つた。博士と子爵と壽子夫人とは長椅子から手拍子をとりながら愉快げにみんなを見た。

ひとり靖也はそれに加はらなかつた。彼はズツとはなれた窓際に身をもたせて、天井のはうを眺め

てゐた。美知子は、それと反對の側の、ピアノの傍らから、ほんのり上氣した顔を、テルコと重樹の無邪氣な一組に向けて、可愛らしげに見つめてゐた。

ピアノはやゝ急調になつた。

クリスマス・ツリイの金絲銀絲が、人々の腕や肩に、觸れるともなく觸れて美しく揺れた。

小宮はやつと菊江からはなれて、壁際に休んだ。ちやうどそこへ、龍子の組も休んで立つた。

この機會を小宮のがさなかつた。彼はすぐ龍子の傍に寄つた。

「龍子さん。」

「……え、なあに。」

「あなたは、とう／＼僕にお會ひくださりませんでしたね。」

小宮の聲は低く——強かつた。

「だつて、テニスの納會試合には出かけなかつたのですもの。」

「……しかし、そのうちいつかはお會ひくださるでせうね？」

「さうね。會へたら。」

「會へたらぢやありませんぜ。是非會つて頂きたいものですね。お話があるんです。」

「駄目よ。あなたのお話は碌なお話ぢやないのだから。」

「……龍子さん。」小宮は例の狡み笑ひをして、「あなたは、今夜、見事に敗北ですな。」

「……敗北？……なにが？」

「は、は、は。なにもかもこの小宮にはわかつてゐますよ。まことにお氣の毒で……」

「なにがお氣の毒なの？」

「さあ、なにがでせうかね。……とにかく、今夜君塚君と朝倉さんのお嬢さんが餘興に大成功でしたよ。」

「……え、それはたしかにさうだつた。だがそれがどうしたの？」

「は、は、は。あなたはまだ意地つ張りをいつてゐますねえ。」

「變なことをいふのね。わたしがどう意地つ張なの？」

「さすがの龍子さんも、すっかりあの朴念仁にやつつけられたといひたいのです。」

「……」

龍子はちよつと言葉をつまらせた。

小宮は意地わるげに口をゆがめて、

「……まあ、ちよつと御覽なさい。あすこに君塚君があゝして立つてゐるでせう。そら、天井を睨んで、どこに誰がゐるかつていふ顔で……しかし、よく氣をつけて御覽なさい。あの男の眼が天井から

どんな角度で、どこへチラツと動くか……そら、動いた……どうです。そしてその視線の對角線上にどんな人が立つてゐます？」

彼は頷をつき出して、龍子の袖をツツとひいた。

龍子を見た。——美知子の眼と、靖也の眼が、まったく偶然らしく出合つて、急いでわきにそらされたのであつた。

「は、は、は。……どうです。」

「なにがどうなの？」

「は、は、は。あなたはそんな鈍感な人ぢやない筈だ。」

「角度だとか、對角線だとか、初等幾何をお復習するやうなことをいつてくれたつて、わかりはしな

501

「わかりませんか。は、は、は。まあ、わからなきやそれでいゝです。」小宮は皮肉らしくうなづいて、「それはそれでいゝとしてもですな。僕とお會ひしてくださいる日は、いつにして頂けませうか。もう年内では御多忙でせうから、春になつてとしてですな……」

「初等幾何のお復習で思ひ出したことがあるわ。」龍子は小宮にまけぬ皮肉な調子でいつた。「二つの平行線は相會はぬといふことをね。ほ、ほ、ほ。」

「いや、龍子さん。駄目です。平行線はいつかは相會ふものなのです。高等數學ではちゃんとそれが證明されてゐます。」

「それはあなたのやうな工學士に必要な知識でせう。しかし、わたしは生憎、初等の平面幾何しか習はなかつたので、どうにもわからないことですねえ。」

「まあ、くだらない問答はよして、是非一度會つて頂きませう。」

「えー——わたし、そのうち、高等數學を習つて置きませう。」

龍子はブイとそこをはなれた。

「小宮さん。さあ、もう一度お願いしてよ。」

またしても菊江は追ひすがつて來た。

「菊江さん、僕はもうひどく疲れましたよ。」

「大丈夫よ。あなたは運動の選手だつていふぢやありませんか。これ位のことには疲れたとはいはさないわ。」

菊江は澁面つくる小宮の手をかまはず引きとつた。

小宮は龍子がどこへゆくかを見た。——まったく意想外なことに、彼女は靖也のはうへはゆかなかつた。そこにウロついてゐる棟吉のそばへ寄つて、だしぬけに手をとると、いかにも睦まじさうに、

舞踊をはじめたのであつた。面喰つた棟吉は、それでも大喜びで、上半身をゼンマイ仕掛のやうに振りながら、人々の間を縫つて踊つた。

龍子は、棟吉をグン／＼ひつ立て、小宮の前から靖也の前へと踊つて行つた。

「あら、まあ、お兄さまとお姉さまとがパートになつてゐらつしやるわ。」菊江はめづらしさうにそれを見て、「さあ、わたし達ももう一度……」

——彼女が振りかへつて驚いたことには、小宮はいつの間にか壁際をすりぬけて、博士や子爵のゐる長椅子の前に、なにか挨拶してゐるところであつた。彼は歸り仕度してゐるらしかつた。

「あら、小宮さん。」

菊江は駆け寄つた。

「……では、菊江さん、今晚はこれで失禮いたします。大變愉快でありがたうございよした。」

小宮は、呆氣にとられてゐる菊江に、わざと叮嚀に頭をさげた。

アンナ夫人はピアノをやめた。

二つ三つまだ踊りつゞけてゐた組も、互に一禮してはなれた。

——もう十時をすこし過ぎてゐた。

「では、みなさん、これで今夜の會を閉ぢることにいたします。かうして一夕胸襟をひらいて談笑い

たしましたことは、この上もない満足でございます。謹んでお禮を申し上げ、なんのおもてなしもできなかつたことを、深くお詫びいたします。」

博士は椅子から立つて鄭重な閉會の言葉を述べた、

……挨拶と挨拶——學士學生の連中も辭去し、朝倉子爵の一行も別れをつけて玄關に出た時は、おだやかな師走の夜ながら、風がすこし募りかけてゐた。

奇 禍

靖也も支度をして玄關に出た。

「君塚君のお住居はどこですか？」

子爵は訊いた。

「は……本郷西片町で。」

「ほう。本郷西片町……わたし達は小石川の高等師範の脇だが、ちやうどいゝ道づれだ。一緒に歸りませうかな。」

「は……しかし……」

靖也は子爵の好意だけ謝して、そのまゝ電車の停留場まであるくつもりだつた。

「まあ、途中まで一緒に歸らうぢやありませんか。ちやうど自動車は四人乗れるのです。重樹は小荷物だから壽子の膝の上で充分だ。……西片町なら、春日町か、柳町あたりまで送つてあげよう。」

「君塚君さうして貰ふがいゝぢやないか。」

玄關まで見送りに出た博士も、口を添へた。

「は……では、遠慮なくさうさせて頂きます。」

靖也は頭をさげた。

別れの挨拶が互にかはされて、子爵夫妻が重樹をつれてまづ自動車に入つた。つゞいて美智子と靖也は譲りあふやうに、車のなかで肩をならべた時、人々のうしろからヂツとそれを見てゐた龍子は、嘲るやうに空ろそぶいたが、「では、左様なら。」や、失禮しました。」と、言葉をかけて自動車がグツと階段をはなれると、忌々しげに舌打して、強く下唇を噛んだ。

博士邸の門を出て、一聯隊の坂をのぼりきると、自動車は速力を増した。

「いや、實に愉快だつた。」子爵は手套を出してはめながら、「わしも久しぶりに昔の元氣が出た。やつぱり若い人達は活氣があつていい。海上生活をしてゐた時代は、毎日大きな自然を相手に、逞しく勇ましい水兵連と大きな家族の一人になつてゐたのだから、そりやあ元氣なものだつた。眼に見るもの

は空と水の青さで、いつも新鮮に洗ひ出されてゐる。耳に響くものは若い血の氣の多い人間の精一杯に怒鳴りあふ聲だ。實に愉快だつたが、その愉快を、今夜は久しぶりに味はうことができた。これからわしは大いに若い人と話し合つて、新しい活氣をつけて貰ひたいと思ふ。君塚さんも時々遊びに来てくれたまへ。」

「は……これを御縁に、お伺ひさせて頂きます。どうぞよろしく。」

「是非やつて来てくれたまへ。」子爵は念を押して、「造船をやつてゐられるなら、まんざらわしに縁のないことでもない。君は非常な勉強家であり研究家であることは、日比野さんから今夜も聞いたが、どうか時々来て、僕に新しい知識を吹き入れてくれたまへ。わしは今では政治のはうへ携はつてゐるが、船のことは一生研究して見たいのです。」

「恐れ入ります。是非お伺ひして、いろ／＼御指導を願ひたいと存じてをります。」

「わしの家は壽子と美智子と女ばかりで、話相手がない。重樹はついこの間までは、晩飯のあとでわしと角力の相手になつたが、この頃ではすこし大人びて、もうそれもしなくなつた。はゝゝ。」

「お幾歳でゐらつしやいますか？」

「もう十三です。來春は中學の入學試験を受けねばならぬのでな。……君塚さんがおいでの時は、お復習をして頂きたいのだ。甚だ厚顔ましいお願ひですがな。」

「あなた、ほんとうに、どうぞよろしくお願ひいたします。」

と、壽子夫人も、そのあとから頭をさげた。

「は……いや、それ位のことなら、わたしにできるやうでございます。」

「これも、君塚さんのやうな秀才になつてくれるといふんだがな。」

「ほんたうでございますねえ。……重樹、お前もよく君塚さんにお願ひするがいゝよ。」

「僕、読み方と算術が得意なの。」

重樹は賢さうな眼を、クルリとさせた。

「まあ、そんなに自惚れてゐると、入學試験は駄目ですよ。なんでも一生懸命に勉強しないぢや……」

壽子夫人は、自分の膝にもたれてゐる重樹の帽子をなほしてやりながらいつた。

——この時であつた。運轉手ははげしく警笛を鳴らした。

靖也はうしろに振りむいて、運轉手臺のはうを見た。ギラリと光る二つのヘッド・ライトが、前方をバツと駆けぬけようとした。——一瞬！ 子爵のはうへ壽子夫人は重樹とともにうつぶした。

「あれ！」

美智子は叫んだ。靖也は無意識に兩手で彼女を抱へた。——途端、すさまじい激動が、彼の肩と額のあたりを撃つた。

「大丈夫——」

彼は叫んだ。……叫ぼうとした。……叫んだやうに思った。
眼の前に眞黒なものが崩れ落ちて、彼は昏々と正氣を失つてしまった。

駿河臺の五外科病院の一等室に、病床からやゝはなれて椅子をならべて、靜かに應對してゐるのは康子と壽子夫人とであつた。夫人のかたはらには、美知子が心を痛めながら、始終病床のはうに眼をはなさず腰かけてゐた。

「……ほんたうに、なんとも申譯のないことで……美知子をおかばひくですつたばつかりに、こんなことになりまして……」

壽子夫人は途切れ勝ちに、氣の毒さうにいつた。——美知子もうなだれた。

「いゝえ、まつたくの災難でございますから、決してお心におかけくださいませぬやうに……でも、あなたさまにもお嬢さまにも怪我がなくなつて、なによりのことでございますました。康子は軽い調子で、運轉手さんもどこか、お痛めなすつたさうでございますが？……」

「運轉手は案外輕傷でございますました。ほんの右足の關節をうつたゞけで、運よく車の外へ轉げ出した

のださうでございます。主人も、自分達はかすり傷ひとつ負はないで、かうして君塚さんだけに——それも美知子をおかばひくですつたわけで——こんなに大怪我をさせたことは、なんとも濟まないことだと、繰りかへし／＼申してゐるのでございます。唯今も一緒にお見舞に来るやう申してをりましたすが、議會間近かで、急な電話がかかりましたので、一足おくれて用がすみ次第お伺ひたすやう申してをりました。」

「いえ、もう、お忙がしくわらつしやいますお身體で、お見舞くださるなどと、かへつて恐縮でございます。」

「……あれから、いかゞでございますか？」

「はい、昨夜は苦しみましたやうでございますが、今朝ほどからよく熟睡いたしました。醫師も経過はいゝから、この上熱さへでなければ、二週間もたてば退院できると仰有つておいでございました。」
「どうか一日も早くよくおなりなさいますやう、お祈りいたします。……美知子でお役に立ちますなら、毎日でもさしあげて……」

「どういたしまして……」康子は軽く笑つて「なに、宅からは、この下女が參つてをりますので、それに看護婦の方も職業柄ではありませうが、大變よく氣がついて親切でございますから……わたくしなども、もう二三日もたつたら、毎日來ずともいゝと考へてゐる位なのでございます。」

……病床に、顔から肩へかけて繻帯したまゝ横たはつてゐる靖也は、この時、低く呻きながら、無意識に寝返りをうたうとした。

三人はハツとそのほうを見た。

「顔の上へ日がさしてこんでゐる様だね。眩いのだらう。……お加代そのカーテンをひいておくれ。」
美知子が立つて、窓のカーテンを閉め寄せようとした。

「いえ、わしが……」

病床の裾のはうに、しやがんでゐたお加代は、美知子より早く駆け寄つて、カーテンを閉めた。

兩人は、思はず顔をあはせて、無言のまゝ頭をさげた。美知子は静かに椅子にもどつた。お加代はジツと偷むやうに、美知子の姿に眼をやつた。

靖也はそのまゝ動かなかつた。

「よくお眠りのやうでございますのねえ。」

美知子はちよつと所在なげにいつた。

「お前もこれから、毎日、ちよつとでもお手傳ひにあげるがいゝね。」

壽子夫人はいつた。美知子はうなづいた。

「お嬢さま、決して御心配には及びません。もう大丈夫なのでございますから。」

「でも、わたくしのために、こんなお怪我をなすつたのでございますから……」

「またそんなことを仰有つて……そんな風にお考へくだすつては、かへつてわたくしが心苦しうございます。災難と申すものは、あとから思つていろゝ解釋はつくものでございますが、それが降りかゝつて来る時は、その人間として致しかたのないことで、こんなことをお氣におかけくだすつては、ほんたうになんと申していゝやら、わたくしのはうにこそ申しあげる言葉がございません。」

「……でも……」

美知子は病床のはうへ眼をやつた。

こつちを見てゐたお加代は、あわてゝ眼をそらした。

壽子夫人は、ひとりうなづいて、

「……こゝで、かやうにお話してゐまして、折角よくお眠りの御病人の、お目をさませるやうなことがあつてはなりません。今日はこれで失禮いたしますが、どうか御病人にお氣をつけ遊ばして……明日にでもまた、改めてお見舞にあがりたく存じます。」

「まあ、わざわざお見舞を有難う存じます。この上のお見舞をうけましては、ほんたうに心苦しうございませうから、どうかそのやうなことは御無用に遊ばして……」

康子は叮嚀に頭をさげた。

互ひの挨拶がすんで、壽子夫人と美知子は病室を出た。康子があとについて、室のドアを閉めよせようとした時、美知子は振りかへつて再び病床のほうを見た。カーテンの青い反映の中に、白布の蒲團から乗り出すやうに、苦しげに喘いで眠る靖也に、彼女は感謝するやうな眼で黙禮した。

——静かに廊下を足音が遠ざかると、お加代は立つて、病床の裾をソツと敲いた。

「う、う……む！」

靖也は顔をしかめた。

彼女は驚いて、落ちかゝつた額の氷嚢を恐る／＼なほした。

靖也はフツと熱い息を吹いたが、グツタリしたやうに、そのまゝまた深い昏睡に陥ちた。

ヂツと立つたお加代は、はじめて安心したやうに、靖也の顔を見守つてゐたが、ふとなんとも知れぬ悲しい淋しい心持が、こみあげるやうに胸に湧いて來た。切れ長い彼女の眼尻は次第にうるんで、ホロ／＼涙が頬に傳はつたのであつた。

このまゝでゐたら、彼女はもうたまらなくなつて、聲をもらして咽び泣きしたにちがひない。——その時、ギツとドアが開いた。

あはて、涙をかくして、彼女は顔をあげた。

高柴が立つてゐた。

「……今、新聞で読んでやつて來たのだ。君塚君は……どうだね？」

彼の聲が思はず高かつたので、お加代は手をあげて制した。そして、笑顔で、病人が大丈夫であることを知らせた。

高柴も、やつと胸をなでおろしたやうに、椅子に腰をおろしたが、あたりを見廻はしながら低聲で

「お加代さん。君ひとりだけなのかい？」

「いゝえ、大奥さまもおいでで……今、お見舞のお方を見送つて……」

「さうか。」高柴は、隣きもせず病床のほうを見つめて、昨夜、十一時頃の出來事だといふのだね。それにしても、なぜ僕にすぐ電話をかけてくれなかつたのだ。」

「みんなでびつくりして、病院へお運びするやらなにやら、夢中だつたのでございますもの。」

「それにしても、今朝は第一に僕のところへ知らせしてくれなくちやならん筈だ。……また今日に限つて、僕は新聞を読まなくつて、学校の職員室でふとなんの氣もなく第七面を見ると、あの自動車の衝突の記事なんだらう。まつたく驚いて、午後の講義なんか休んじまつて、そのまゝ駆けつけたんだ。」

「有難うございます。」

「なにしろ阿母さんが來られたら、なぜ僕に知らせなかつたか、大いに談じなけりやならん。」

「それは御無理で……大奥さまも昨夜からまるでひと眠りもしてはをられませぬのですもの……阿父

つあんは家で留守をせねばならず……まつたく、今まで、どうしたらよいか、わしと二人でウロクしてゐたんでございますもの。」

「それがいかんだ。僕を呼べば、すぐなんでも手廻しができたのだ。こんな時は女ばかりでどうすることもできるもんぢやない。男がゐなければ……」

また聲が高かつたか、靖也は、「うゝむ」と呻き乍ら寢返りした。高柴はあはてゝ口に手をやつた。ドアを開けて、康子が戻つて來た。

三日が過ぎた。

靖也の経過はいゝほうではあつたが、まだ熱が高かつた。苦しげに喘いだり、また、ともすると嘔語をいつたりした。時とすると、動かぬ手を無理に動かして、なにか眼の前に迫つて來るものを、拂ひのけるやうに、寢返りをうつた。

お加代はそのたび、ひとりで氷嚢を押へたり、蒲團をかけなほしたり、靜かに、靖也の胸から足のはうをさすつてやつた。

烙けついたやうな眼を、グツとあけて、靖也は空間の一點を強く見据ゑた。彼の呼吸は深く波うつ

やうであつた。また小刻みに震へるやうでもあつた。彼はなにか言はうとするらしかつた。が、咽喉が乾いて聲がかすれた。お加代はぬらしたガーゼで、ソツと彼の唇を拭いてやつた。

「お苦しいのでございますか……」

彼女は、のぞくやうにいつた。

靖也は黙つて、またデツと窓のはうへ頭をむけた。

お加代は、まくられた彼の蒲團を、靜かにひきあげながら、

「……お苦しいのでございますか……?」

「……いゝや……」

「どこがおさすりいたしませうか……?」

靖也は應へなかつた。

お加代は立つたまゝ、病床の上を見まもつた。

「……暗……」

「……は?」

「……暗……そこをのいてゐてくれ。」

お加代はびつくりして、裾のはうへうづくまつた。

窓硝子のそとは、曇つた日が、鉛色のやうな光を落して、霜枯の萩の上を、翅の弱つた土蜂が、フ
ラ／＼さまよつてゐた。

彼女は見るともなしに、そのはうを見た。恨めしいとも悲しいとも、意味のつかぬ淋しさが、また
彼女の小さな胸に滲み出るのであつた。ソツと眼を振りむけて、蒲團の蔭から枕のはうをうかがつた
が、氷嚢をつるした紐が、かすかにゆれてゐるばかりで、靖也の顔は見えなかつた。——彼女はたゞ
もう一生懸命なのであつた。自分の身に代へても、靖也を一日もはやく快方にむかはせたいと念じて
念じてゐるのであつた。が、なぜか恨めしい、なぜか悲しい。彼女は知らず／＼蒲團の裾をなでて
自分の手を。ふと見つめた。水仕事に荒れた醜く赤んだ手——

彼女は、櫻貝をはめこんだやうな美しい爪をもつた美知子の手を思ひ出した。また、燦然と寶石の
光る龍子の手を思ひ出した。そして、いよく／＼形容もつかぬ淋しい心持で、ひっこませた自分の手を
軽く膝の上に重ねたのであつた。——ポツトリ、熱い滴が甲に落ちた。

「う……うゝむ……」

靖也はうめいた。

彼女はハツトして、枕もとのほうへ駆け寄つた。

「……どうなされました？」

「……あ、あ、あ！……まだ僕を……僕を苦しめやうとするのだな！……赤い唇……毒の唇！」

「どうなされましたのでございます？」

「……畜生！ おのれ……」

「まあ、旦那さま！」

夢中で振りあげやうとする靖也の手を、彼女は辛くもさへへた。

「……誰だ。」

「お加代でございます。」

「……お加代か……」

靖也はそのまゝ眼をつぶつた。お加代は氷嚢を取りかへやうと、はづしかけた。

「……阿母さんは？」

「さつき、よくお眠りのやうでございましたから、この間にちよつとお家へお歸りになつたのでござ
います。夕方までには、おいでなさるやう仰有いました。」

「……さうか。」

お加代は、はづした氷嚢をもつて、部屋の隅で氷を割りかけた。

「……うるさい。そんなところで音をたて……」

「は……」

彼女は驚いて、氷を入れたバケツをさげて廊下へ出た。

その時、看護婦に案内されて、美知子が静かに歩んで来た。

「……今日は、いかゞでゐらつしやいますの？」

美知子は軽く會釋した。

「え……まだ……」

「さう、それは……」

彼女は眉をひそめて、心配らしくドアを開けた。

お加代は音をたてぬやうに、樋一つにも注意しながら、氷を割つた。美知子が急いで部屋へ入るのを、彼女は伸びあがるやうに見送つたが、なにか氣にかゝるやうな、落ちつくことのできぬやうな風で、手早く氷嚢へ氷をつかみ入れた。で、あとを追ふやうに部屋へもどつて來ると、美知子は靖也の枕邊ちかくへ椅子をよせて、美しく微笑しながらデツとのぞき込んでゐた。

お加代は爪立するやうに、靖也の様子を見た。喘ぐやうに息づかひしながらも、靖也の頬に、なにかうなづくやうな微笑がのぼつてゐた。
彼女はツツと進み出た。

「旦那さま、氷嚢……」

しかし、そこに美知子がゐるので、彼女は病床の他の側へ廻らうとした。

「あ、わたしが吊してあげませう。」

美知子は氣づいて手を出した。

「いえ、冷たうございます。わしが……」

「まあ、ようございますわ。そちらからちや、壁際でもつかしうございますもの。」

「でも、お手が濡れます。」

「え、大丈夫。こつちへお貸しなさいまし。」

「でも……」

お加代は氷嚢を守るやうに、胸に抱へたが、美知子が熱心にせまるので、澁々ながらそれを渡さなければならなかつた。彼女はまるで大事なものを奪はれたものゝやうに、美知子が持つた氷嚢を、恨めしげに眺めた。

美知子は静かに氷嚢をつるして、靖也の額にあてがつた。靖也の眼には満足したやうなやはらかな光がうかんでゐた。——それがお加代にはまた、自分でも譯のわからないほど、なぜか辛くなさけなく恨めしかつた。

「……いかゞです。いゝお氣持？」

靖也は靜かにうなづいて唾液をのみこんだ。が、どうしたことか、プツと咽た。傷にひびくのか、彼は苦しうに眉を寄せた。美知子は驚いて、自分の絹手巾で、彼の口のあたりを拭いてやつた。

「……まあ、なにか仰有らうとしましたのね。お苦しいのですから、その儘でゐらっしゃいませ……」

「……あり……難う……」

靖也はまた咽さうに、これだけいつた。

「お加代さんがね、一生懸命に氷を割ってくれたのですわ。御存じ……？」

靖也はうなづいた。お加代はこれだけでも嬉しかった。なんだか美知子が好きな人であるやうな氣がした。——が、靖也の寝がへりうつた頬の下に、綠色の美知子の絹手巾が、そのまゝ残つてゐるのを見ると、なんだかそれが氣にかゝつた。

「旦那さまのお耳のあたりに、それが觸るとお煩さうございませう。」

彼女は美知子のわきから手をのばして、絹手巾を取らうとした。

「あ、忘れてゐました……」

美知子もあわてゝ手を出した。

「……うゝむ……」

靖也は再び寝返りうつのが苦しうであつた。

「手巾がお耳のあたりに觸つて、お煩さくはありません？ ちよつと除けておあげ申しませう。」

靖也は黙つて眼をつぶつた。

「……でも、ほんたうにお煩ささうね。」

「わしが取つて……」

お加代は手巾の端をつまんで、なんとか枕の間から引き出さうとした。

「……うゝむ……」

靖也は、さうされることが却つて煩さくもあるやうに、再び呻いて叱るやうな眼でお加代を見た。

ピツクリしてお加代は手をひっこめた。

すこし落ついたか、ウト／＼眠りかけた靖也の顔を、美知子は靜かに見守つた。

お加代はソツとまた裾へまはつて、蒲團を軽くたゝいた。

——二十分ばかりも、さうして靖也は安らかに眠つた。

美知子もお加代も、彼の眠りをさまたげないために、そしてそこに、なにか片寄つた互ひの感情が醸されてゐるために、無言のまゝ椅子によつてゐた。

時々、兩人の視線はあふともなくあつた。しかし、どこやらこぼれのある微笑とともに、急いで

そらされた。

お加代は美知子の美しい髪、美しい眉、美しい眼、美しい鼻、美しい手を、數へ立てるやうに眺めた。そして今さらのやうに、自分の姿を淋しく振りかへるのであつた。彼女はついこの間靖也が自分にいつた「お前はそのまま美しい。僕はお加代が好きだ。」といふ言葉を思ひ出した。なんとなく心強く縛りつくことのできるこの言葉を、彼女は繰りかへし思ひうかべて、またソツと美知子のはうを見た。

看護婦が入つて來た。

「あなた、お午飯はまだでせう。早く食堂へ行つておいでなさい。わたしが代つてゐますから。」

「え、そんなに食べたくなないので……」

「まあ、わたしがゐますから、安心して食べてゐらっしゃい。」

「え、……」

「こゝへ運んで貰ひませうか。」

「いえ、そんな……」

「あなた、わたくしと看護婦の方とでゐれば大丈夫ですわ。もう二時でせう。まあ御飯も食べないでよく……」美知子は感心したやうにお加代を見て、「早く行つていらつしやい。大丈夫ですから。」

「では、ちよつと……御免くださいませ。」

お加代は心もとない顔をしたが、急ぎ足に出て行つた。

看護婦は靖也の脈を見、體溫を見た。

「氷嚢はまだあるやうだが、氷枕のはうがなくなりましたのね。ちよつと取りかへませう。」

看護婦は馴れた手つきで、氷枕をはずした。美知子も手傳つて、靖也の頭をさへてやつた。

壁際にこゝんで、看護婦が氷枕に氷を入れてゐる時、美知子は恥かしげに躊躇したが、思ひきつて

靖也の額に手をあてて見た。

「お苦しい？」

靖也は微笑した。

「喉がおかはきにならない？」

靖也はまた微笑した。

美知子はそこに落ちた絹巾手を、靜かに自分の手にとつた。氷枕の冷たさが、まだそこに残つてゐた。彼女はウツカリそれを頬に押しあてたが、靖也が見てゐるのに気がつくつと、あわて、膝の上に置いた。ポツと眼のあたりを赤らめた様子には、お加代とは別のしほらしさがあつた。

看護婦が氷枕をあてる間、彼女はまた靖也の頭をジツとさへてやつた。

